

上 磯 町

矢 不 来 2 遺 跡

——一般国道228号上磯町矢不来法面防災工事埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



上磯町

矢不來2遺跡

—一般国道228号上磯町矢不來法面防災工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和61年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

目 次

口 絵	
例 言	
I 調査の概要	1
1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	1
4. 遺跡の立地と周辺の遺跡	4
5. 発掘区の設定	6
6. 層 序	6
7. 完新世の火山灰について	9
II 遺 構	12
1. 縦 穴	12
2. 焼 土	16
III 遺 物	18
1. 土 器	18
2. 石 器	40
3. その他の遺物	41
IV ま と め	55
1. 縦 穴	56
2. 接合資料	56
3. 総 括	57
付 編	60
写真図版	62

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名 一般国道228号上磯町矢不來法面防災工事矢不來2遺跡発掘調査
委託者 北海道開発局函館開発建設部
受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 矢不來2遺跡（北海道教育委員会登録番号B-06-47）
所在地 上磯郡上磯町字矢不來72-4
調査面積 1,078㎡
調査期間 昭和61年5月7日～昭和62年3月31日（発掘調査期間は昭和61年5月7日から6月20日）

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター	理事長	植村 敏
	専務理事	山本 慎一
	常務理事	藤本 英夫
	業務部長	間宮 道男
	調査部長	中村 福彦
	調査第二班長	種市 幸生
	文化財保護主事	田才 雅彦（発掘担当者）
	〃	三浦 正人
	〃	田中 哲郎

3. 調査の経緯

松前半島の海岸線を、函館市から松前町を經由して江差町にまで続く一般国道228号は、道南地方の主要道路のひとつである。このうち、上磯町富川から当別に至る間は、標高50mにも及ぶ海岸段丘直下の汀線を走っており、豪雨などで崩落の被害が発生したこともある。そのため函館開発建設部では、法面の傾斜を緩和する工事を計画し、工事予定地域内に所在する埋蔵文化財包蔵地についての事前協議書を北海道教育委員会あて提出した。

昭和55年5月以降、北海道教育委員会による所在確認調査、範囲確認調査が逐次実施され、昭和55年11月には館野2遺跡の工事立会調査が行なわれている。本遺跡については、昭和59年4月に範囲確認調査が実施され、隣接する矢不來天満宮跡とともに発掘調査が必要との結論が出された。

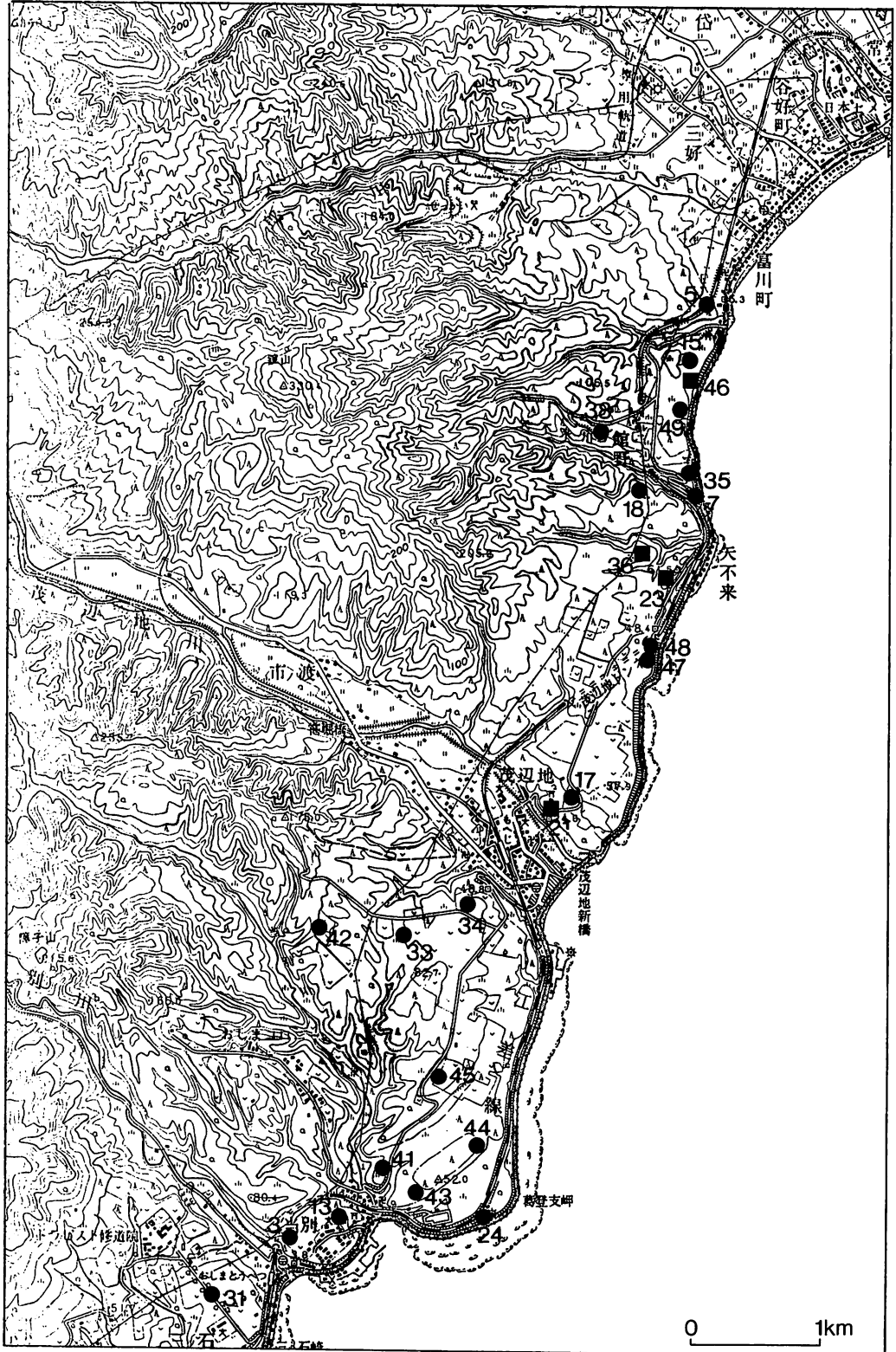


図1 矢不來2遺跡及び周辺の遺跡の位置

矢不來 2 遺跡及び周辺の遺跡

No.	遺跡名	時期	内容	調査	文献
3	当別	縄文時代	未詳		
5	寺屋敷	縄文時代	住居跡他	昭和58年	①
7	ヤギナイ	縄文時代中～晩期	未詳	昭和37・41年	②
13	丸山神社	縄文時代中期	未詳		
15	館野	縄文時代前期	未詳		②
17	茂別	縄文時代中・後期	未詳		
18	矢不來	縄文時代	未詳		
21	茂別館跡	中世	国指定史跡		③・④
23	矢不來台場跡	江戸時代, 明治2年修築	土塁, 砲台		③
24	葛登支	続縄文時代	未詳		
31	三ツ石	縄文時代	未詳		
33	茂辺地 1	縄文時代中・後期	未詳		
34	茂辺地 2	縄文時代中期	未詳		
35	館野 2	縄文時代中・後期	住居跡他	昭和55年	②
36	矢不來館跡	中世, チャシの可能性もある	三重の空壕・土塁		③・④
38	館野 3	縄文時代中期, 大正～昭和初期	住居跡, 土塁	昭和54年	②
41	当別 2	縄文時代早期	土壌	昭和58年	
42	当別川左岸	縄文時代後期	未詳		
43	当別 3	縄文時代前・後期, 擦文時代	未詳		⑤
44	当別 4	縄文時代早期	未詳		
45	茂辺地 3	縄文時代	未詳		
46	富川塁跡	明治2年構築か?	土塁, 砲台		②・③
47	矢不來 2	縄文時代前・後期, 続縄文時代	本報告	昭和61年	
48	矢不來天満宮跡	中・近世	礎石, 敷石		
49	館野 4	縄文時代中・後期	未詳		

※No.は道教委登録番号で, 図1と一致している。

文 献

- ① 北海道教育委員会 1984 「昭和58年度 渡島地区遺跡分布特別調査報告書」
- ② 上磯町教育委員会 1981 「館野 2 遺跡」
- ③ 河野常吉 1924 「北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書」
- ④ 藤本英夫編 1980 「日本城郭大系 1 北海道・沖縄」
- ⑤ 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」 北海道考古学第20輯

4. 遺跡の立地と周辺の遺跡

矢不來2遺跡は、函館湾の西岸、正面約8kmの距離に函館山を見据える標高50m前後の海岸段丘に位置する。

松前半島東岸の海岸段丘は、瀬川(1959)によって、標高100m前後の修道院面、70m前後の茂辺地面、40~30mの三ツ石面及び低位段丘面に区分されている。また、茂辺地面・三ツ石面の段丘堆積物中に多種の海棲化石珪藻が見出されることから、これらは海成段丘であるとしている。宮内・八木(1984)は、瀬川の茂辺地面と三ツ石面をM₁・M₂・M₃に区分し、M₁面の形成年代を約125,000年前、M₂面約75,000年前と推定している。

矢不來2遺跡が位置する段丘面(図2)は、幅50~100m程の狭い面で、宮内らの細分したM₂面に相当するものと考えられる。

遺跡の主体部は発掘区西側の微高地にある。北西部の窪地は、上位の段丘面からの浸透水で湿地となっており、遺跡の北側に小沢となって流れ出している。また遺跡の中央部にも、北から南へ向かって小沢が入っている。東側は、発掘区端から20m前後で段丘崖に至り、そこに立つと函館湾が一望できる。

今回の調査区周辺は、戦後の食糧難期に一時畑として利用された他は原野であり、近年スギの植林が始まっているが包含層の保存状態はかなり良好であった。

松前半島の海岸段丘は、埋蔵文化財包蔵地の分布が密なことで知られているが、矢不來地区周辺も例外ではなく、M₂面に沿っての分布が顕著である。(図1) その多くは縄文時代中期・後期の遺跡であるが、縄文時代早期から擦文時代、更に中・近世の館跡などが所在し、いつの時代にも人々にとって生活のしやすい場であったことを示している。

なお、「矢不來」の地名について永田(1984・初版1891)は、「ヤング・ナイ 舟より荷物を揚る処」の意で、それがヤギナイと訛り、「矢不來」の字を当てたもの^註としている。当初はヤギナイと読んでいたものがいつしかヤフライと変わったようで、古くから住んでいる人は現在でもヤギナイと称している。矢不來川の左岸、低位の海岸段丘上に所在するヤギナイ遺跡の名称は、こうした地元の人々の呼称から採られたものである。

郷土史家の落合治彦氏によれば、矢不來の磯の深間には古銭・陶磁器などが沈んでおり、時折採取されることがあると言う。「ヤング・ナイ」の由来を窺わせると同時に、茂別館との関係に於いても注目すべき点であり、今後の調査を期待したい。

註

上磯郷土史研究会(1963)によれば、南部義政に破れた津軽安東盛季は、嘉吉3(1443)年12月に海路ヤングナイに上陸、附近を探索したのちに現在の矢不來天満宮のある場所に大小二つの館(茂別館)を築いた。その後の度重なる戦いの中で、敵の矢が遂に一の鳥居より中に飛来することがなかったので、矢不來の名が生まれ今日に至っているという。

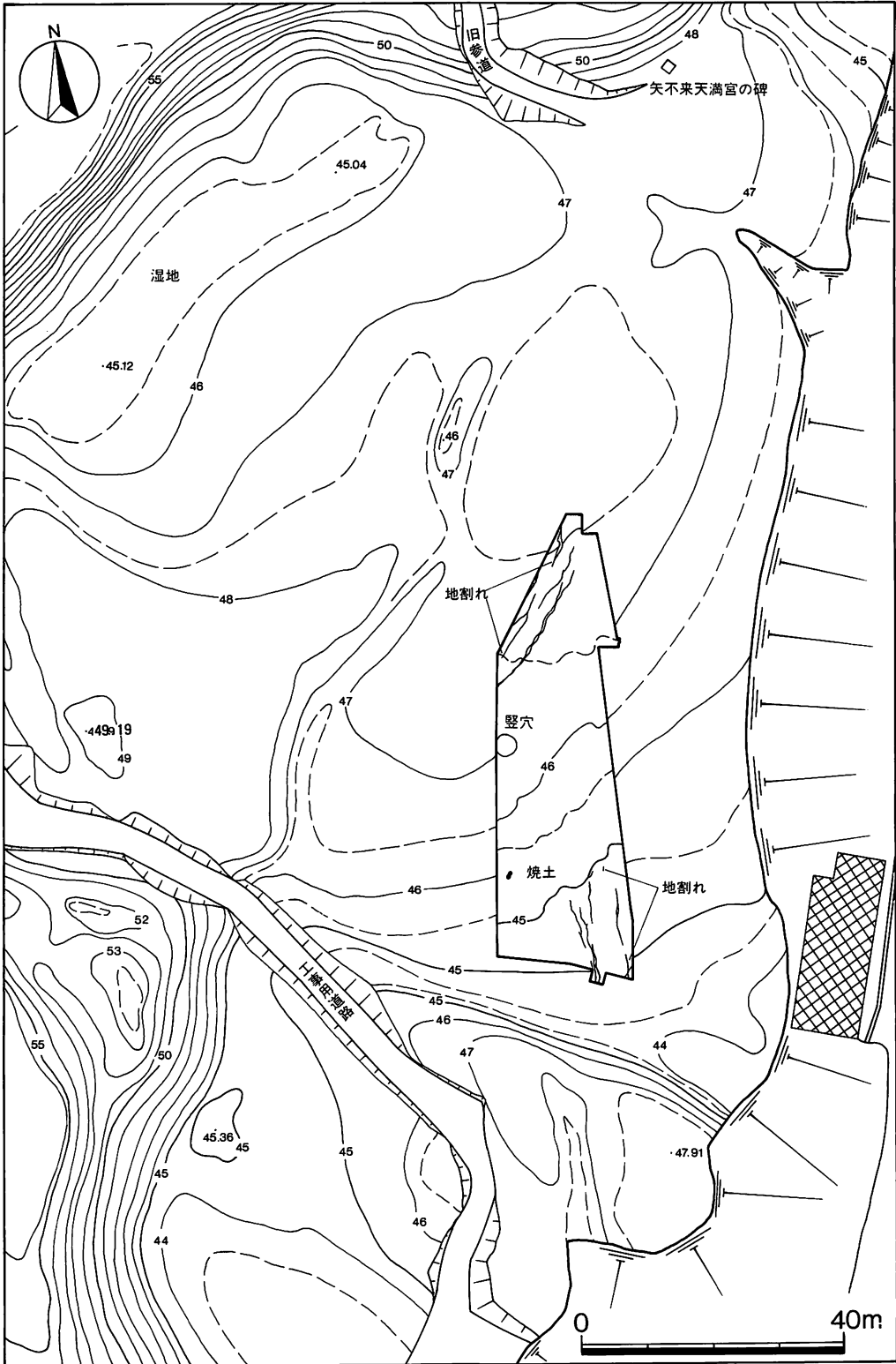


図2 遺跡周辺の地形と遺構の位置

5. 発掘区の設定

発掘区は、工事区のR5杭とR6杭を結ぶ線を基準とし、R5杭をX=2、Y=0とし、X軸の正方向を南（R6杭）側に、Y軸の正方向を東（海）側とする座標を設定した。（図3）グリッドは（XY）で表示する10m×10mの大グリッドを基本とし、各々の大グリッドを100個の1m×1mの小グリッド（xy）に分割した。各グリッドの表示は、大グリッドの場合00区・41区などとし、小グリッドを指す場合には、00-31区・41-99区などとした。

なお、X軸の方位はN-9°30'-Eである。

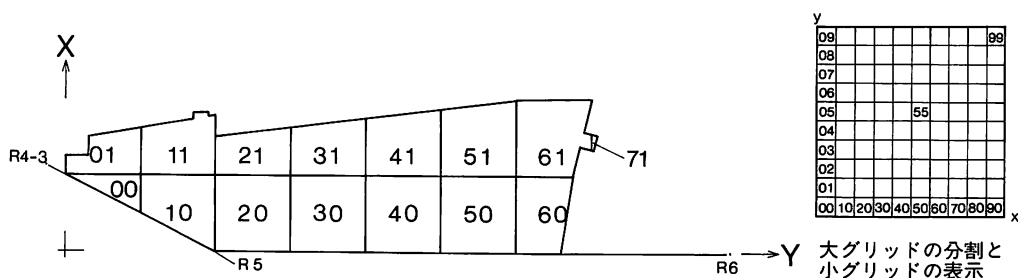


図3 発掘区の設定と表示

6. 層序

土層図は発掘区の西及び南側の壁面ととった。（図4・5）

基本層序は次のとおりである。

I層 表土 層厚10~30cmで黒褐色を呈す。

II層 遺物包含層 層厚20~50cmで黒色を呈す。61区では崖面にほぼ平行して、00~20区では等高線に沿って数条の地割れが見られる。このうち00~20区の地割れ中には、かなりの量の遺物が落ち込んでおり、遺跡が営まれた以降の地割れであることを物語っている。（図2）

III層 漸移層 層厚5~15cmで暗褐色を呈す。

IV層 黄褐色粘質土層

地割れ、風倒木により基本層の土が動かされて再堆積したものは、以下のように分類した。

II'層 黒色土 II層の土が地割れなどに流れ込んだもので、粘性が強く漆黒色を呈す。

IV'層 風倒木の影響により押し上げられたIV層の土

- 1 褐色土 III層が主体でII層とIV層を含む。粘性が強い。
- 2 暗褐色土 II層とIII層が混在。
- 3 黒褐色土 II層が主体でIV層をブロック状に含む。
- 4 黄褐色粘質土 IV層が主体でII層を若干含む
- 5 黒色土 II層に若干のIV層が混在。締りが無い。
- 6 褐色土 III層が主体でIV層を含む。

（田才 雅彦）

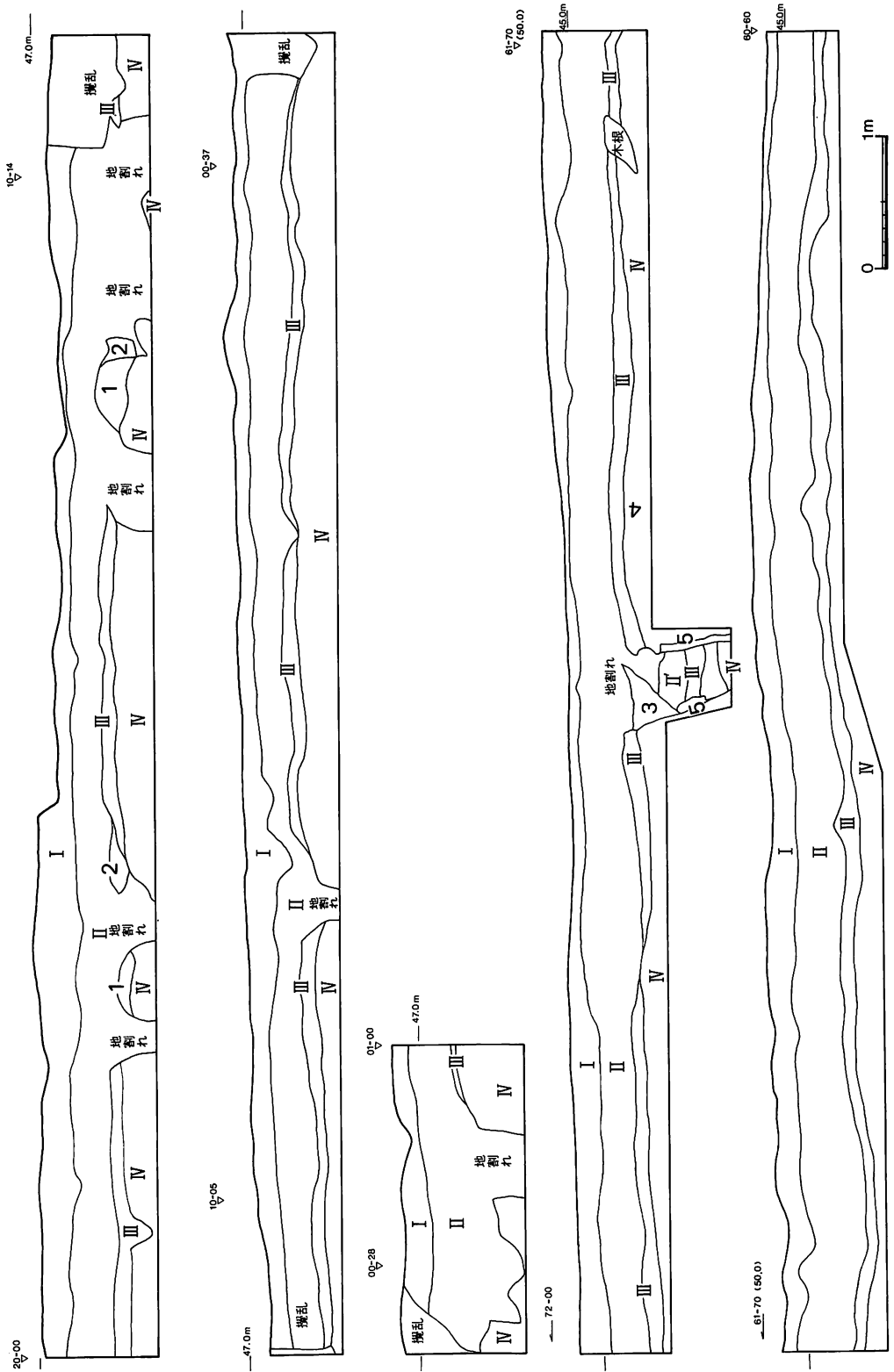


图 4 土層断面图(I)

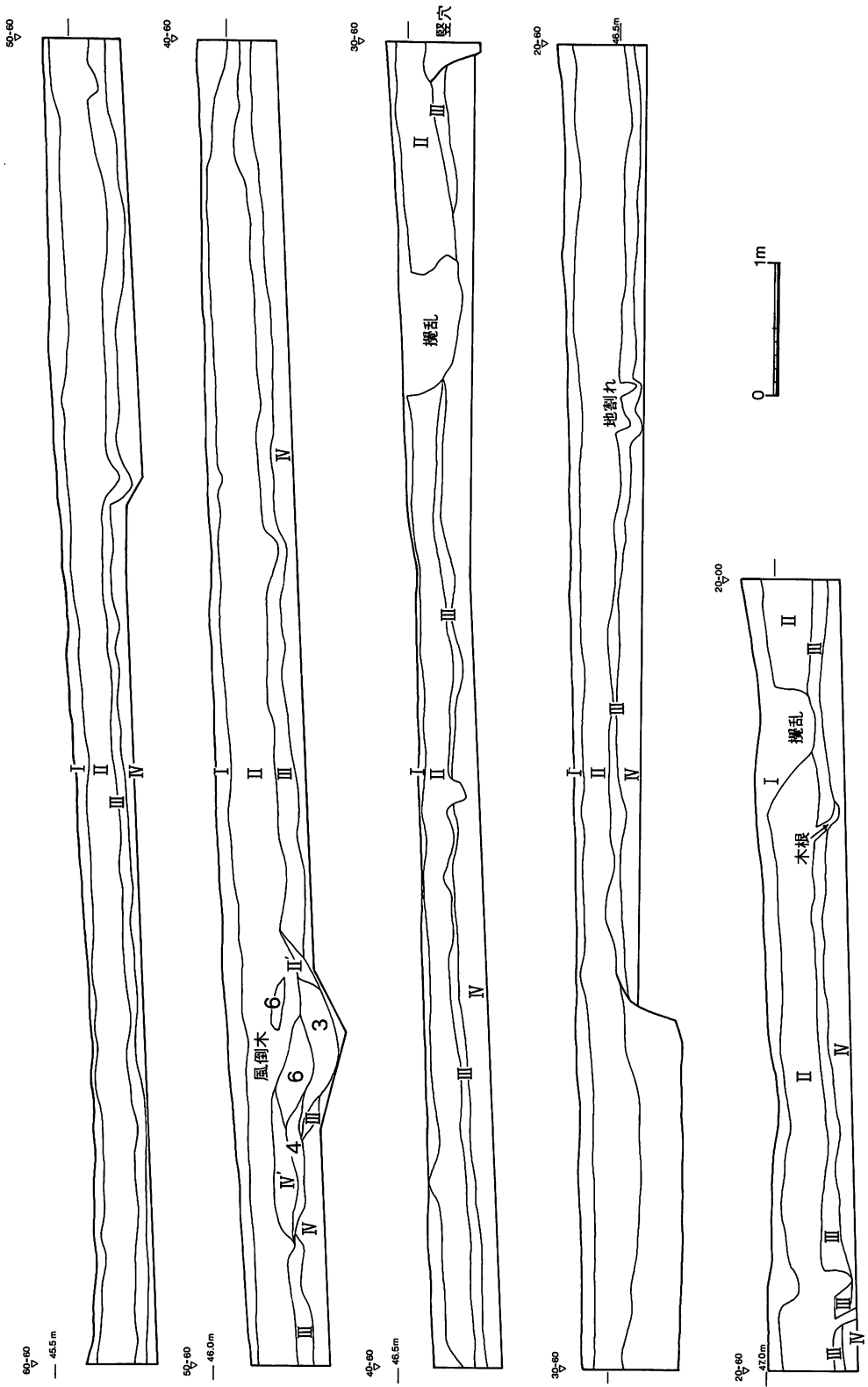


图5 土層断面图(2)

7. 完新世の火山灰について

本遺跡では野外において2枚の火山灰層が黒ボク土中に認められた。ここでは上位のものを Yf-a、下位のものを Yf-b (仮称) と呼び、他地域の火山灰との対比や編年、噴出源推定の基礎資料とするために若干の記載を行う。

試料の処理

51区の東壁断面から得た火山灰試料について、以下の手順で処理し検鏡した。

椀がけ法により泥質分を除去→6% H_2O_2 ・10% HCL 処理 (60°Cで湯煎) →水洗・乾燥後篩別→粒径 $\frac{1}{4}$ — $\frac{1}{8}$ mmのものについてカナダバルサムを封入剤としてプレパラートを作成→偏光顕微鏡下で500個以上を検鏡→各鉱物の量比を個数%で表わす。

火山ガラスについては、150個以上を検鏡し、形態分類を行った。また、浸液法による屈折率の測定を行った。火山ガラスの形態は、粒子全体の形状、気泡の形状と大きさ等によって以下のように分類した。

B型：粒子全体の形状が漿果状。軽石様で微粒の鉱物を含むことが多い。

F型：扁平で、気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L-C型：気泡が破碎し、泡壁が ridge をなして直線～曲線状に数本走るもの。

M型：気泡と泡壁のつくる模様が網目状に見えるもの。気泡の大きさはL-C型よりもはるかに小さい。

N型：B型に似るが、粒子周縁部で比較的薄く、釘状の気泡・条線が認められるもの。

P型：薄い平板状。比高が極く小さい ridge が1～2本走る場合がある。

UT：未分類。上記のどの型にも属さず、出現率は極めて低い。

各火山灰の特徴

Yf-a 2枚の火山灰層のうち上位のもので、現地表面下約20cmのところに斑点状に産出する。(写真1) 層厚約1cm、灰白色(7.5YR 8/2)を呈するシルト質の降下火山灰である。上下の黒色腐植土(黒ボク土)との層界は画然。本遺跡では発達が悪く、確認される箇所は少ない。

本火山灰は主に、斜長石と火山ガラスから成る。(図6・写真2-1~3) 重鉱物量は15%弱で、斜方輝石>不透明(鉄)鉱物>単斜輝石である。単斜輝石比(単斜輝石量/全輝石量)は0.20。火山ガラスはM型がほとんどを占め、屈折率は1,500~1,501である。

Yf-b 2枚の火山灰層のうち下位のもので、現地表面下20~50cmのところに断続的に産出する。(写真1) 層厚2~3cm、黄褐色(10YR 5/8)を呈するシルト質の降下火山灰である。下位の腐植土の浅い凹地にレンズ状に堆積しているように見える。上・下の腐植土との層界は画然。特に下位との層界は鮮明である。

本火山灰はほとんど全て火山ガラスから成り、少量の長石を含む。(図6・写真2-4) 長石の中には僅量のアルカリ長石(全検鏡数の0.6%)が含まれる。アルカリ長石は、粒径 $\frac{1}{8}$ mm>の試料では量が増加する。火山ガラスの形態は、L-C型が過半を占め、次いでM型・F型が多い。火山ガラスの屈折率は1,512~1,518である。

型が多い。火山ガラスの屈折率は1,512~1,518である。

この他、腐植土自体も火山灰を母材とする土壤であるが、野外で層の識別は困難なのでここでは火山灰層として取り扱わない。

他地域との対比

佐々木他（1970）・北海道火山灰命名委員会（1982）によれば、渡島半島部には、渡島大島・駒ヶ岳・恵山の各火山起源の火山灰が分布しており、本遺跡は、O_s-b・乙部層・K_o-白ハン・K_o-e等の分布域に入っている。これらの火山灰とYf-a・Yf-bとの関係は未詳であるが、Yf-aは、鉱物組成上乙部層に対比されるかもしれない。Yf-bは、鉱物組成や火山ガラスの形態と屈折率から、町田他（1981・1984）の「白頭山-苫小牧火山灰」に対比されると考えられる。

本遺跡周辺の遺跡で認められる火山灰とは、色調・粒度・層準・鉱物組成・火山ガラスの形態及び火山ガラスの屈折率等から、Yf-aは知内町湯の里3遺跡のYn-b火山灰、木古内町札苅遺跡のSt-a火山灰、Yf-bは同札苅遺跡のSt-c火山灰（北海道埋蔵文化財センター1986a・b）に対比することができる。

年代

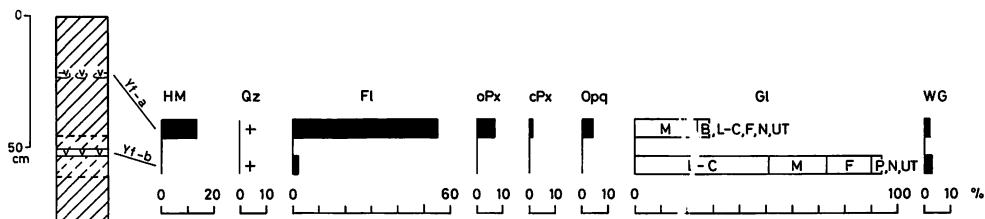
Yf-a・Yf-bともに、遺物との関係を直接に示す地質断面は遺跡内では認められない。しかし、Yf-bは、「白頭山-苫小牧火山灰」に対比されると考えられるので、擦文時代（町田他 前出）の火山灰である。Yf-aはこれより新しい火山灰であるが、年代は不明である。

まとめ

本遺跡で認められた火山灰についてまとめると以下の通りである。

- (1) 上位の火山灰 Yf-a は斜長石とM型火山ガラスから成り、火山ガラスの屈折率は1,500~1,501。
- (2) 下位の火山灰 Yf-b はほとんど全て火山ガラスから成り、僅量のアルカリ長石を含む。火山ガラスはL-C型が過半を占める。火山ガラスの屈折率は1,512~1,518。
- (3) Yf-b は「白頭山-苫小牧火山灰」に対比され、降下時代は擦文時代である。

なお、Yf-aはYf-bと同じく比較的広い範囲に分布している可能性があり、今後の精査が望まれる。（花岡 正光）



凡例 黒色腐植土 暗褐~黒褐色腐植土 シルト質降下火山灰 HM:重鉱物 Qz:石英
Fl:長石 oPx:斜方輝石 cPx:単斜輝石 Opq:不透明(鉄)鉱物
Gl:火山ガラス(火山ガラスの型は本文参照) WG:風化鉱物粒

図6 火山灰層序と火山灰の鉱物組成

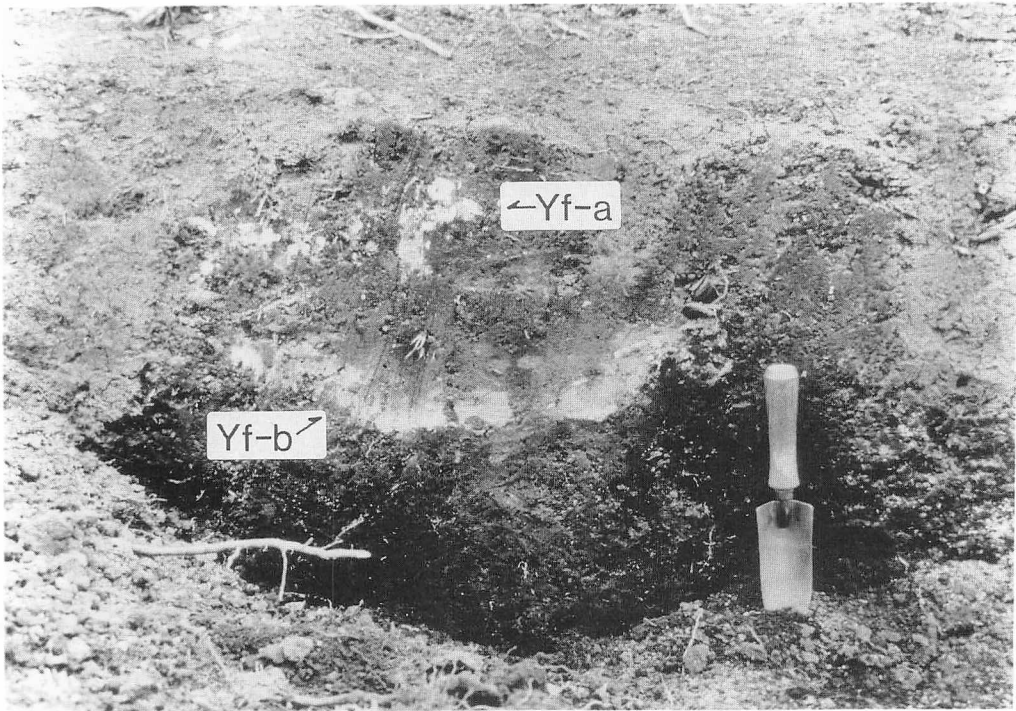


写真1 火山灰層の断面

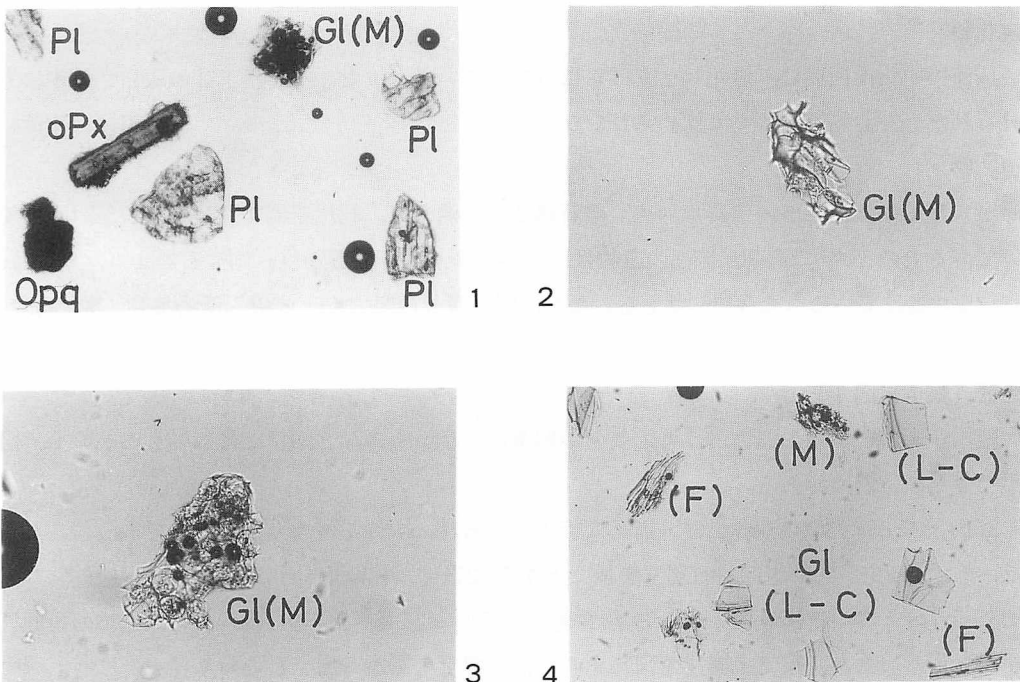


写真2 火山灰の顕微鏡写真

凡例 1-3: Yf-a 4: Yf-b Pl: 斜長石
 oPx: 斜方輝石 Opq: 不透明(鉄)鉱物
 Gl: 火山ガラス(F, M, L-Cは火山ガラスの型。
 本文参照)
 (1-4は34倍, 2・4は85倍, すべて下方ホラーだけ。)

II 遺 構

今回の調査で確認した遺構は、竪穴1基と焼土1ヵ所である。

1. 竪穴 (図7・8)

形 状

確認面での平面形は、径320cm前後のほぼ円形である。深さは確認面から約40cmで、黄褐色土 (IV層) を30cm程掘り込んでいる。

付属ピット

床面から合計9個のピットが検出された。そのうち二つは柱穴と思われるもので、南西及び北東の壁際に穿たれており、床面からの深さはともに55cmである。

小ピット1は深さ15cmで、2本の柱穴を結ぶ中央に位置する。壙底面及び壁面は固く締っており、覆土は竪穴の4層と同じである。

小ピット2は深さ25cmで、ピット内には灰白色の砂が詰められていた。また、壙口部の少し下に土器片が伏せられたような状態で出土した。なお、灰白色の砂は、本ピット北側の覆土4層上面の一部からも流れ込んだ形で検出されている。

皿状ピットは、北西壁際に2個、中央付近に小さなものが1個、南壁際に2個確認された。中央部のものは、炭化物が黄褐色土と混ざり合うようにして入っていたが、他の4個については、竪穴覆土と同様の流れ込み堆積を示していた。

炭化物

床面の中央南西側に、炭化物がまばらに分布していた。また、小ピット2の灰白色砂中にも見られた。なお、焼土は全く認められなかった。(田才 雅彦)

遺 物

竪穴覆土中の遺物は、土器片54点、礫石器2点、礫9点、剥片石器4点、剥片173点(うち焼けているもの1点)であり、床面の遺物は、土器片3点、礫石器1点、剥片石器4点、剥片170点(うち焼けているもの3点)である。なお、図示番号は竪穴出土分のみ遺物番号(注記番号)をそのまま用いている。

土器 (表2・図9)

竪穴から出土した土器片のうち、表面の剥落が激しいものなど図示し得ないものが多く、図示できたのは24点である。

271・334・335・362はII群土器(涌元式相当)であり、すべて覆土上位の出土である。これらは、すべて横走気味の単節斜行縄文を地文とする。271は、外表面に明瞭な輪積痕を残している。335-bは、口唇部直下幅1cmほどを無文帯としている。この無文帯には、口唇部調整の指頭痕がみられる。また、復元土器9(図15)の一部が覆土1層から出土している。

これらの他は、すべてI群A類土器(円筒土器下層C式相当)である。319は、撚り戻し原体

による縄文を地文とするもの。341-bには綾線文が見られる。375・376は同一個体とみられ、数条の縄線を口縁部にめぐらせ(375)、この口唇部文様帯を区画する刺突を加えた隆帯を持っている(376)。覆土4層出土の379・380も、これと同様の文様構成をもつとみられるもので、380にはくびれがある。339・342・537は、単節の斜行縄文を地文とするもので、内面は良く磨かれている。533・534は、縦走る複節の縄文を地文とするもので、内面は良く研磨され、炭化物が付着している。これと、覆土3層出土の535、覆土4層出土の360・363・402は同一個体とみられる。また、竖穴外の30-71区出土のものと接合している。499は、覆土5層から出土した口縁部破片で、やや外反する。文様は縄線によって鋸歯状に配されるものかと思われる。359・379も同一個体である。小ピット2出土の412は、複節の縄文を地文とする胴部破片。内面は磨かれているものの、533・534ほど顕著でない。これらは、胎土に繊維を含むものが多い。

(田中 哲郎)

石器(表3・図11)

石器及び剥片の出土位置は図7に示した。小ピット周辺は床面に、柱穴1北側は覆土下層に遺物が集中する傾向が見られ、しかも両者の間には接合関係がある。

118・134は同一の母岩を素材としており、118は図7に示すように、柱穴1北側の覆土下層出土剥片と接合した。(図44-1) この母岩の剥片は、表1に示したように竖穴出土剥片の80%以上を占めている。なお、表1のNo.4は、11-05区から集中して出土した剥片(接合資料A)と同一母岩から剥離されたものである。

65・102は片側縁に、219・312は腹背両面に調整が見られる。128は二側縁に入念な刃部加工が施されている。295は先端を欠いているが、二側縁ならび基部に調整が見られる。

47は柱穴1脇の覆土4層から出土した叩き石。49は、柱穴1を狭んで47と反対側の床面から出土した擦石であるが、その擦痕はあまり明瞭ではない。18は、図版組の都合上横位置となっているが、図の左側を主として使用している擦石である。覆土1層からの出土で、本竖穴に伴うものか否かは明確でない。

(田才 雅彦)

No.	色調・特徴	点数	割合(%)	重量(g)	割合(%)	同一母岩の石器	備考
1	黄褐色・風化	13	3.8	44.8	10.3	118・134	} 同一母岩
2	暗褐色	249	72.6	166.4	38.3		
3	茶褐色白斑・風化	22	6.4	105.5	24.3		
4	黒色	38	11.1	75.3	17.3		接合資料A
5	灰白色・黒縞	11	3.2	11.3	2.6		
6	赤褐色	2	0.6	5.7	1.3		
7	その他	8	2.3	25.7	5.9		
計		343	100.0	434.7	100.0		

註 Noは写真図版に同じ

表1 竖穴内出土剥片の分類

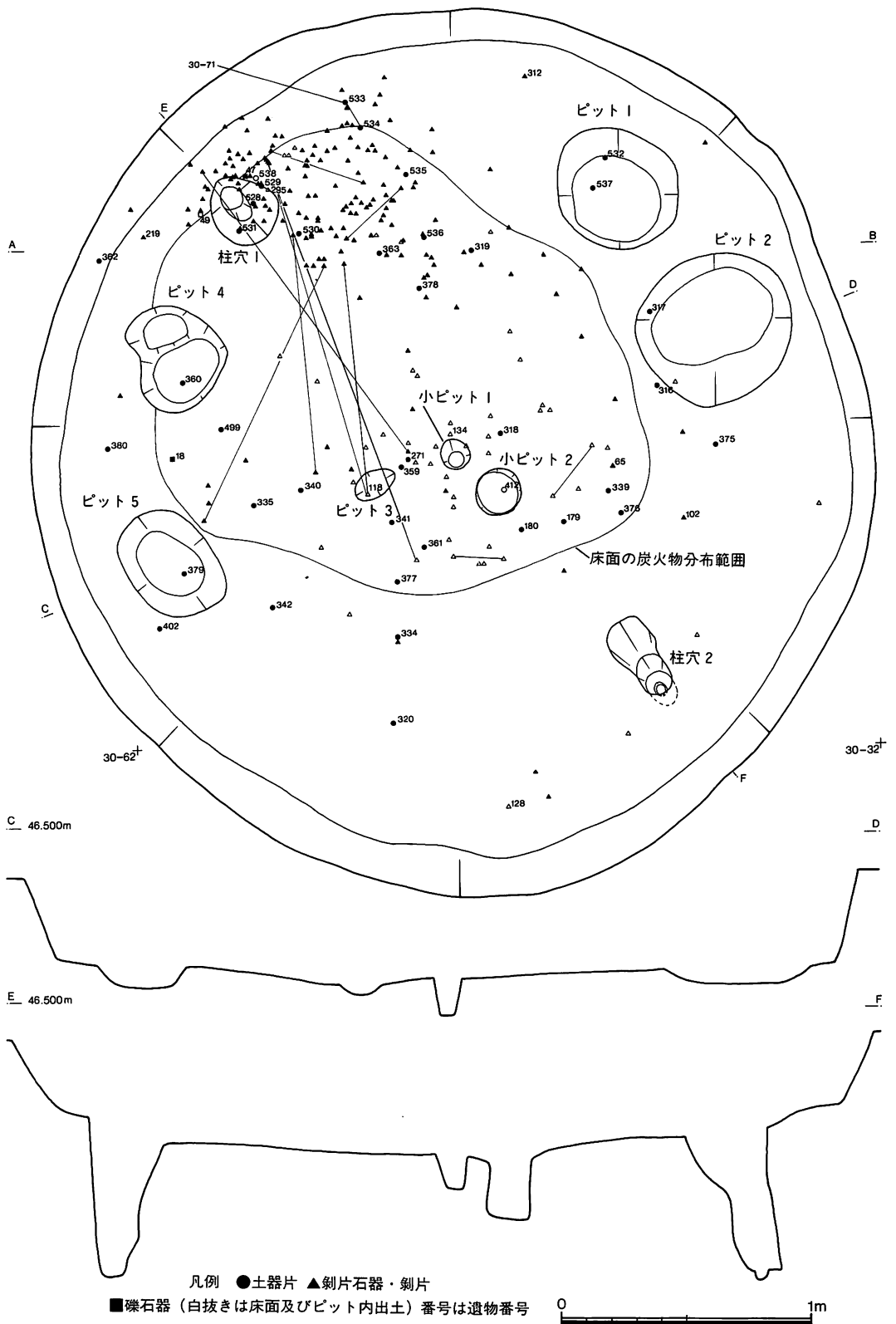


図7 竪穴平面図及び断面図

A_46.500m

B

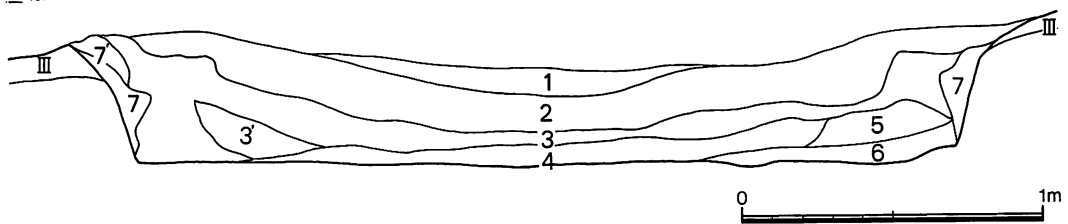


図8 竪穴土層断面図

土層注記

- 1 : 黒色土 細粒で漆黒色, 粘性に富む 5 : 黒褐色土 粗粒の黄褐色土 (IV層) を含む
 2 : 黒色土 黄褐色土 (IV層) を若干含む 6 : 黒色土
 3 : 黒褐色土 黄褐色土 (IV層) を含む 7 : 暗褐色土 III層 > II層
 3' : 黒褐色土 3より粘性が強い 7' : 暗褐色土 III層 = II層
 4 : 暗褐色土 IV層 > II層

遺物番号	グリッド	層位	分類	点数	備考
179	30-41	1	涌元	1	底部 復元土器 9
180	"	"	"	3	口縁 復元土器 9
271	30-40	"	"	13	
316	30-30	"	円C	1	
317	"	"	"	1	
319	30-40	"	"	1	
334	30-41	"	涌元	1	
335	30-51	"	"	2	
339	30-40	"	円C	1	
340	30-50	"	"	1	
341	30-41	"	"	2	
342	30-51	"	"	2	
320	30-41	2	"	1	
361	"	"	"	1	
362	30-60	"	涌元	1	
375	30-30	"	円C	1	
376	30-41	"	"	1	
528	D30-50	"	"	1	
530	"	"	"	1	
531	"	3	"	1	底部

遺物番号	グリッド	層位	分類	点数	備考
532	D30-40	3	円C	1	
533	D30-50	"	"	1	} 接合, 30-71区出土 の土器片とも接合
534	"	"	"	1	
535	D30-40	"	"	1	
537	"	"	"	2	
359	30-40	4	"	1	
360	30-50	"	"	1	
363	"	"	"	1	
377	30-41	"	"	1	
379	30-51	"	"	2	
380	30-61	"	"	1	
402	30-51	"	"	1	
536	D30-40	"	"	1	
378	30-50	5	"	1	
499	"	"	"	1	
538	D30-50	床面直上	"	1	
412	30-40	小ピット内	"	2	小ピット2内(接合)

註 分類の「円C」は「円筒土器下層C式」の略

表2 竪穴内出土の土器片一覧

遺物番号	グリッド	層位	器種名	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
65	30-40	1	R・F	5.86	3.50	0.54	15.5	頁岩	
219	D30-50	4	"	4.60	2.65	0.81	16.7	珪質頁岩	
102	30-31	5	"	5.11	3.30	0.78	19.3	"	
312	D30-40	"	"	4.39	3.53	0.61	13.0	"	
118	30-50	床面直上	石 槍	(5.31)	(2.55)	(1.40)	(22.7)	"	先端部欠損
134	30-40	"	石 鏃	(1.45)	(0.93)	(0.24)	(0.7)	"	"
128	30-42	"	ナイフ	2.74	2.95	0.58	5.1	"	
295	D30-50	"	"	(4.14)	(3.21)	(0.64)	(10.3)	"	欠損
18	30-50	1	擦 石	12.34	6.10	0.87	130	凝 灰 岩	
47	D30-50	4	敲 石	10.5	7.4	5.53	690	砂 岩	
49	"	床面直上	擦 石	12.2	7.1	1.9	360	"	

註 R・FはRetouched-Flakeの略

表3 竪穴内出土の石器一覧

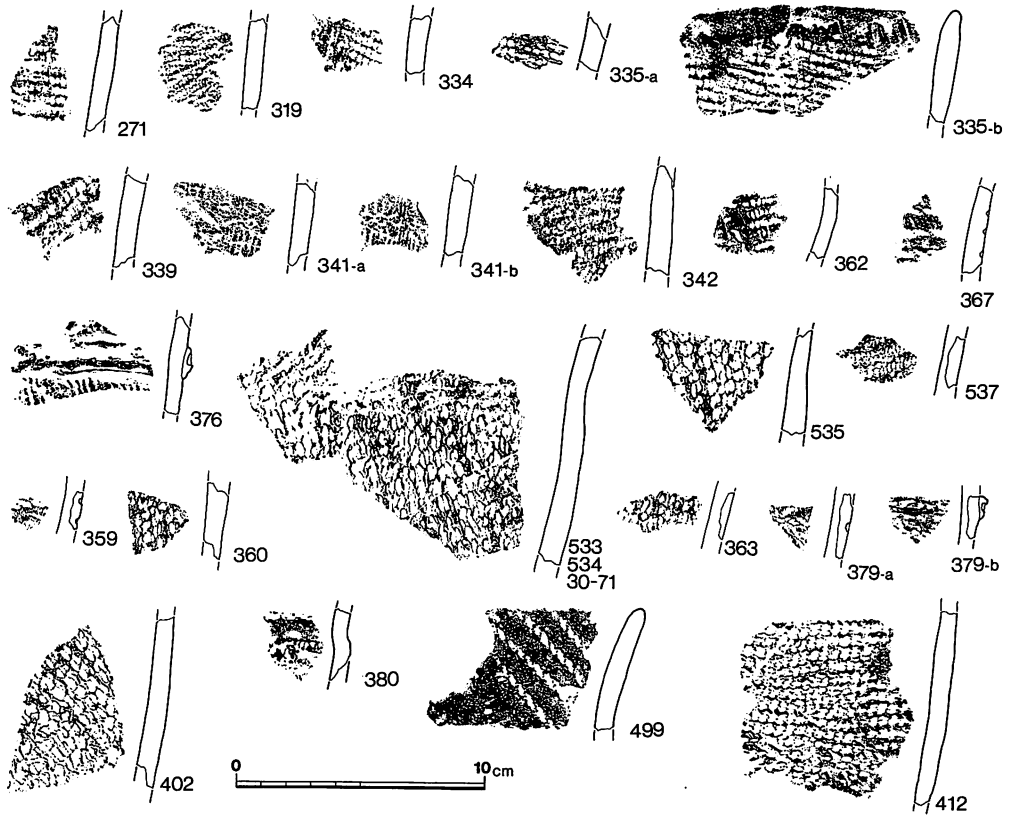


図9 竪穴内出土の土器

2. 焼土 (図10)

50-41・51区の風倒木痕脇に、110cm×60cmのヒョウタン形に広がる焼土を検出した。この焼土は、焼土粒・炭化物の広がり(1~6層)として捉えられ、厚さは15cmほどである。

人為的に焼いた跡というより、風倒木に関わる自然の営為によるものと考えた方がよいかも知れない。

(三浦 正人)

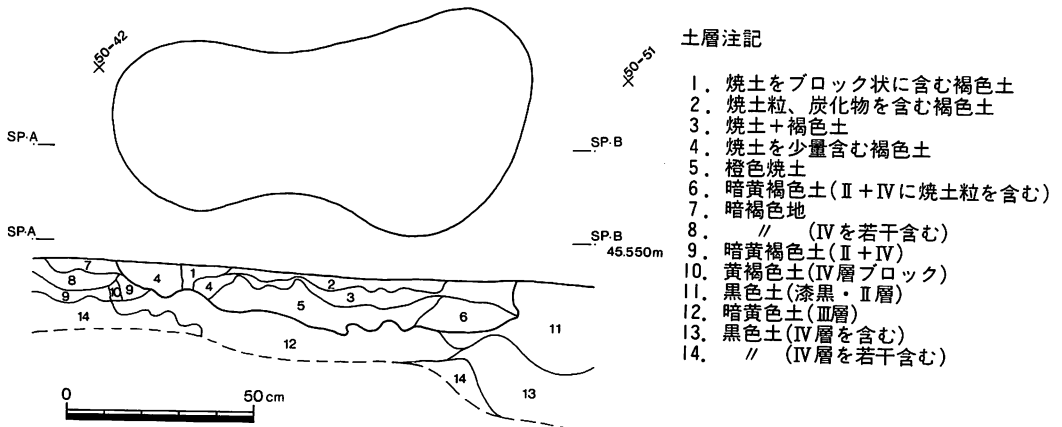


図10 焼土平面図及び土層断面図

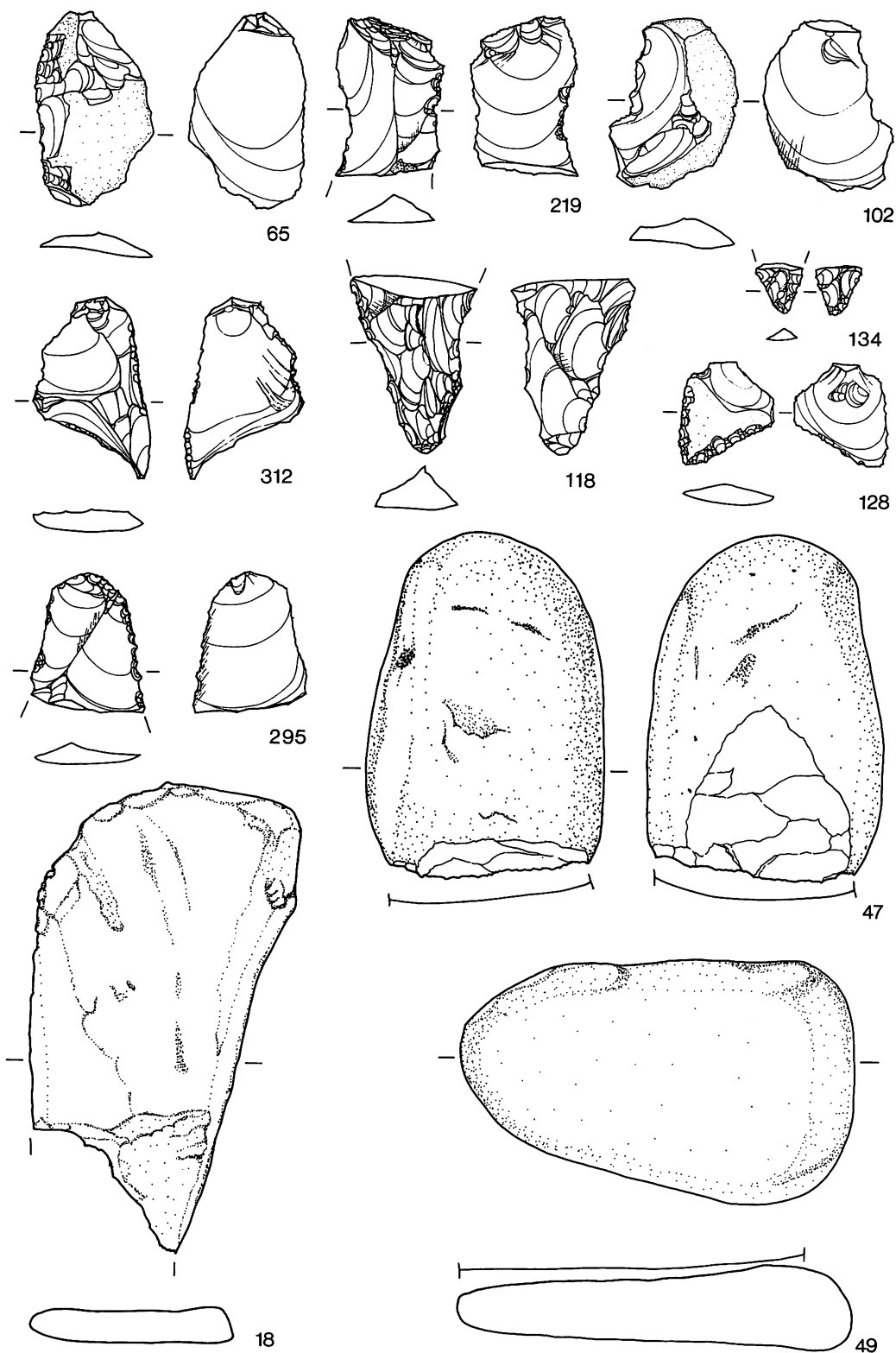


図11 竪穴内出土の石器

III 遺 物

1. 土器 (図12~28)

包含層出土の土器は、縄文時代前期、後期前葉、続縄文時代恵山期のものに分けられる。これらを順に、I群・II群・III群土器とした。I群土器は1,173点、II群土器は8,860点が出土している。III群土器は、同一個体の破片16点が60区より出土しているのみである。

I群・II群土器については、文様構成等によって細分を行なっている。また、後期前葉に相当する土器のうち、東北地方北半で多く出土し、最近注目されている「切断蓋付土器」(成田滋彦 1986)が今回の調査で出土している。道内では初めての出土例とみられる。

I群土器 縄文時代前期の円筒土器下層c~d式に相当するもの。

本群土器は、文様構成全体を把握できる資料が少なかったため、後述するごとく、出土地点の相違や個々の文様要素の相違によって、以下の3類に細分した。

A類 (復元土器1, 拓影1~48)

口縁部に幅広の文様帯をもち、絡条体圧痕文や太い原体の縄線文、刺突のある隆帯などによって文様を構成するもの。胴部には、撚り戻し原体・複節などの縄文が施文されるものが多い。

復元土器1は、4つ山の波状口縁をなす深鉢で、撚り戻し原体による縦走する縄文をもつ。胎土には繊維を含み、焼成は良好で、内面も良く磨かれている。

口縁部文様帯は、文様構成全体を捉えられるものはないが、4~6cmほどの幅広のものが多く、絡条体圧痕によるもの(拓1~3)、縄線文によるもの(拓4~15・17・18・20~22)が大部分で、これに刺突をもつ隆帯(拓13~16)や綾線文(拓16・19)が加わるものがある。口縁部文様帯に地文を残すものもあり(拓5~7・20~22)、これらは11区から出土したものに多い。また、地文の縄文のみの口縁(拓23~25)も見られる。

胴部には、撚り戻し原体によるもの(復1・拓29~34・45・46)のほか、網目状撚糸文(拓26~28)・複節のもの(拓35~37・40)などが見られる。拓40では、底面にも複節の縄文が施されている。

B類 (拓影49~84)

口縁部文様帯は2~3cmと幅が狭くなり、数本の縄線文を横環させるもの(拓49~53・61~65)である。口唇は、A類と比べ尖り気味となる。また、口縁部文様と胴部文様との境目に結束第1種を施すもの(拓51~53・61~63)が主体であるが、10区からは施文されないもの(拓49・50)も出土している。

胴部の地文は、縦走する撚糸文が主体である。結束第1種を数段施すもの(拓67~71)もあり、拓74は底部にまで施されている。これら結束第1種を胴部以下に施文するものは、50区を中心に出土しており、10・11区には見られない。

C類 (拓85～92)

I群土器中、出土点数が最も少ない。

口縁部文様帯は、B類同様3cm内外とせまい。拓85・87～89は同一個体のもので、縄線による幾何学文様を持ち、これと胴部文様との境目に刺突と結束第2種が施されている。

胴部は、縦走る撚糸文を地文に、数段の結束第2種を施文し、所謂すだれ状の文様となっている。(拓87～89) 拓90～92は、結束第2種がみられることからこの類に含めた。

これらI群土器の平面分布を見ると、4ヵ所の集中して出土する地点がある。(図12) 11-00を中心とするもの(a地点)、31区に集中するもの(b地点)、竖穴を中心として30区・40区に広がるもの(c地点)、50区を中心とするもの(d地点)である。A類は、竖穴を中心とするc地点に多く分布し、一部がa地点に広がっている。B類はd地点に集中し、a地点にも見られる。このうちd地点に見られるB類は、すべて口縁部文様帯と胴部文様との境界に結束第1種をもつもので、胴部にも幾段か施文する。これに対し、a地点のものは結束第1種を全く施さないものがあるほか、胴部にまで結束第1種を施文するものはない。また、A類としたもののうち、a地点でしか出土していない口縁部文様帯に地文を残し縄線文を横環させる土器もあり、a地点出土のA・B類を一つのグループと扱えたほうが良いのかも知れない。C類は、a地点とb地点で多く見られ、c地点でも若干出土している。

II群土器 縄文時代後期前葉に属するもの、所謂涌元式で、知内町涌元遺跡出土資料や乙部町元和遺跡のF群土器等に相当するものである。文様構成等によって以下の4類に細分した。このうち、A・B類について細々分を行なった。

A類 沈線文および刺突文をもつもので、無文地(a種)と縄文地(b種)のものがある。

a種 (復元土器2・3, 拓影92～113)

復元土器2・3は、近年青森県、岩手県等で出土している「切断蓋付土器」とみられる壺形土器である。2個体とも破片数が少なく全体像を知り得ないが、復2は底部付近に焼けた平滑な切断面をもっている。文様は最大胴径部に沈線をめぐらせ、その下方に楕円形文を連結し、上方には大小の楕円形の沈線文を配していると考えられる。復3は、図上復元したもので、胴部上端で切断されている。蓋部の切断部付近にやや太目の沈線がめぐっている。切断部の一箇所に抉りがあり、その反対側には橋状把手が1個横位置に貼付されている。切断面には細かい刻み目が施されている。胴部に沈線による文様を施しているが、最大胴径部の沈線と底部近くに廻された沈線との間は無文である。底部はあげ底である。これらの出土状況は、前者がややまとまって出土したのに対し、後者はかなりの広がりがあり、00-59区から40-72区まで24もの小グリッドに散在していた。この2個体の他はすべて小破片である。拓92は突起のある口縁部破片で、深く太い沈線による楕円形の文様が2段廻らされている。表面がかなり磨耗しているためはっきりしないが、地文に縄文が施されていた可能性がある。拓93は山形突起部。拓

94は内傾する口縁をもつ小型土器であり、円弧文がある。拓95・96は同一個体で、2本を単位とする沈線が波状に廻るものとみられ、沈線間には円形刺突文が見られる。また、S字の沈線文も施されている。以下は胎土に砂粒を多く含み、施文方法も粗雑なもので、沈線による円形文（拓98～100・106～111）や、渦巻文（拓103）、連続する円弧文（拓104）などがある。拓112・113は同一個体で、円形刺突を器面全体に施す小形土器である。

b種（復元土器4，拓114～143）

復4は、口縁がやや外反する深鉢形土器で、口唇がやや角張り、内面は丁寧に磨かれている。文様は、2本の平行沈線を3列横環させ、各々の間に2本単位の沈線で三角形の空間を作出し、その空間に横S字状の沈線文を配している。この2段の文様帯の地文には、それぞれ違う原体（上段—無節，下段—単節）を用いている。この土器の文様モチーフと同様のものは、知内町涌元遺跡（高橋正勝 1974）、松前町原口遺跡（西連寺健 1976）に見られる。拓115は磨り消し縄文で、その口縁は拓114とみられる。また、a種に分類した拓92も、胎土からみて同一個体かもしれない。丁寧に文様を施すものは、拓114・115・124・125・128～131で、他は粗雑な感が否めない。文様には、横S字状のもの（拓116～123）、渦巻文（拓126・127）、逆C字を連ねるもの（拓133）や、沈線文に円形刺突を加えたもの（拓139～141）などがある。拓143の沈線は、浅くはっきりしないもので、器面調整のあとかもしれない。

B類 縄線文をもつものである。縄線文は口縁部に限られており、胴部に施されるものはない。

また、口縁部に縄線文のみを配するもの（a種）と、地文の縄文のうえに縄線文を配するもの（b種）の2種がある。

a種（復元土器5・6，拓影144・145・149～161）

器形は深鉢形を呈するものが多く、口縁形態には、やや外反するもの（復5，拓145・153～155・158）、内湾気味のもの（復6，拓151・156・159）、くの字状を呈するもの（拓149・157）、直立するもの（拓160・161）などのバリエーションをもつ。また、拓144は二股の山形突起をもつものであり、拓152は小さな山形突起をもっている。復6も、4つ山をもつゆるやかな波状口縁を呈するものとみられる。拓152～156は、所謂折り返し口縁で、本群の特徴の一つとみられる。これについては後述する。縄線文は、口縁に沿って1～2本横環するものがほとんどで、半円状の文様を連続させる拓145のようなものは稀である。

b種（復元土器7，拓146～148・162～168）

口縁形態は、内湾気味のもの（拓164）、ゆるやかな波状を呈するもの（拓165）などもあるが、a種に比べ直立するもの（復7，拓163・166～168）がやや多く見られ、口唇形態もやや角張るようである。縄線文は、外反する口縁をもつ拓146～148で鋸歯状に配されるほかは、a種同様2～3本の縄線文を口縁に沿って廻らすものである。

なお、a・b種ともに、地文はやや横走気味の斜行縄文が多い。

C類（復元土器8～36，拓169～205）

沈線や縄線などによる文様をもたず、縄文などの地文のみのものである。この類には、B類

の胴部破片も多く含まれていると考えられる。また、所謂余市式の隆帯をもつ土器（拓169・170）も便宜的にここに含めた。これは同一個体のもので、口縁部に2条の貼付帯をもち、貼付帯間は無文となっている。

この類の器形は、そのほとんどが深鉢形で、口縁がやや内湾して最大径を胴部上半にもつもの（復8～13・23）もみられるが、口縁部で最大径を測るもの（復14～20）が多い。一部には、くの字形の口縁部をもつもの（復21、拓181）もみられる。大きさは、口径が11～12cm・器高16～17cmほどの小型のものと、口径21～22cm・器高30数cmほどのものがみられ、後者が多い。この他、口径が25.3cm・器高43.8cmを測る復9や、口径が23.2cmで器高が48.3cmと大型の復8がある。なお、拓190は、ゆるやかな波状口縁をもつ浅鉢と考えられる。

この類にも、所謂折り返し口縁があり、そこを無文帯とするもの（復11、拓171～173）と縄文を施すもの（拓174～178）がある。前者には、指頭痕を残すものが多く、後者には、胴部縄文と施文方向を変えているものが多い。これらの折り返し口縁は、器壁と顕著な段をもつものは少ない。断面観察によれば、口唇部に粘土紐の接合面がぬける貼付によるもの（拓174・177・178）が少数みられる他は、すべて輪積による最後の粘土紐の外表面調整を意識的に残すもの（復10、拓171～173・175・176）で、接合面が土器内側へぬけるものである。後者は拓184・198のような、口縁部の外表面にのみ輪積痕を細い溝として残すものに通じる口縁部形態であり、余市式の隆帯に関連あるものかもしれない。

地文は単節の斜行縄文が多い。他には、複節のもの（復35、拓192・193）、無節のもの（拓194～203）がある。また、拓204・205は植物の茎を原体とするものと思われるが、はっきりしない。底面に木葉痕を残すもの（復36）もみられた。

D類（復元土器37～43、拓206～215）

無文のものである。小型の深鉢形が多い。口唇は、丸味を帯びるもの（復37・38、拓206～208）、尖り気味のもの（拓209・211）が多く、角張るもの（拓212・213）が若干みられた。器面調整による擦痕や底部に指頭痕を残すものが多い。大型のものは、拓214の1個体のみである。復43は底径2.3cmのミニチュア土器であり、底部に指頭痕を明瞭に残している。

Ⅱ群土器の平面分布は、最終面の標高46mでちょうどその分布域がきれ、20区・30区に集中している。（図13）Ⅱ群土器のうち、A類・B類・D類の全体に占める割合は、それぞれ5.2%・2.7%・1.2%と小さく、C類が本群の主体となる土器であることがわかる。このうちA類の内訳は、a種1.9%、b種が3.3%である。前者が30区の北東側を中心として、また後者は20区の南東側を中心として出土しており、隣り合いながらもその分布状況に違いを見せている。これに対し、B類は20区・30区全域にわたって出土している。また、B類の本群における割合は、C類に胴部破片がはいることを考慮すれば、さらに大きくなることが予想される。

（29頁につづく）

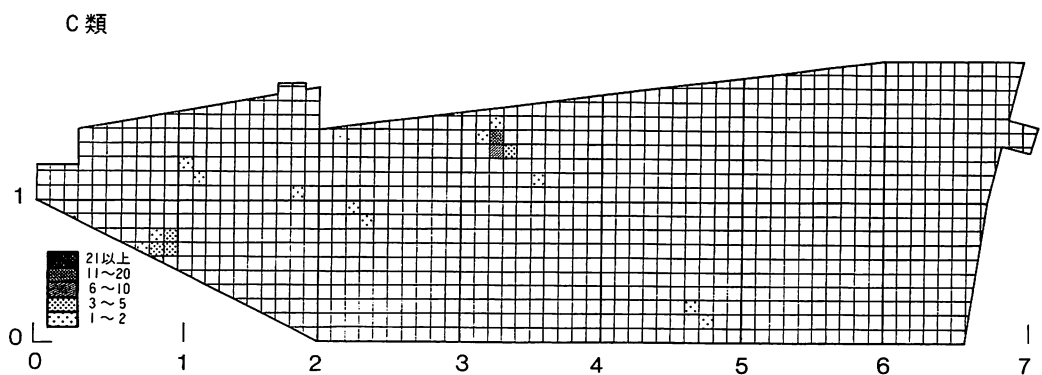
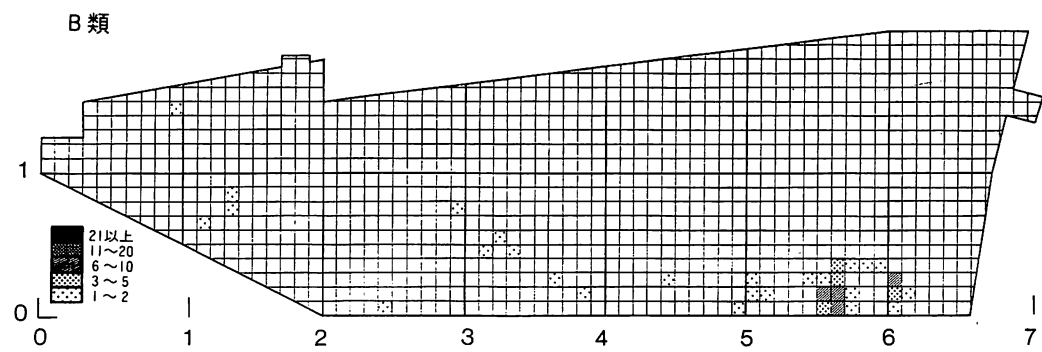
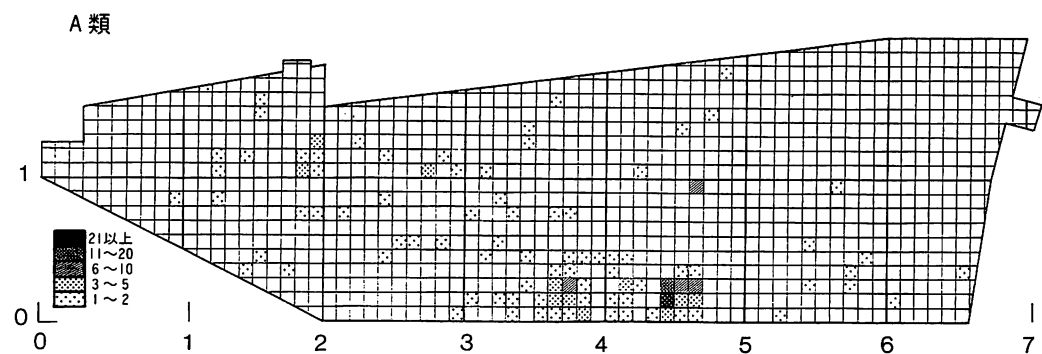
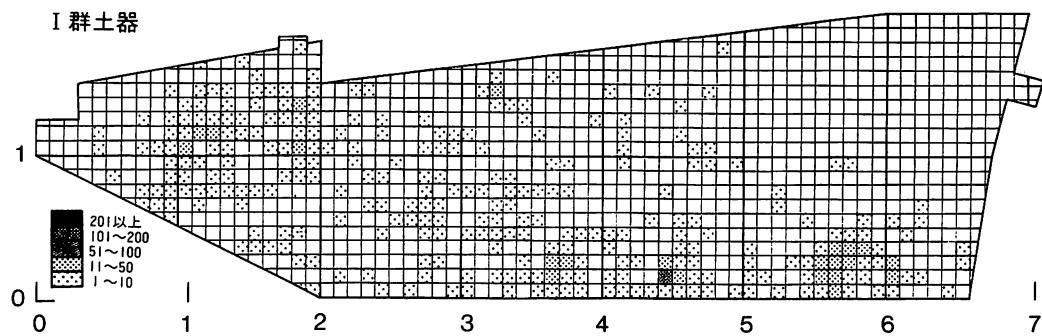


图12 I 群土器分布图

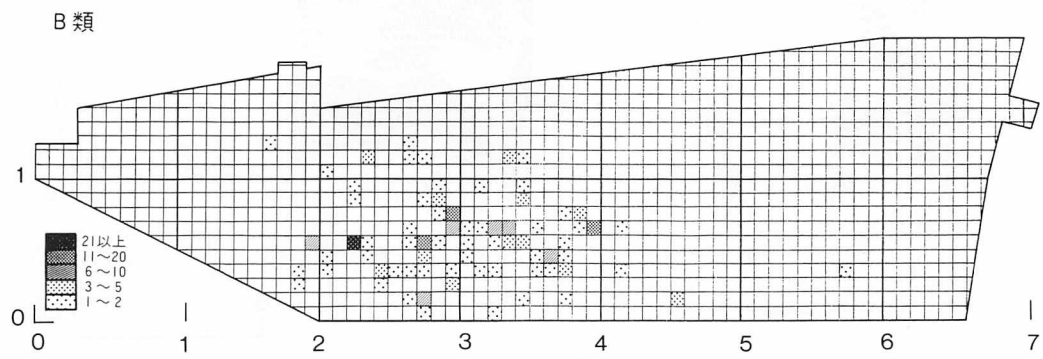
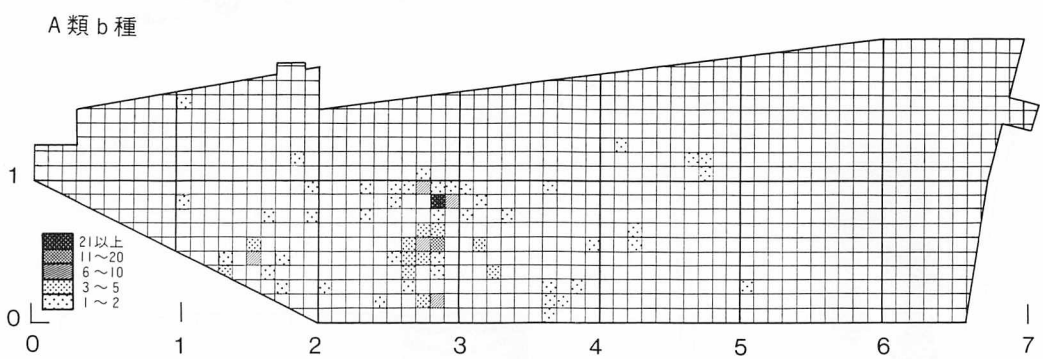
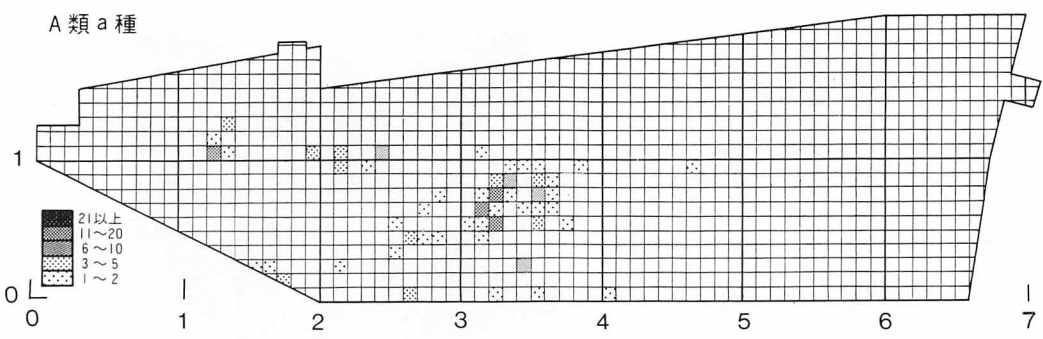
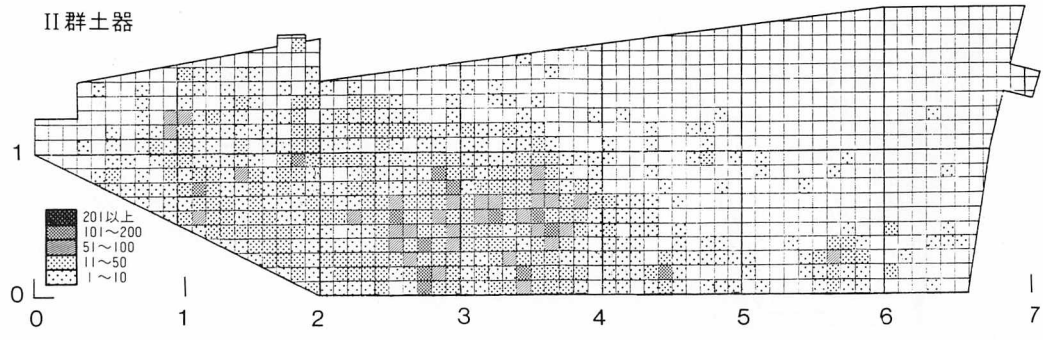


图13 II群土器分布图

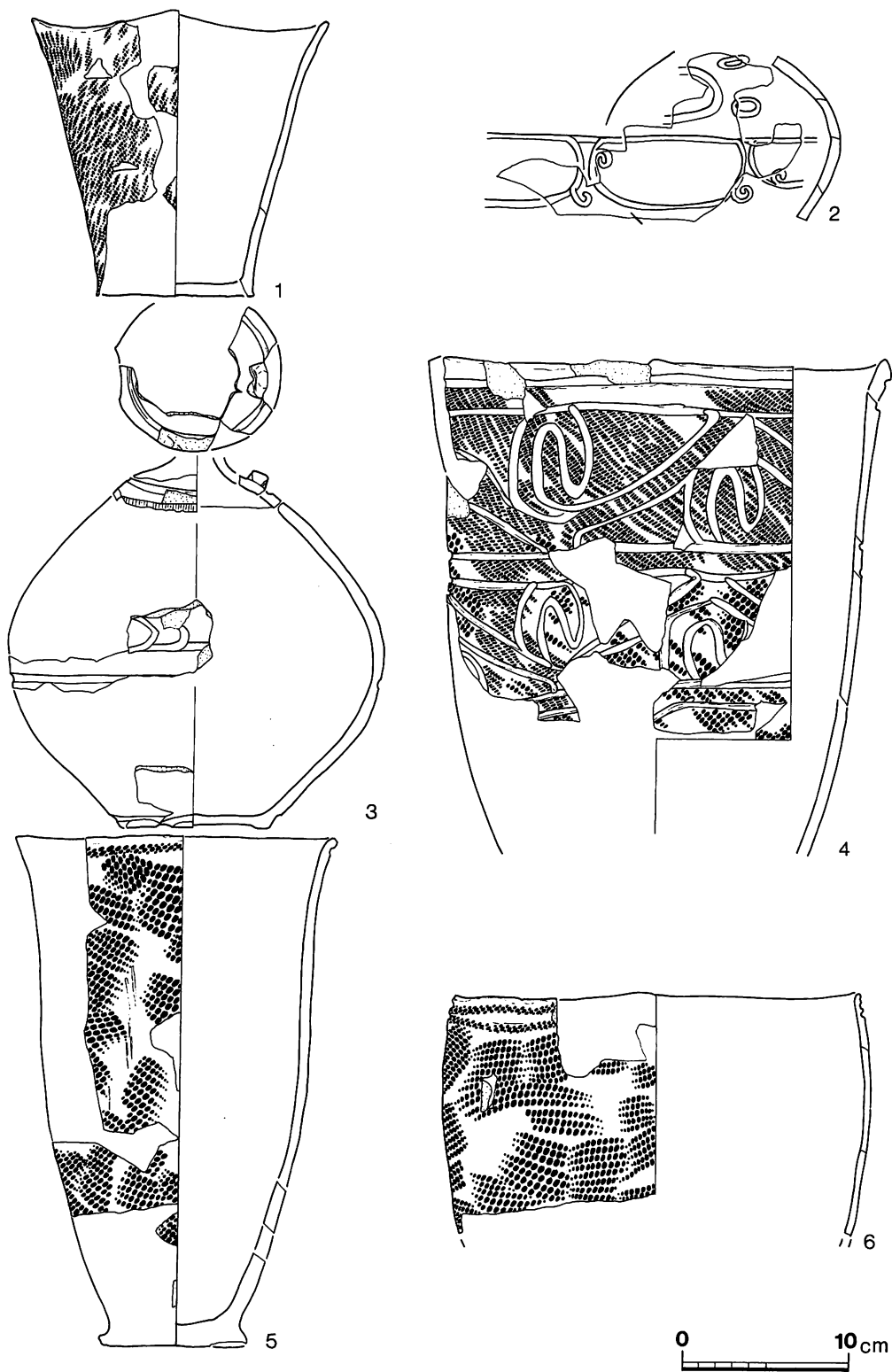
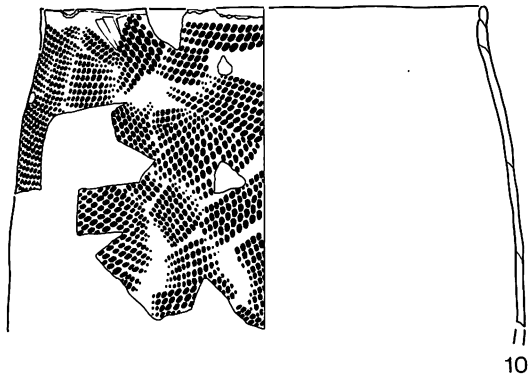
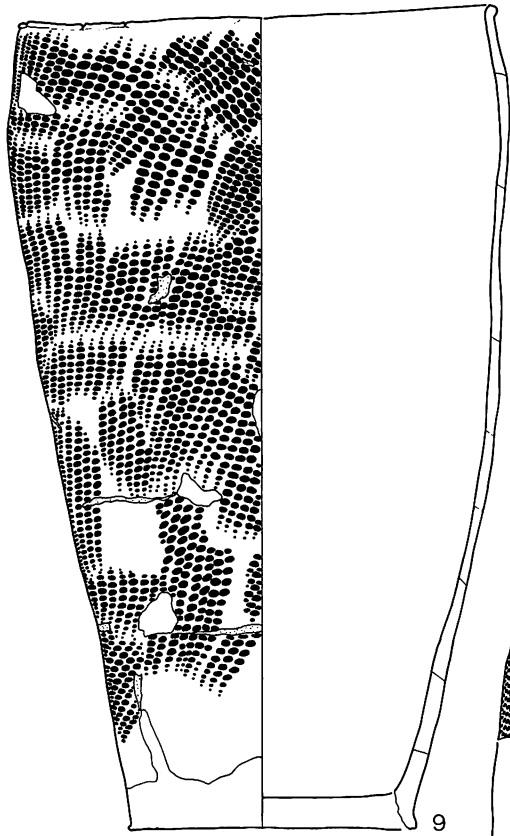
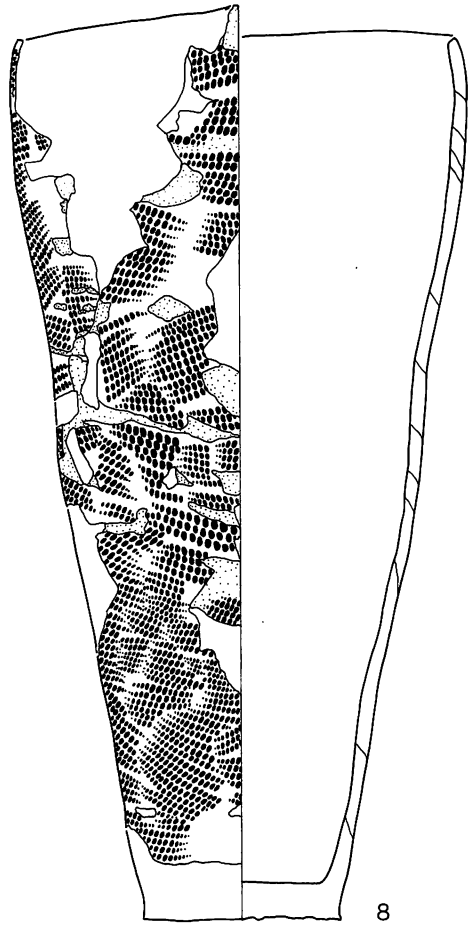
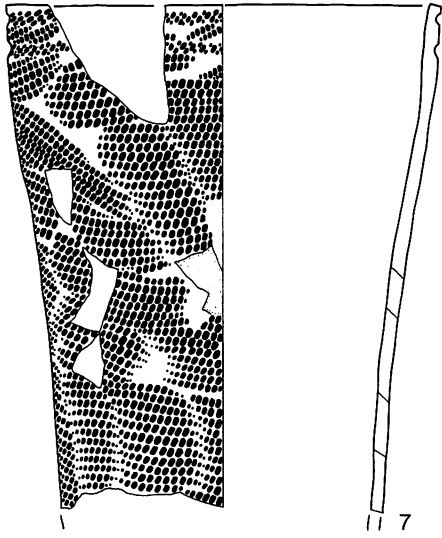


图14 復元土器

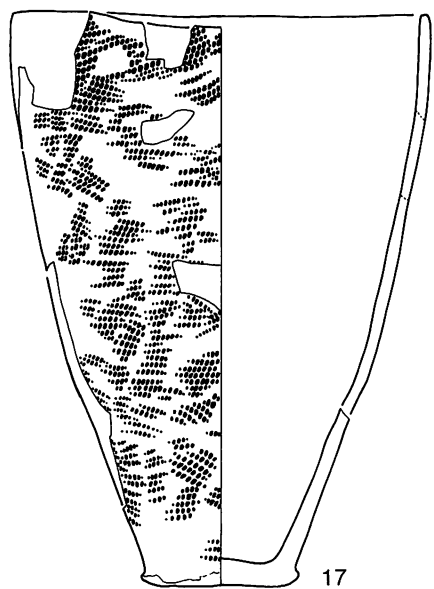


0 10 cm

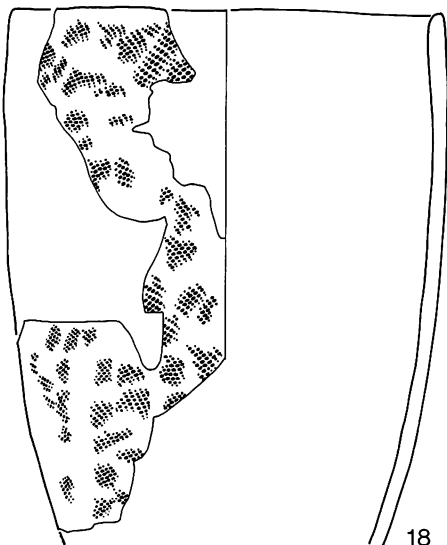
图15 復元土器



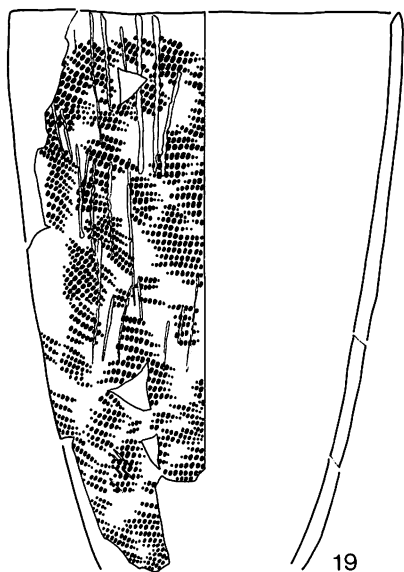
图16 復元土器



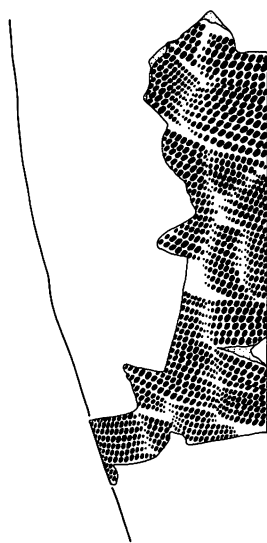
17



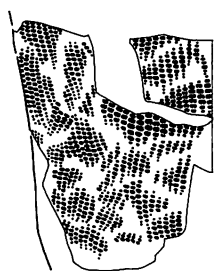
18



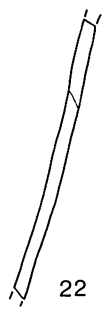
19



20



21



22

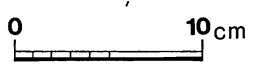


图17 復元土器

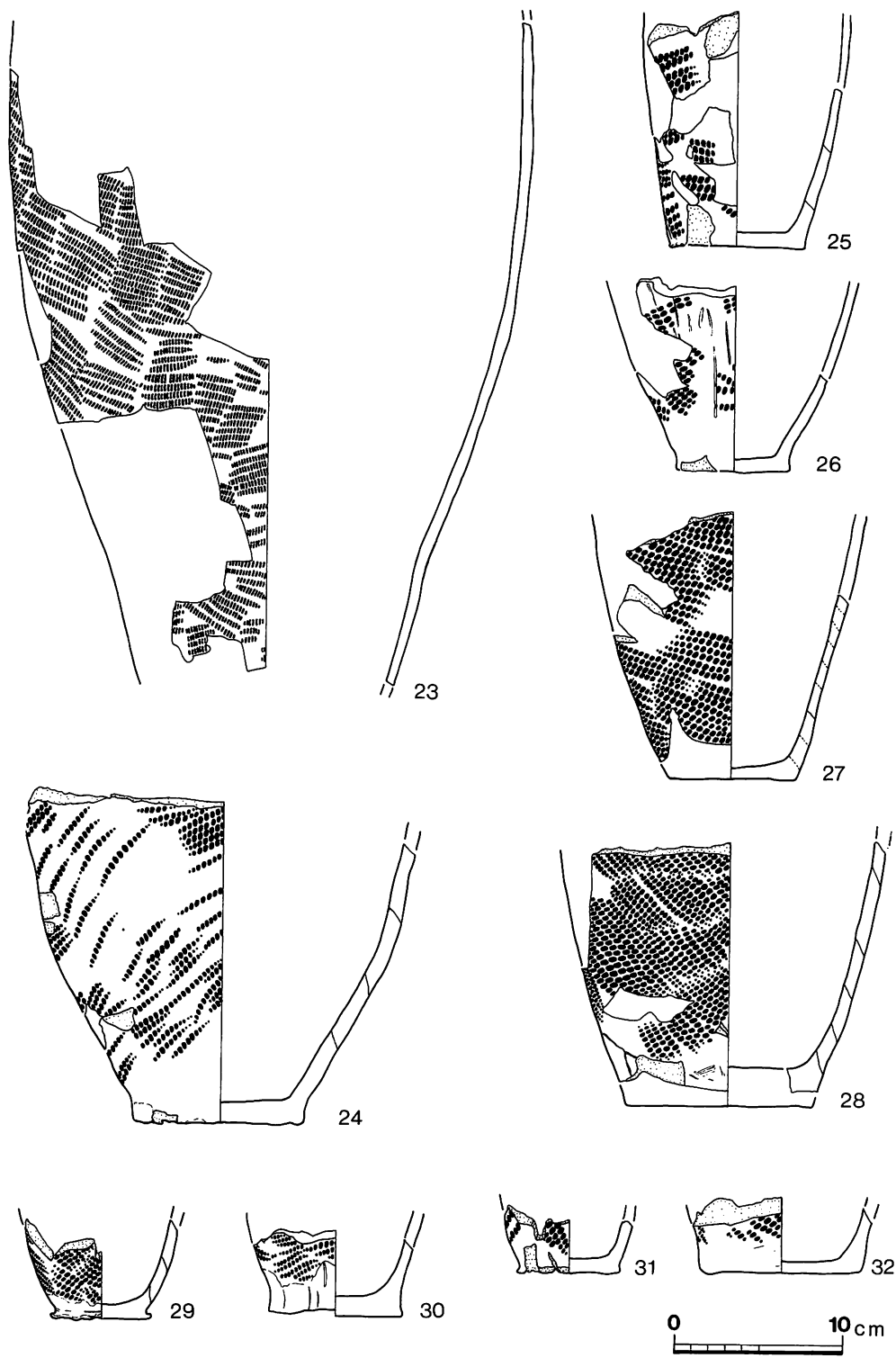


图18 復元土器

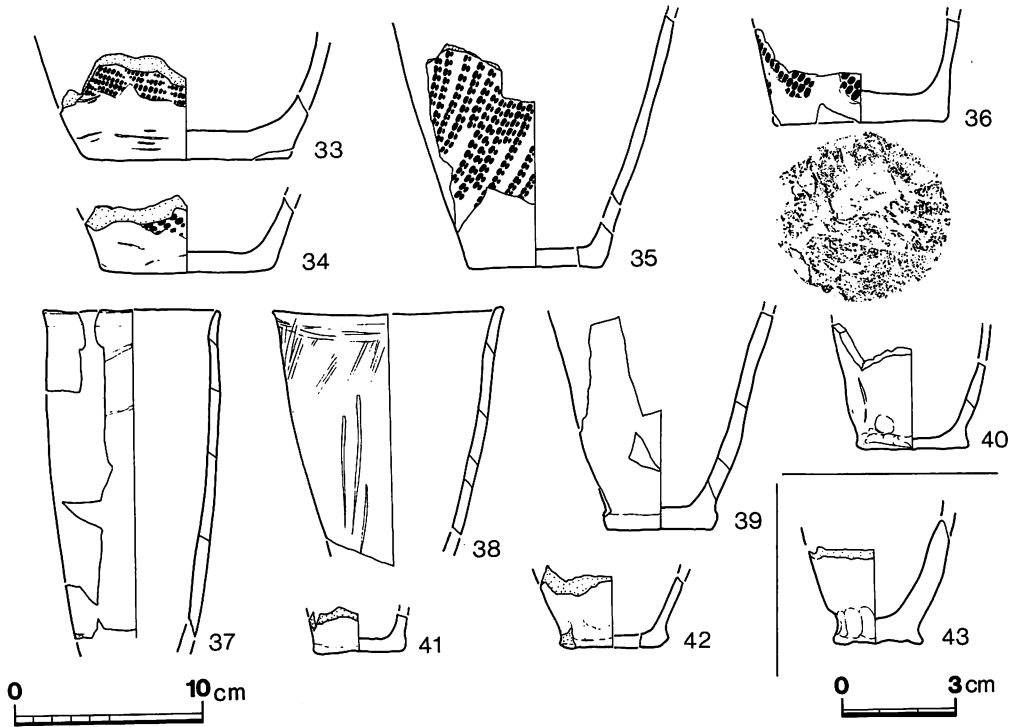


図19 復元土器

縄文時代後期前葉に属する土器について、大沼忠春は、乙部町元和遺跡第5地点出土のF群土器のうち、若干の時間差をもつ2つのグループを想定している。(大沼 1976) 今回の調査で得られた本群土器は、縄線文・折り返し口縁など、前記2つのグループのうちやや古く考えられている元和遺跡第5地点35・36区出土土器の内容に近いものと思われる。

Ⅲ群土器 (拓216~219)

恵山式に相当するもの。すべて同一個体の破片で、胴部が丸く張り出す壺形土器と思われ、縦走る縄文を地文に、沈線と刺突によって文様を構成するものである。胎土に砂粒を多く含むもので、器質は脆い。(田中 哲郎)

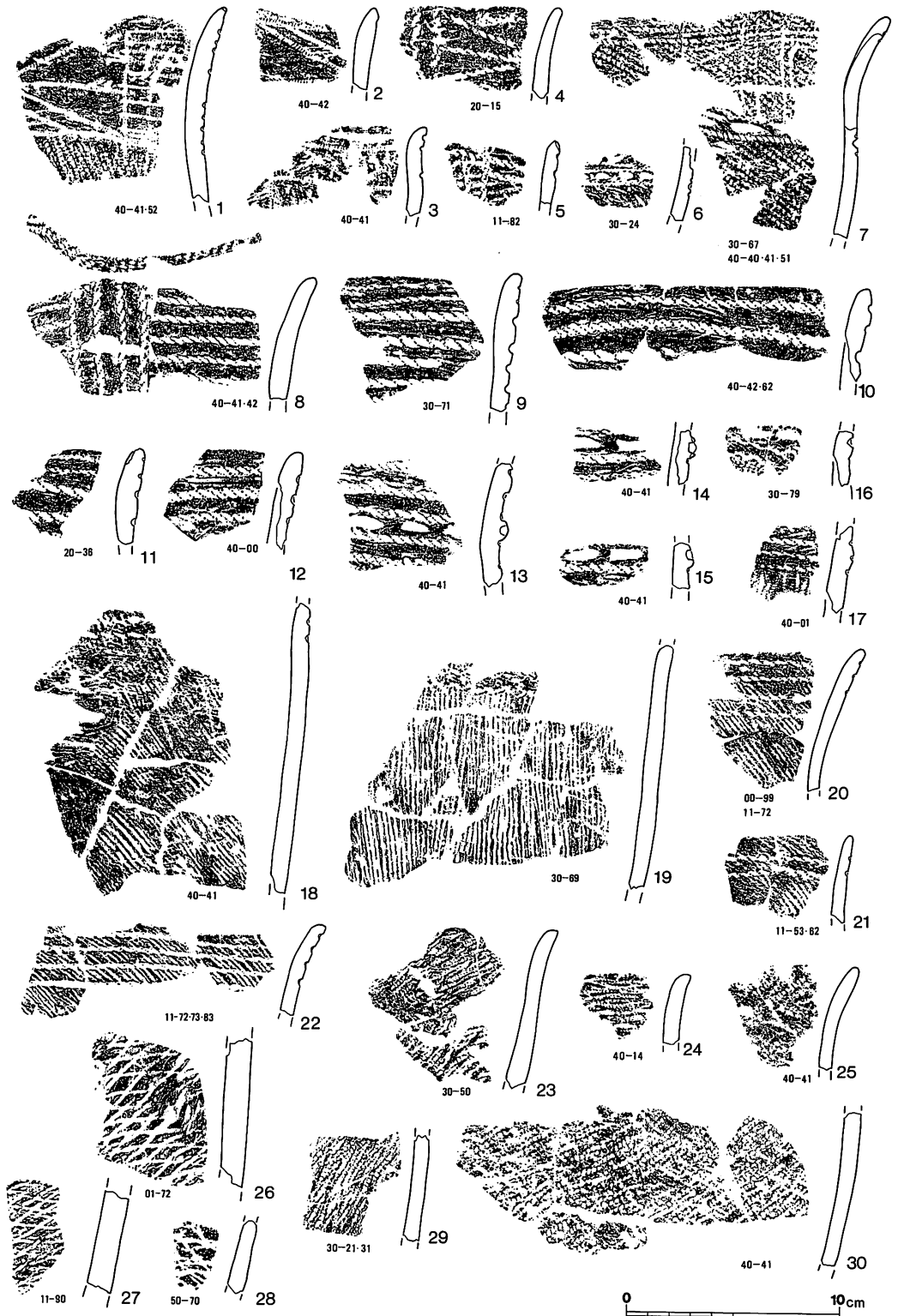


図20 土器拓影図 (I 群 A 類)

図示番号以外の数字は出土発掘区を示す。以下同じ。

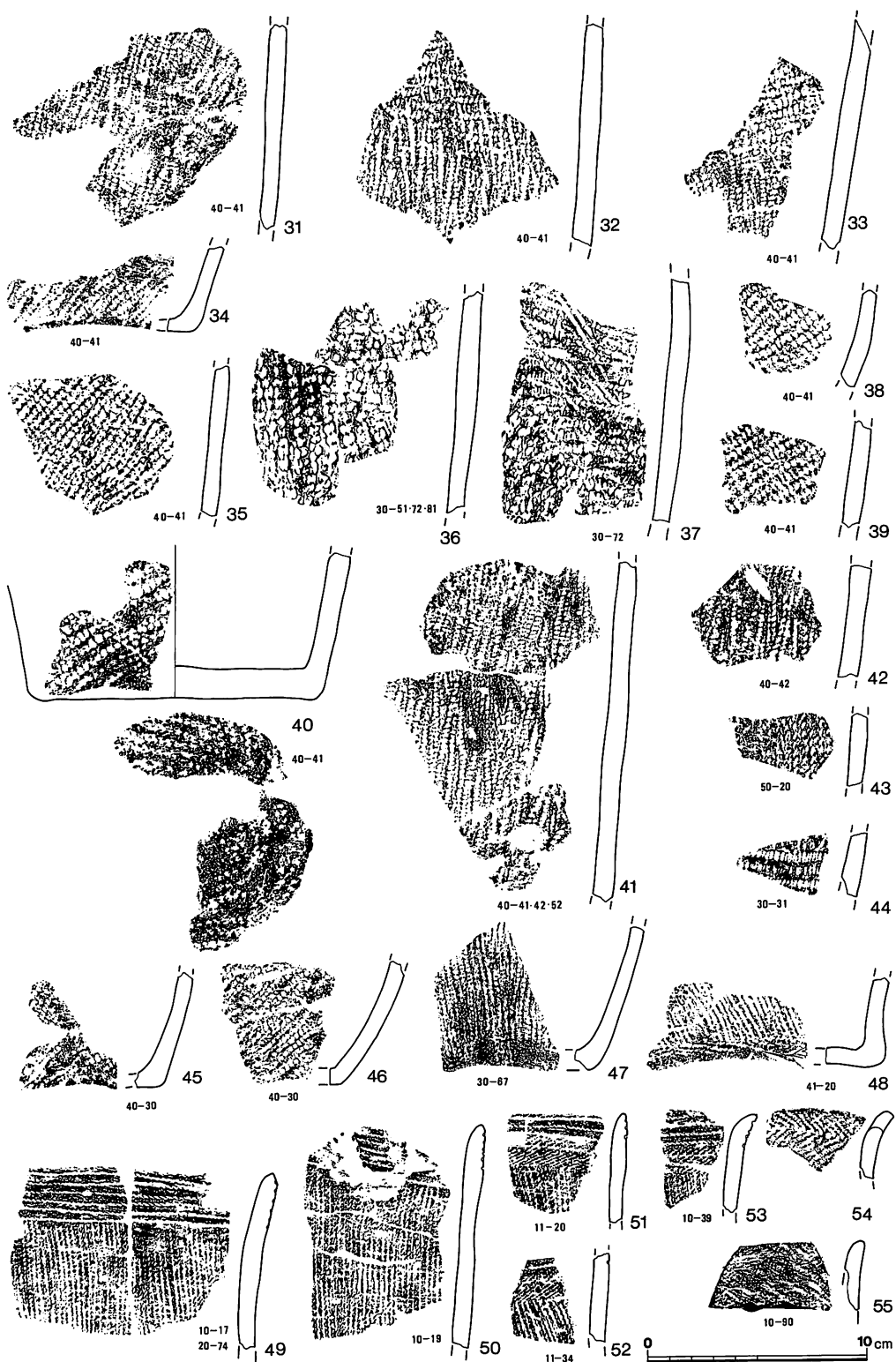


图21 土器拓影图(I群A·B类)

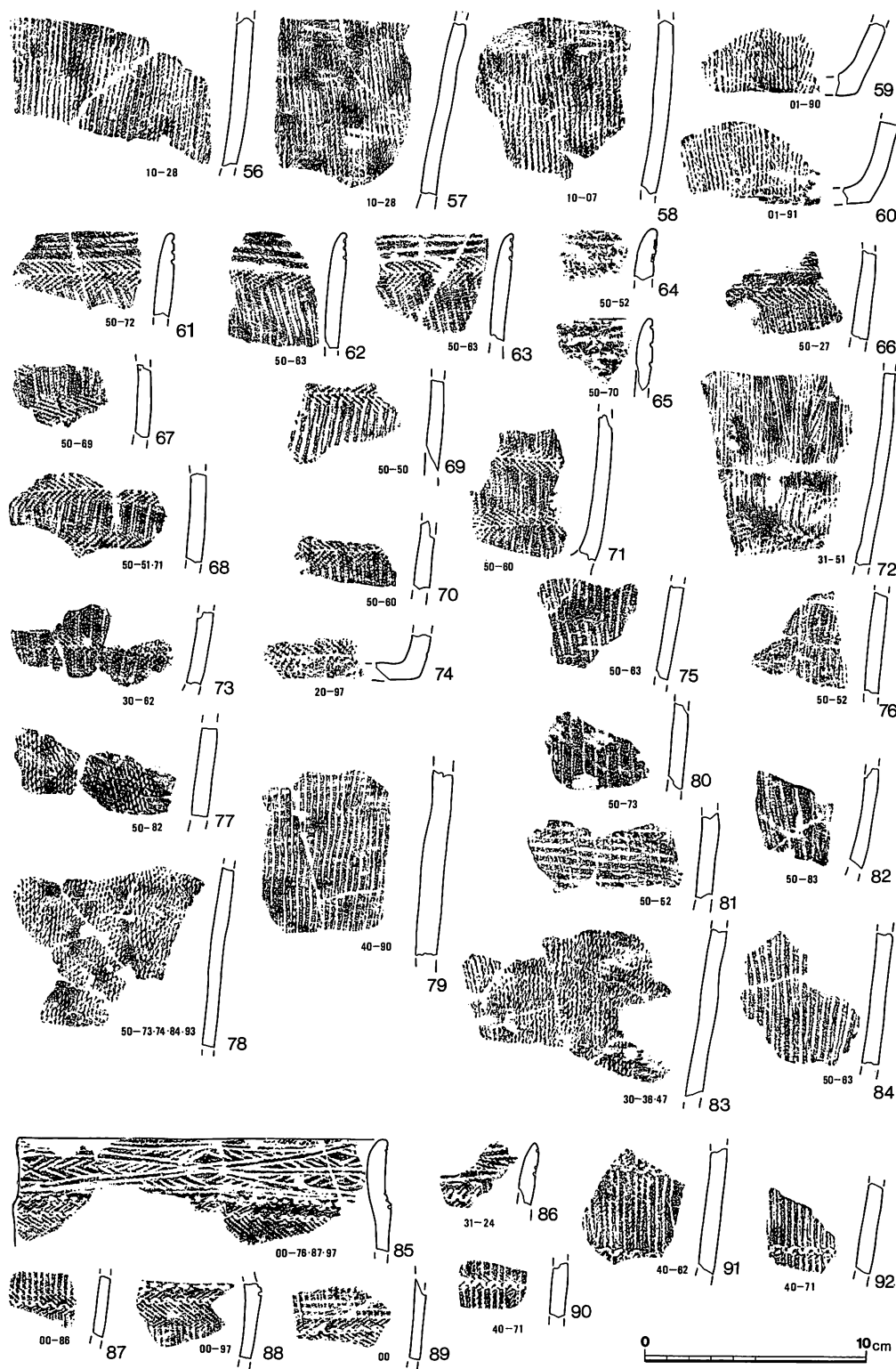


图22 土器拓影图(I群B·C类)

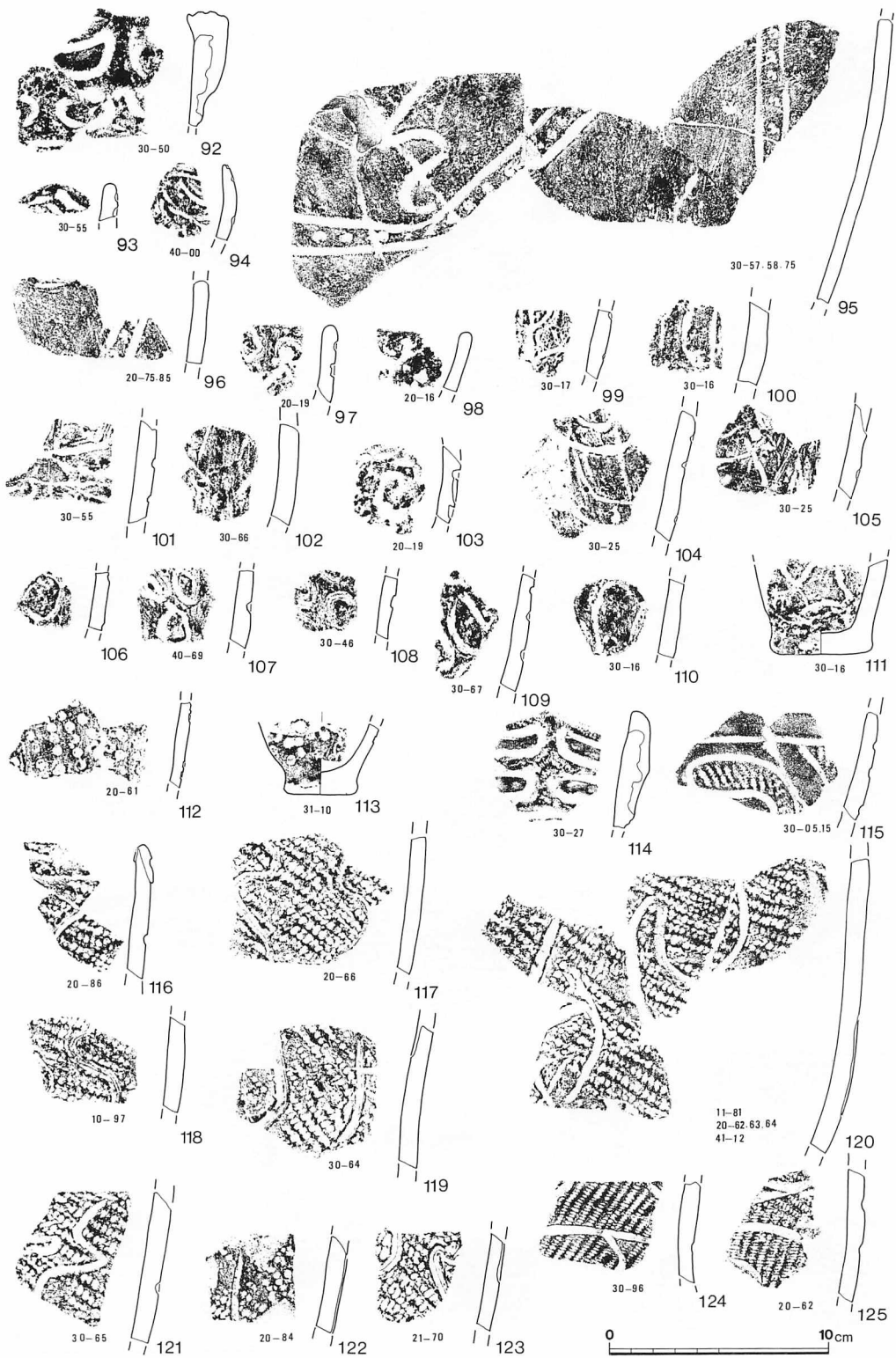


图23 土器拓影图(II群A類)



图24 土器拓影图(Ⅱ群A·B類)

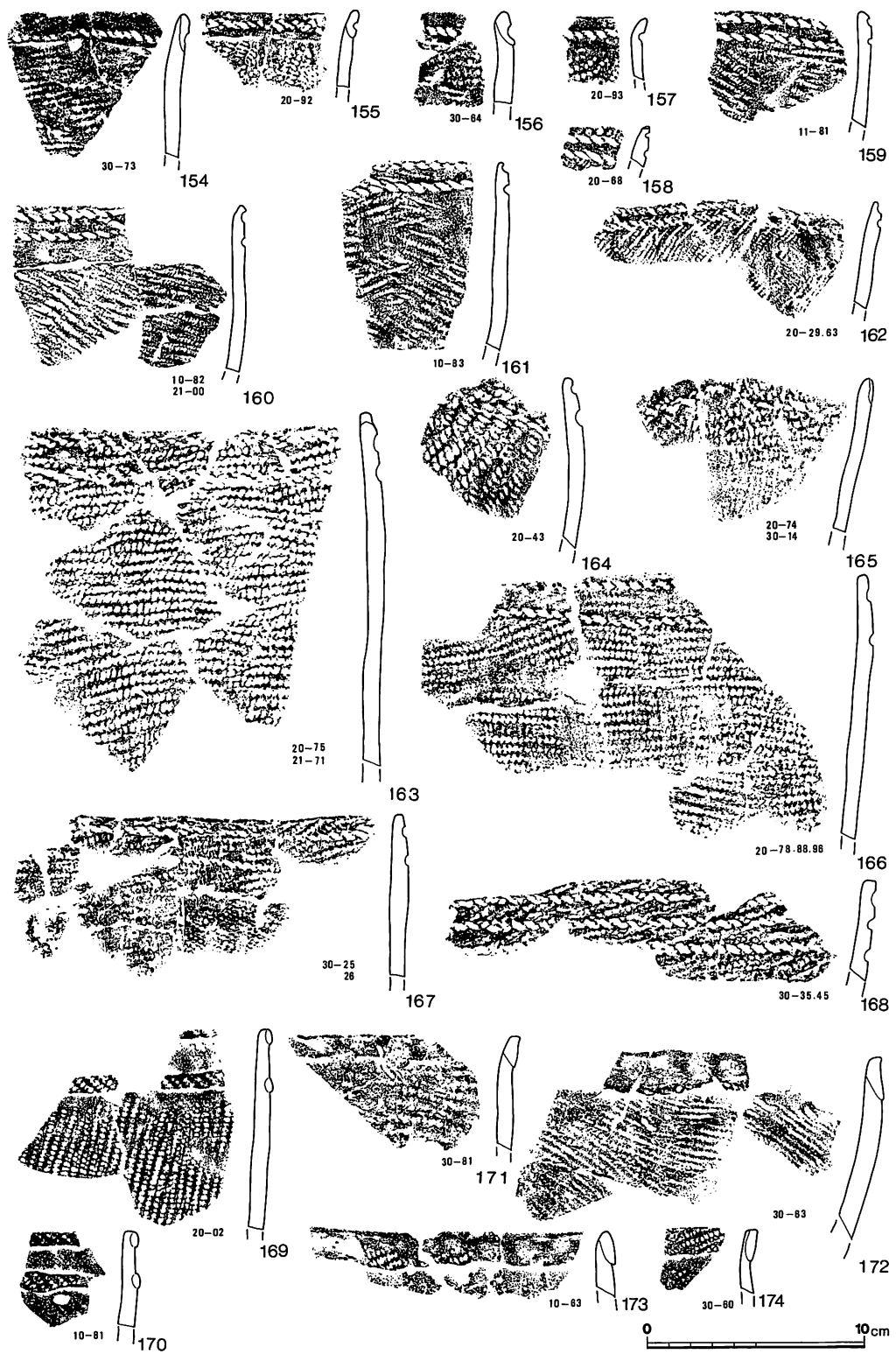


图25 土器拓影图(Ⅱ群B·C類)

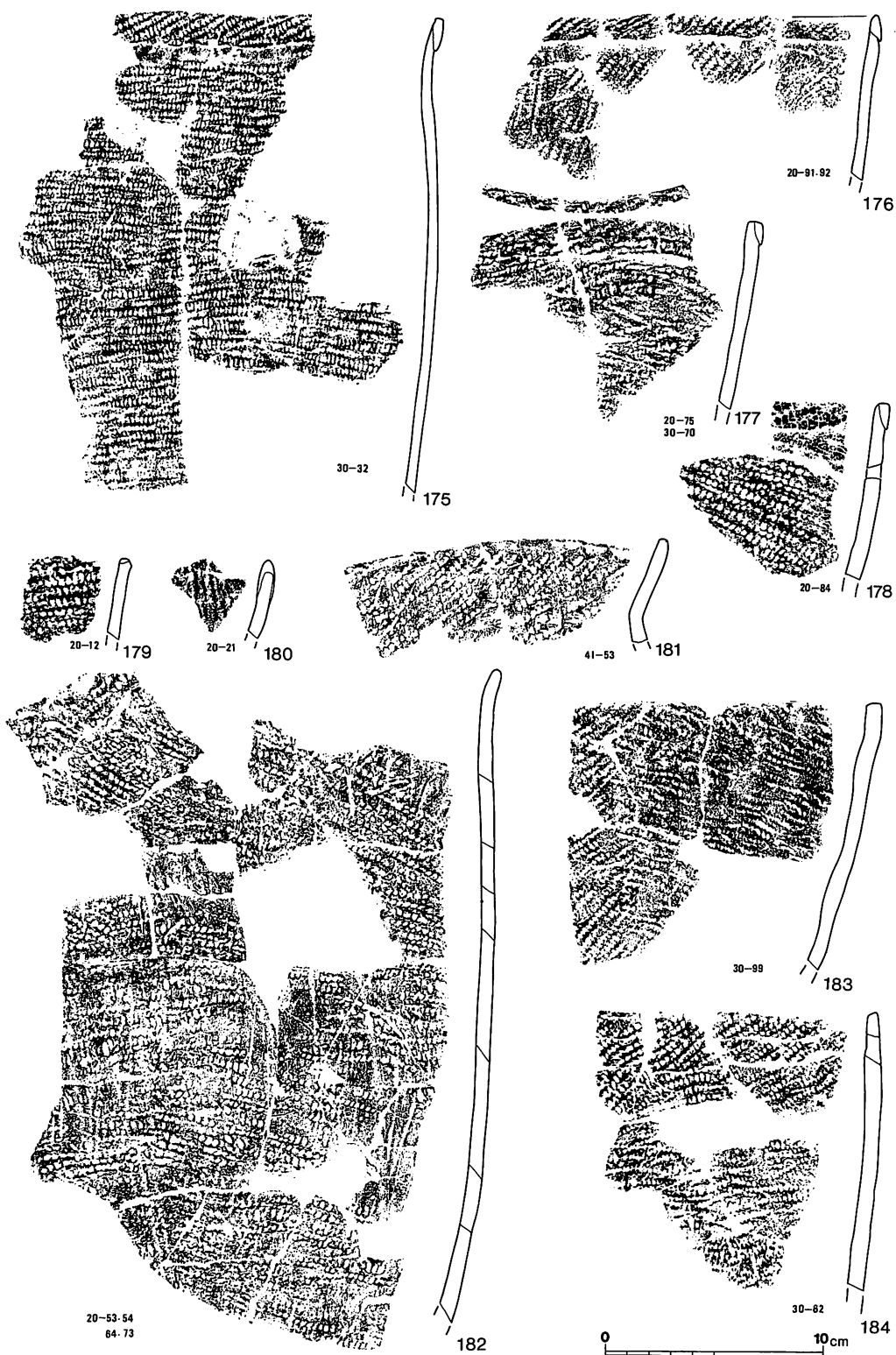


图26 土器拓影图(Ⅱ群C類)

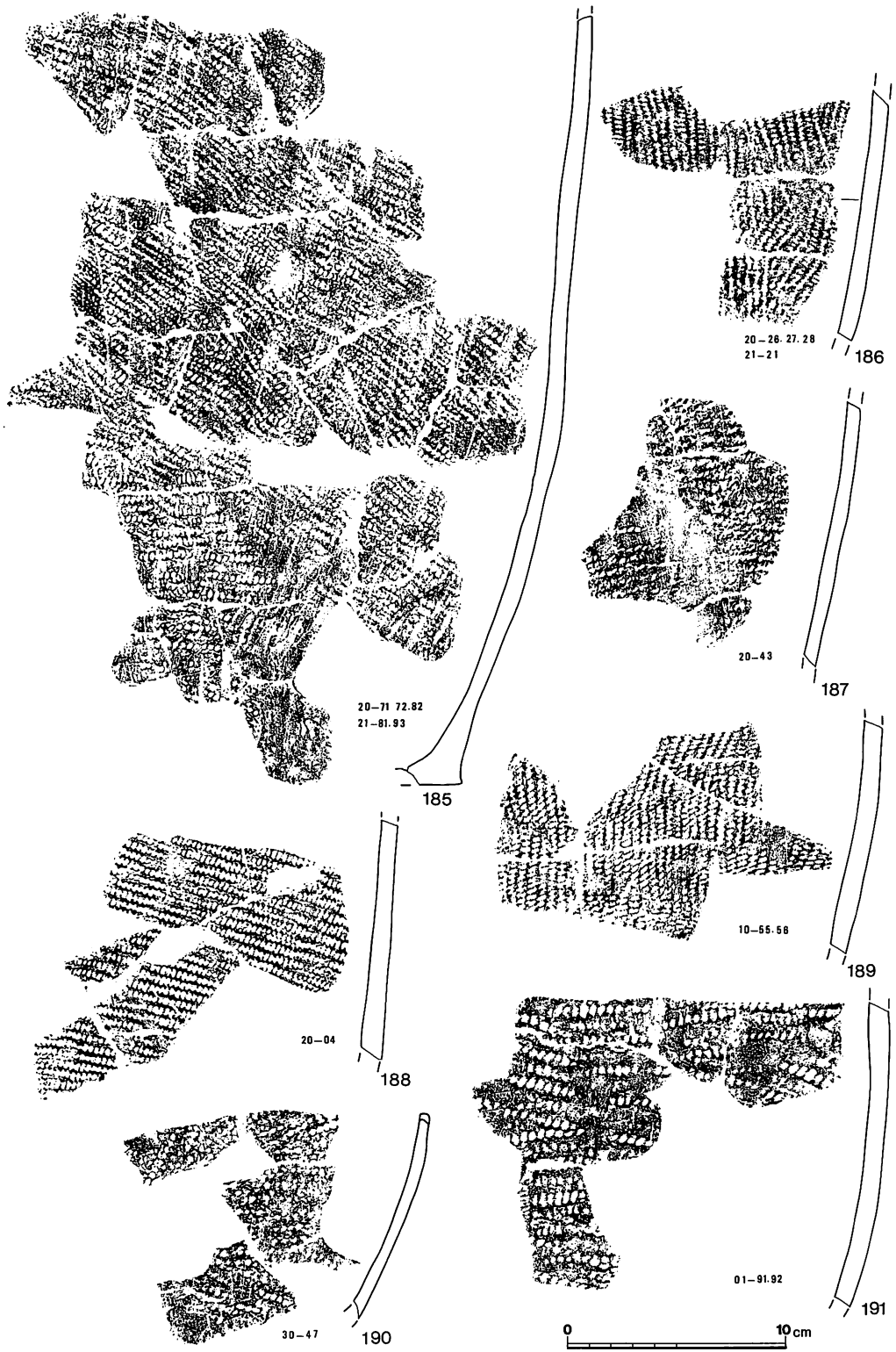


图27 土器拓影图(Ⅱ群C類)

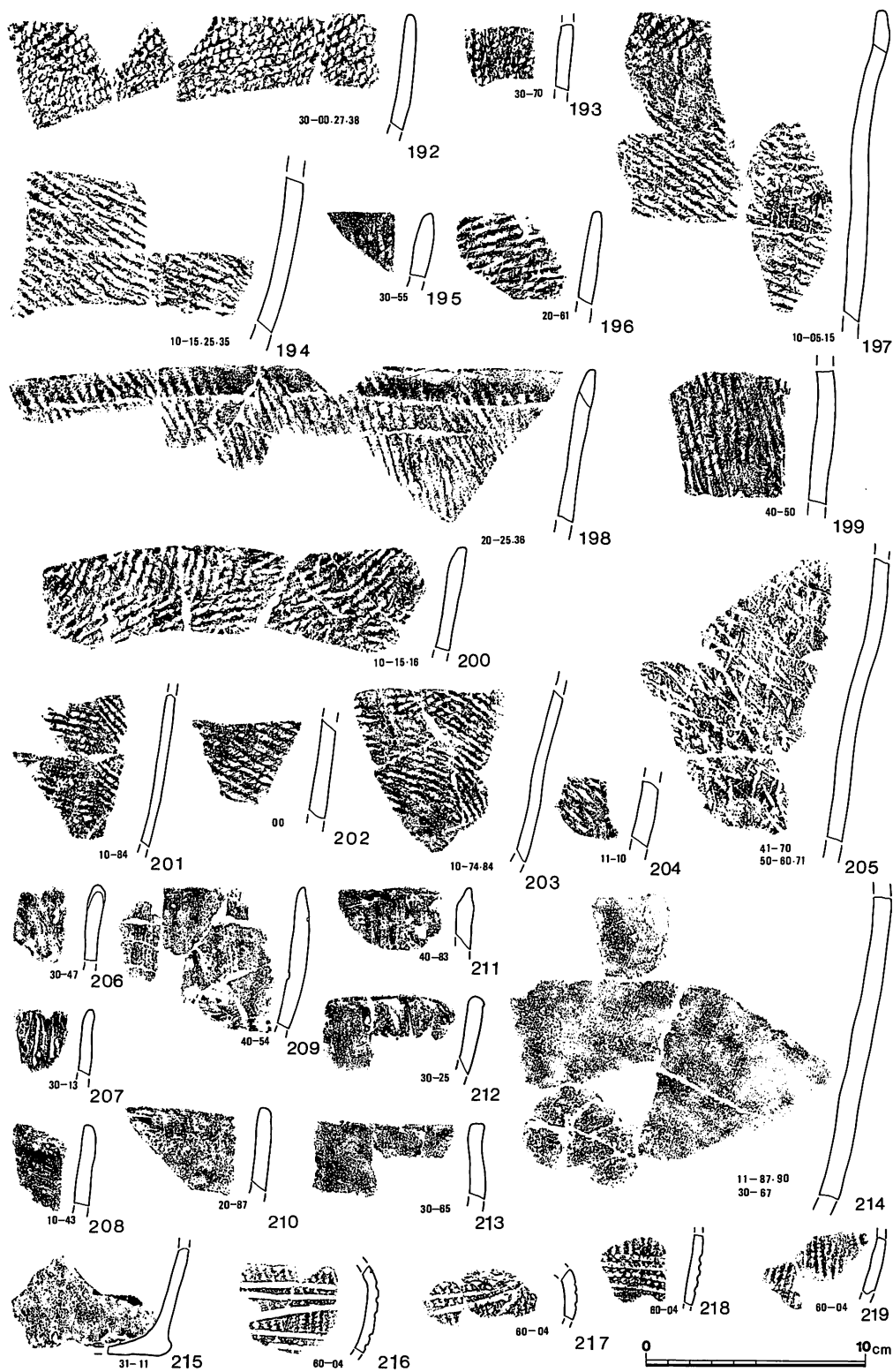


图28 土器拓影图(Ⅱ群C·D類, Ⅲ群)

No.	発掘区	計測値(cm)			
		口径	最大径	底径	高さ
1	30-21・94, 31-10, 40-03・04・14	17.7	—	9.5	16.9
2	30-27・37	—	(14.0)	—	(9.7)
3	00-59, 10-62・71, 11-20・21・32・36, 20-09・39・40・53・55・76・84・87, 21-40, 30-07・15・49・55・56・60・89, 40-72	—	(22.2)	8.8	—
4	20-62・72・79・81・85・88・89・98・99	27.3	—	—	(28.6)
5	10-95, 20-05・06・25・34, 21-31	(19.1)	—	8.9	30.5
6	30-64・96, 31-31, 40-05・06・11~16・51	24.5	25.6	—	(14.3)
7	21-61・62・71	(23.0)	—	—	(26.4)
8	20-71・85・87・88・95~97, 30-07	23.2	24.1	10.5	48.3
9	20-31・74・96, 30-40・41・51・54	25.3	26.5	(15.0)	43.8
10	20-46・71・73, 30-47・57	(23.7)	—	—	(17.0)
11	30-63・64	20.5	(24.1)	—	(36.9)
12	20-64・72~74	17.2	18.0	—	(18.4)
13	10-52, 20-96~98	11.5	11.8	6.1	15.5
14	20-00・70・72・80, 30-22	12.0	(11.4)	6.0	16.9
15	20-55・56	(21.6)	—	11.2	34.7
16	11-05	(23.1)	—	—	(29.7)
17	10-48	(22.0)	—	(8.4)	30.3
18	20-93・94・97, 30-05・15	(22.8)	(23.4)	—	(29.2)
19	30-41・42	(20.5)	—	—	(29.5)
20	30-49・58・59	—	—	—	(28.2)
21	10-05・15・17・44・54	—	(21.8)	—	(12.3)
22	20-83・84・89・93・94	—	(21.8)	—	(15.0)
23	20-46・70・71・73・74・88, 30-08	—	(30.8)	—	(38.5)
24	10-99, 20-09・29, 21-12	—	—	8.0	(13.9)
25	10-09・17・18	—	—	7.0	(11.7)
26	30-25	—	—	7.4	(15.7)
27	11-33・43, 21-51	—	—	10.1	(19.6)
28	20-81・88	—	—	(11.1)	(15.6)
29	01-70・80	—	—	5.8	(6.0)
30	00-47・48・57・58, 10-08・17	—	—	8.0	(7.0)
31	30-56	—	—	6.0	(4.1)
32	20-65, 30-59・67	—	—	8.0	(4.5)
33	20-32・42	—	—	11.0	(6.5)
34	11-22	—	—	8.8	(4.0)
35	10-54・58・65	—	—	7.2	(12.5)
36	20-74	—	—	9.1	(5.2)
37	30-53・83, 40-03	—	(9.2)	—	(17.3)
38	10-99, 11-90	(12.2)	—	—	(13.6)
39	30-53・62	—	—	(5.5)	(11.5)
40	20-44・53・63	—	—	5.8	(5.9)
41	20-42	—	—	5.4	(2.4)
42	30-25・56	—	—	5.0	(4.3)
43	20-76	—	—	2.3	(3.3)

表4 復元土器一覧 ()は推定値または残高

2. 石 器

今回の発掘調査によって得られた石器・剥片の数は1,705点である。このうち竪穴内出土の362点を除く1,343点について述べる。内訳は下表のとおりで、殆どがI群土器にともなう。

グリッド 種 別	00	01	10	11	20	21	30	31	40	41	50	51	60	61	計
石 鏃				1			1	1							3
石 槍							2								2
石 匙					1		1		1						3
搔 器		1		5	4		2	1	3		2		2		20
ノ ッ チ	1		1	1	2						1				6
R・F				3	5		5								13
U・F	1		6	4	13	2	11		3		1				41
石 核	2	3		1	4	2	1		1		1				15
原 石	1		1	2	2	2									8
剥 片	7	4	37	196	186	17	138	3	19	2	16	1	8		634
石 斧				1	4					1	1				7
石 錘		1	2												3
敲 石	1		4	2	5	1	4				4				21
擦 石		2	4	1	7		6		1		5		2		28
台 石	1				1					1			2		5
焼石・礫	3	1	57	11	284	2	139		18	2	14		3		534
計	17	12	112	228	518	26	310	5	46	6	45	1	17	0	1343

※ R・Fは調整痕のある剥片 U・Fは使用痕のある剥片(いずれも肉眼による分類)

表5 石器・剥片一覧(竪穴出土分は除く)

剥片石器・礫石器の出土位置を図29・30に示した。剥片石器は11・20・30区に多く、これは、旧地表面の標高46mの等高線にほぼ沿っている。礫石器は10・20・50区に多く、10・20区周辺の分布は、剥片石器が分布している線の内側(遺跡の主体部側)に沿っている。また、50区には定形的な擦石と台石が集中しているのが目立っている。

なお、剥片の分布及び接合資料についてはIV章で触れる。

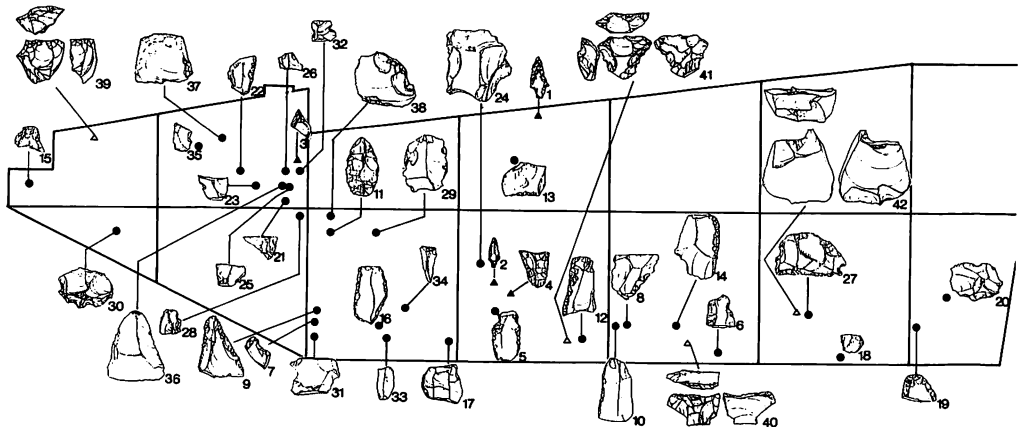


図29 剥片石器出土位置

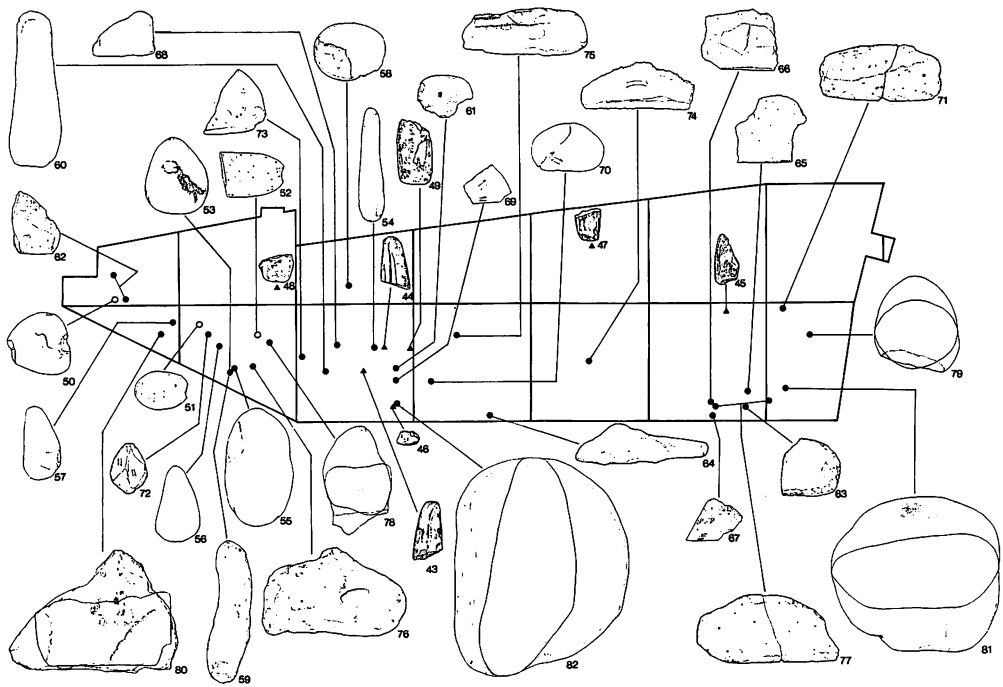


図30 礫石器出土分布図

剥片石器をみると、定形的なものは少なく、破損品や未製品が目立つ。図31-1・2の石鏃は、何れも中央部から基部にかけて湾曲している。4・5はともに凝灰岩製で、非常に柔らかく軽い。これらはあまり実用的とは思われない。量的には、縦長剥片の側縁を調整した搔器（9・10・12・14・16）が多いが、調整は粗雑である。11は一見すると石槍のようであるが、先端部をつぶしてあり、搔器あるいはナイフの用途を持つものと考えられる。石核（39～42）については、それぞれ同一母岩の剥片が出土しているが、直接の接合関係が把握されたのは39だけである。これについては、接合資料の項で詳述する。43～49は石斧及び石斧片である。何れもかなり使い込まれており、破損が著しい。石錘は3点出土した。材質も重量もまちまちである。67は石鋸としての機能を有する資料と考えられる。（田才 雅彦）

3. その他の遺物

図42-1～5は、寛永通宝の銅一文銭である。1・2は本遺跡表土から、3～4は隣接する矢不來天満宮跡から採集した。いずれも裏に文字はない。

写真図版30-1は、本遺跡及び矢不來天満宮跡で表採した陶磁器・鉄製品である。本遺跡のものは左上の3点で、いずれも御神酒徳利の破片である。薄手の白い胎土に呉須で線を描き、無色透明の釉をかけた磁器である。矢不來天満宮跡のものは、大半が鉄釉の徳利片で、他に呉須のスタンプの茶碗や皿等の磁器片、刃物と思われる鉄製品がある。

本遺跡所在地が、矢不來天満宮社有地であったことからみて、寛永通宝や陶磁器等は、ほとんどが矢不來天満宮に関わる遺物であるといえよう。（三浦 正人）

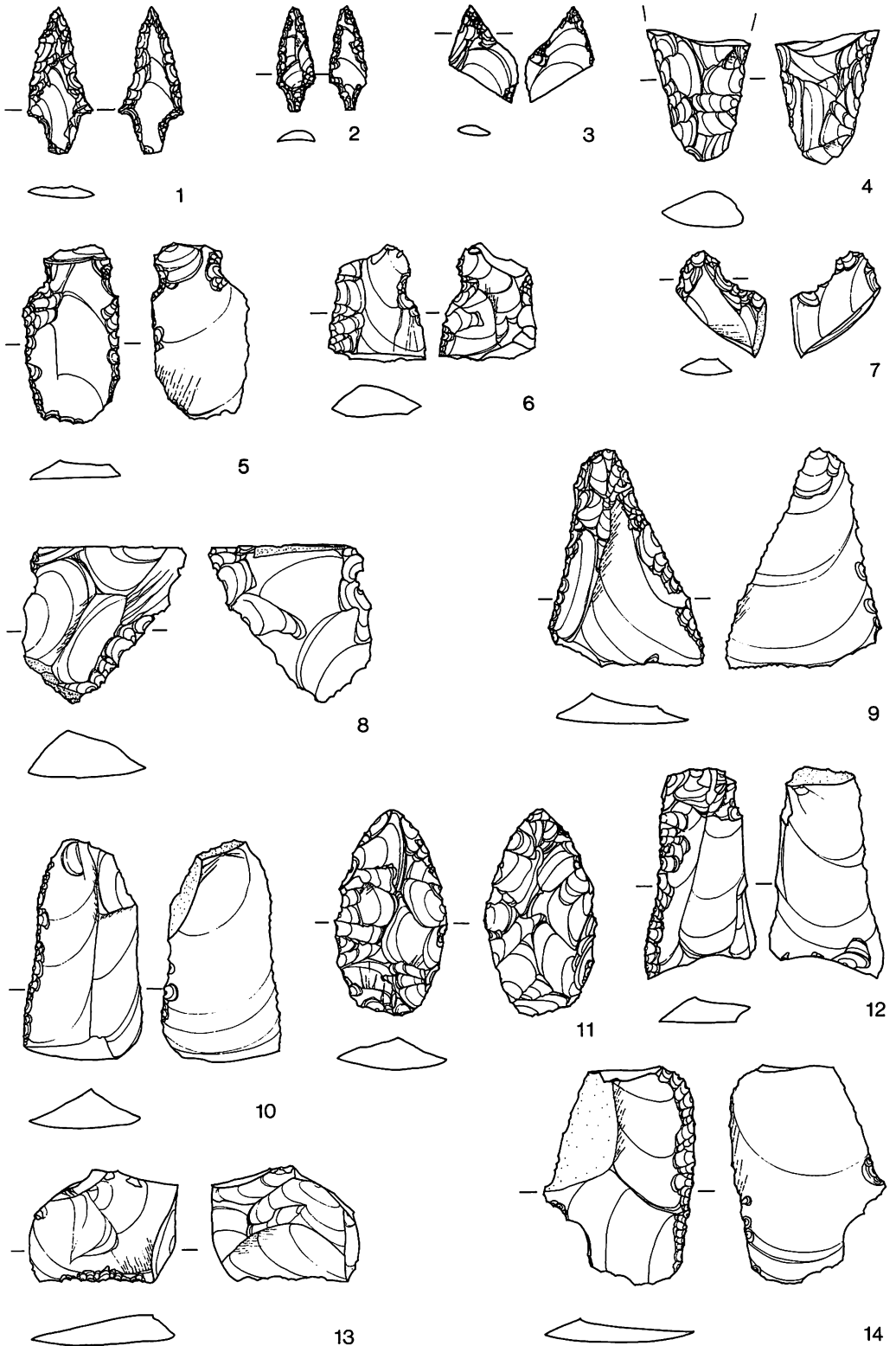


図31 包含層出土の石器

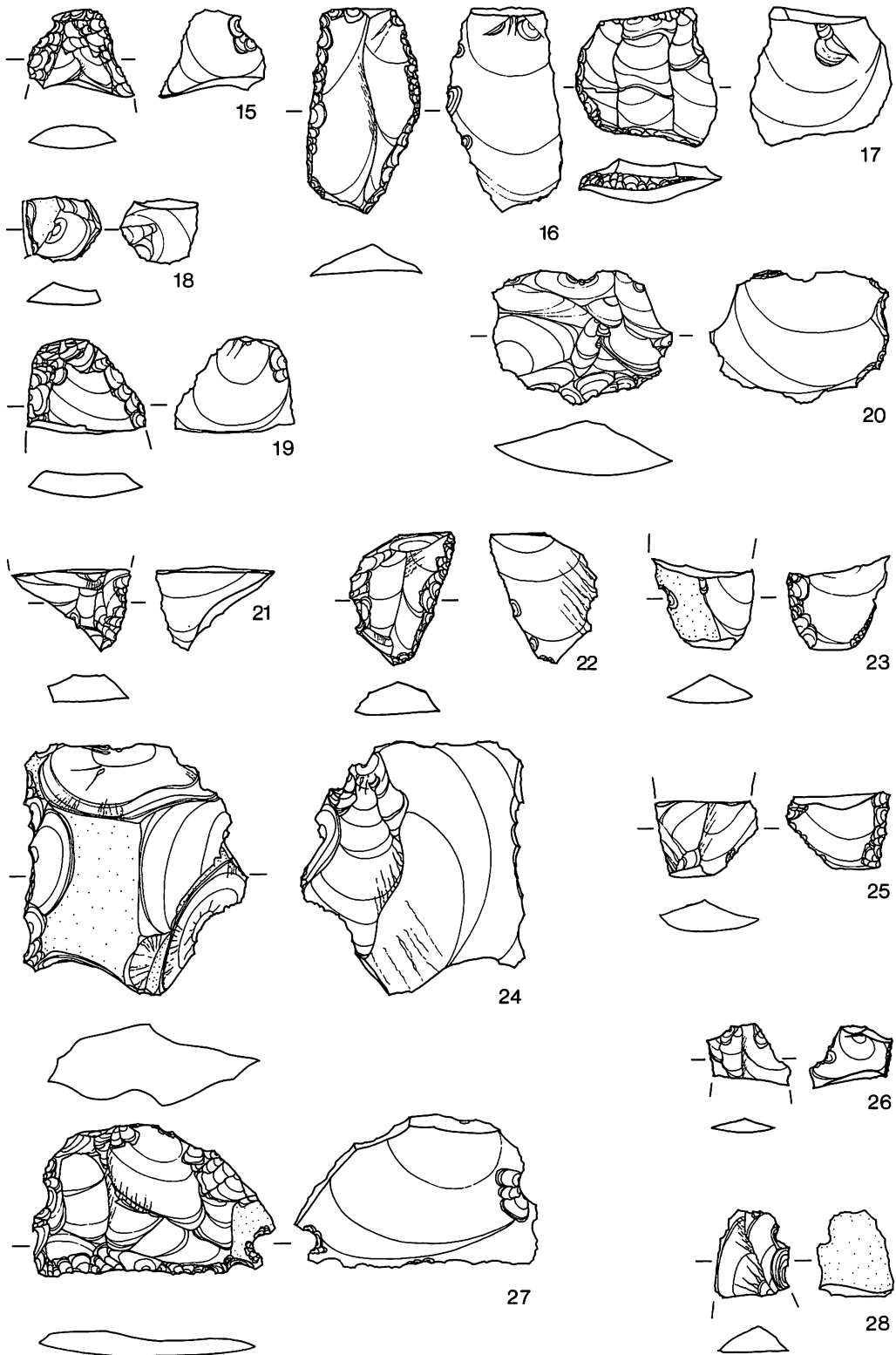


図32 包含層出土の石器

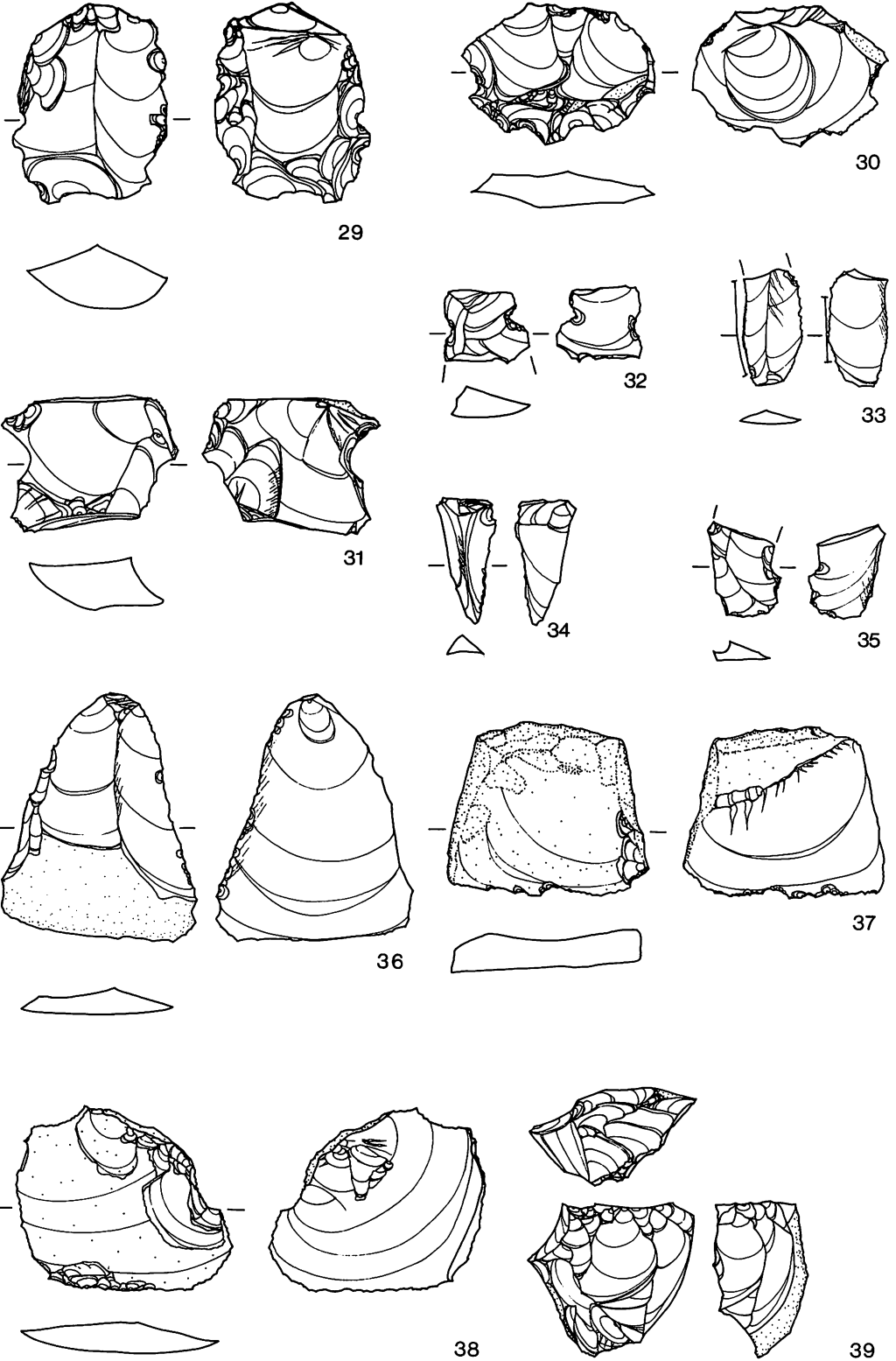


図33 包含層出土の石器

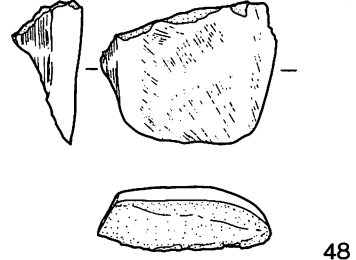
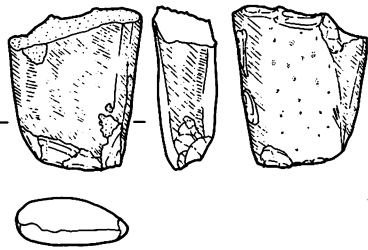
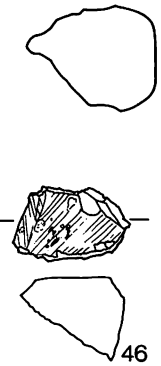
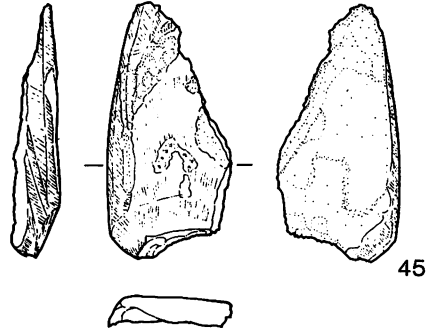
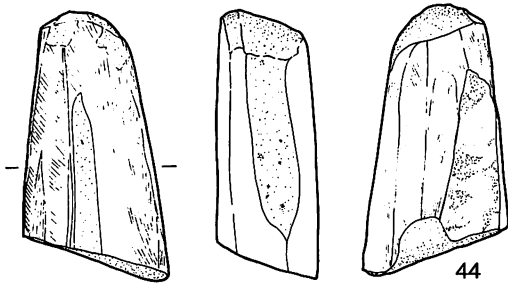
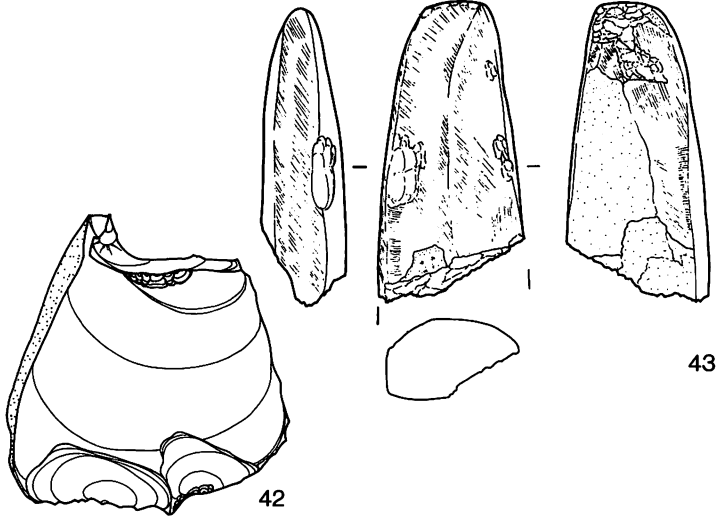
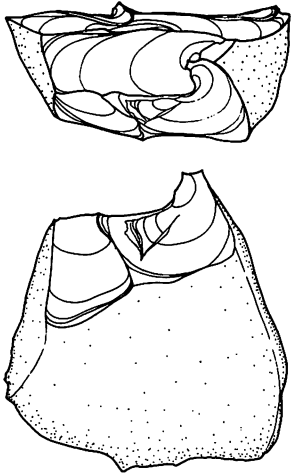
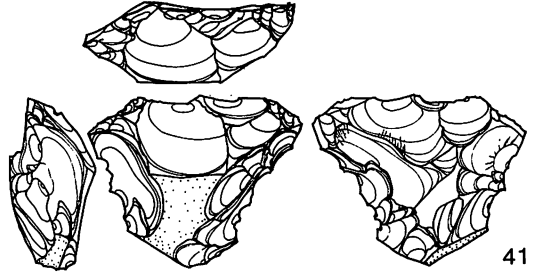
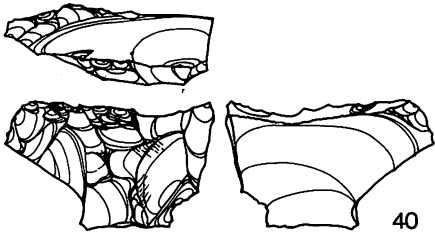
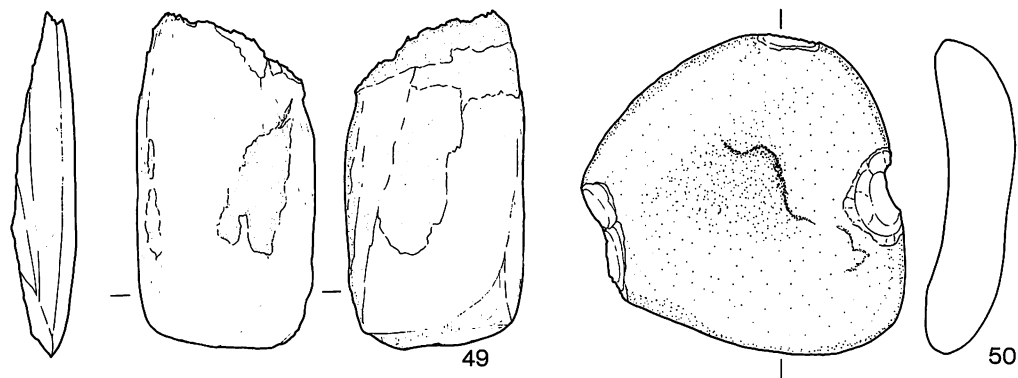
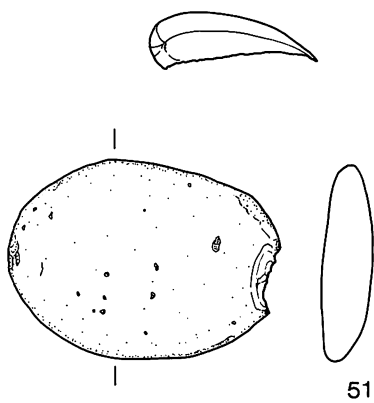


図34 包含層出土の石器

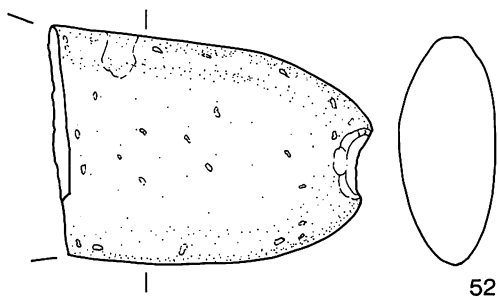


49

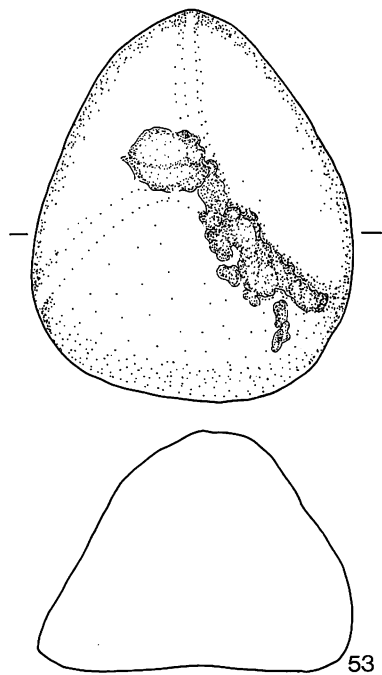
50



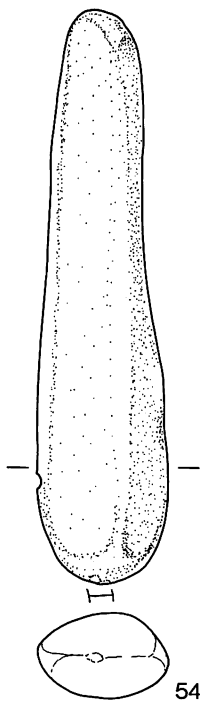
51



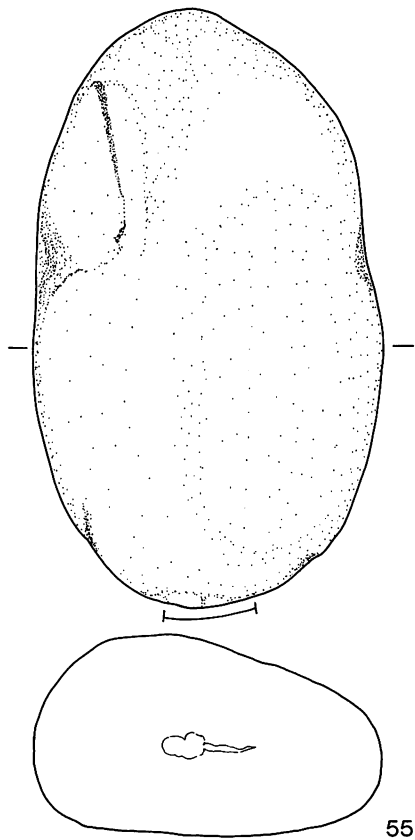
52



53



54



55

図35 包含層出土の石器

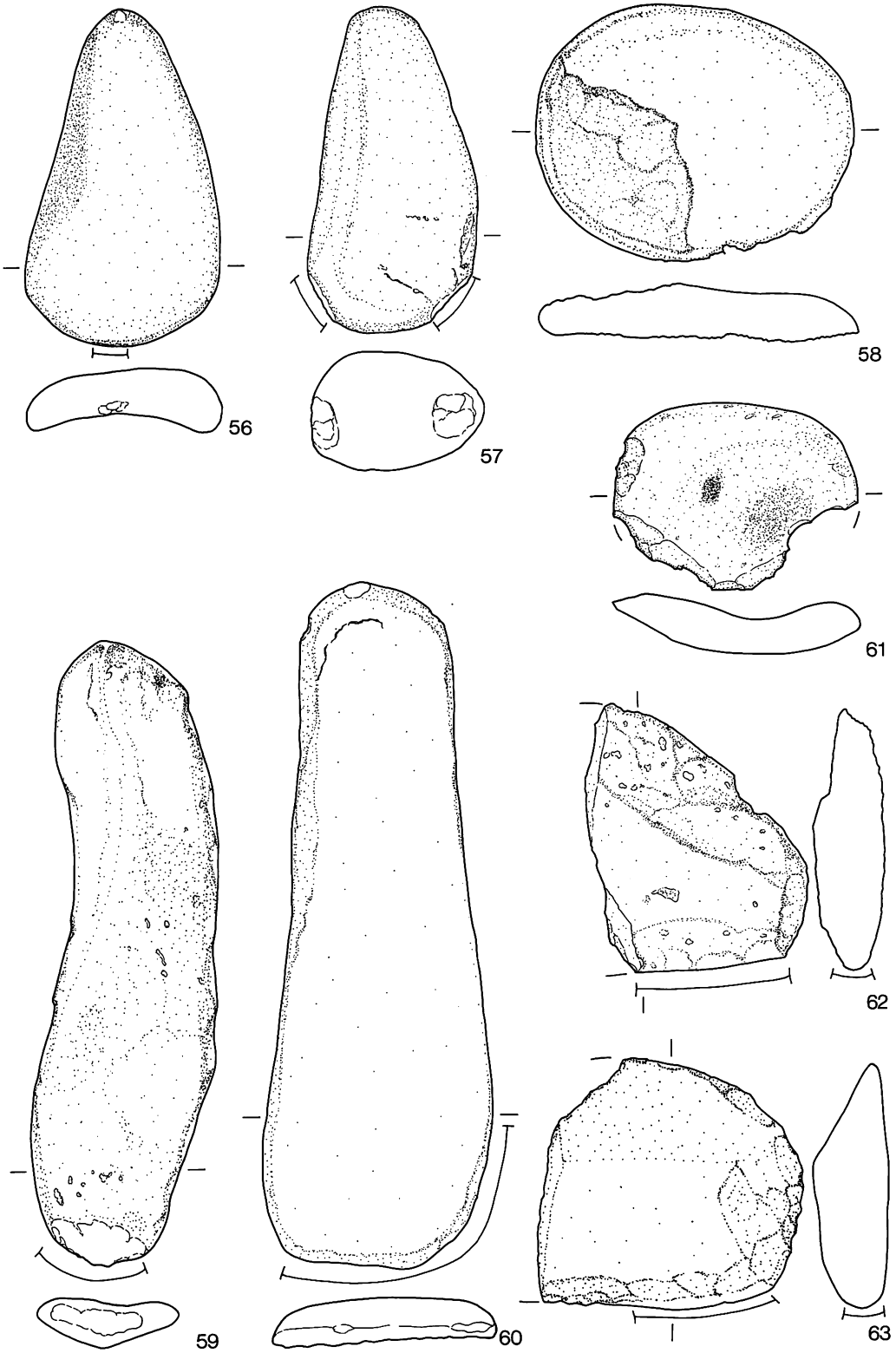
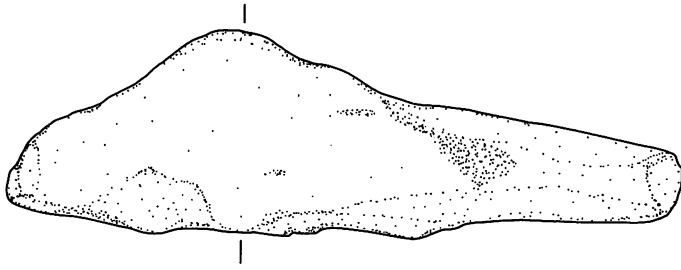
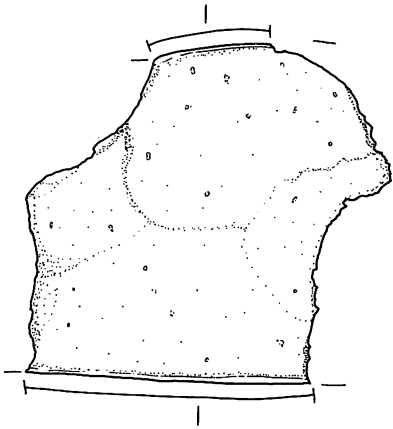


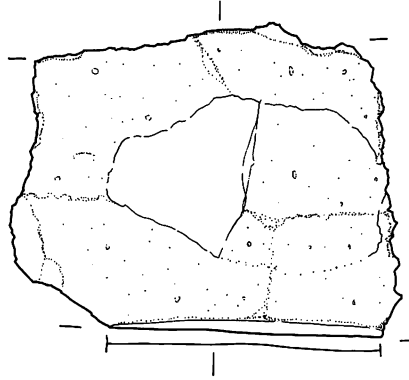
図36 包含層出土の石器



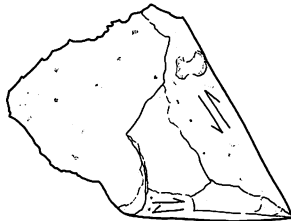
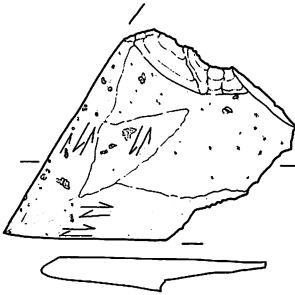
64



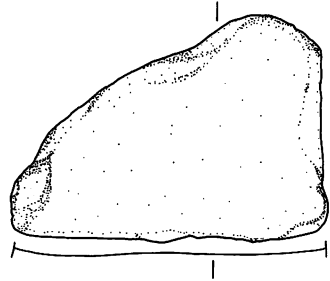
65



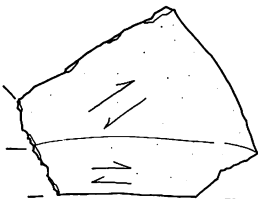
66



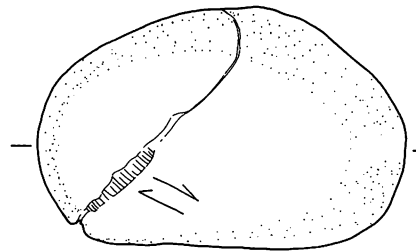
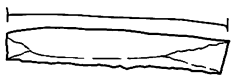
67



68

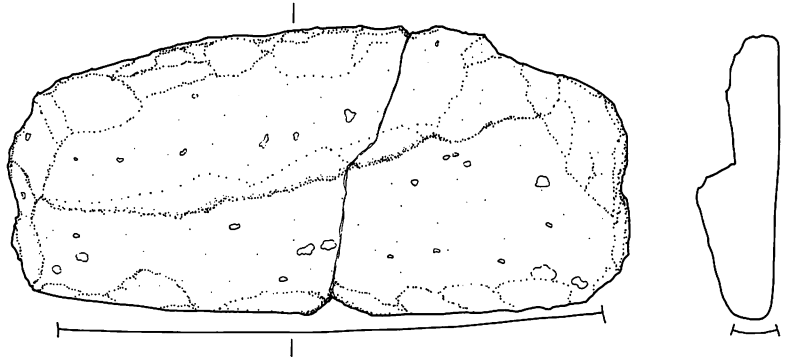


69

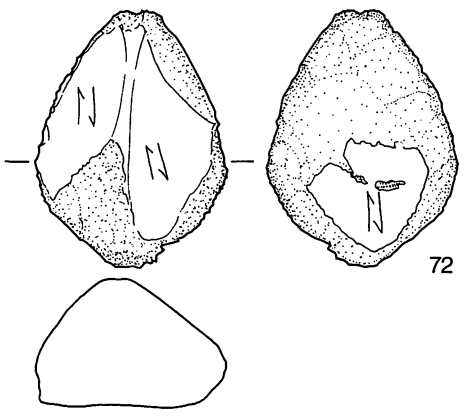


70

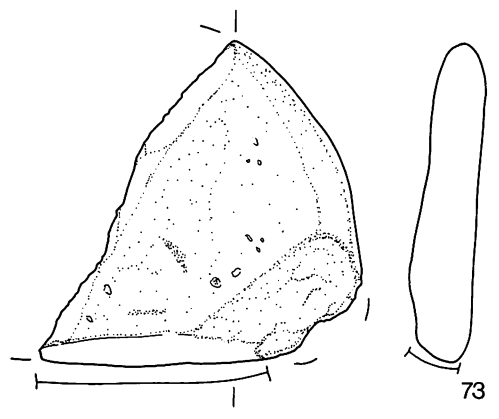
図37 包含層出土の石器



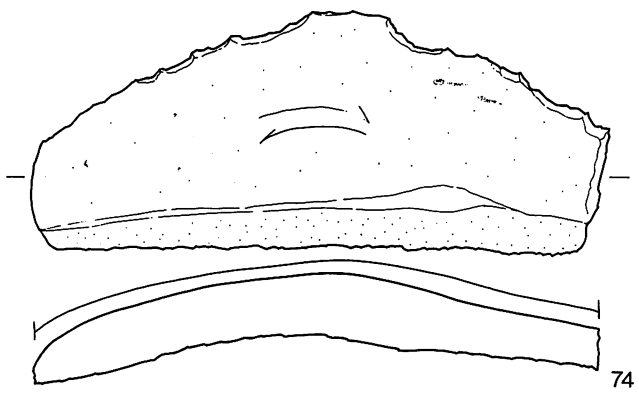
71



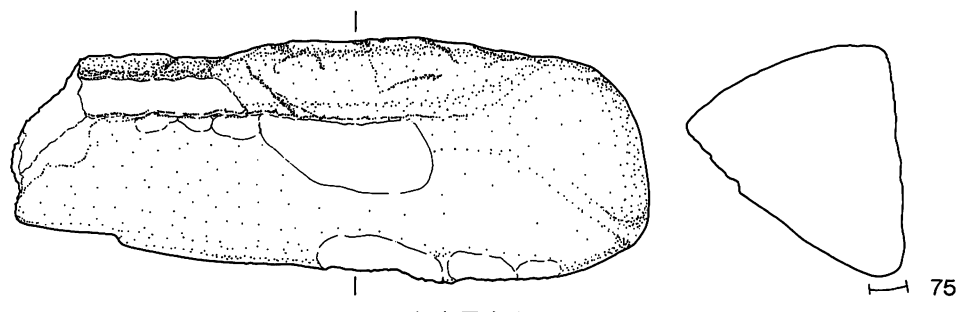
72



73

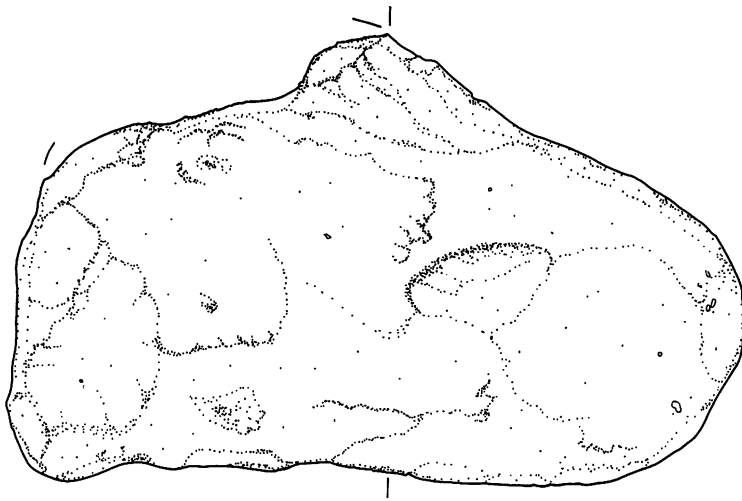


74

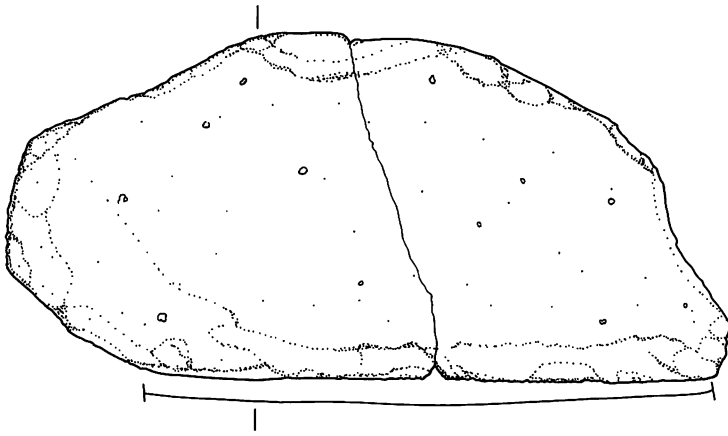


75

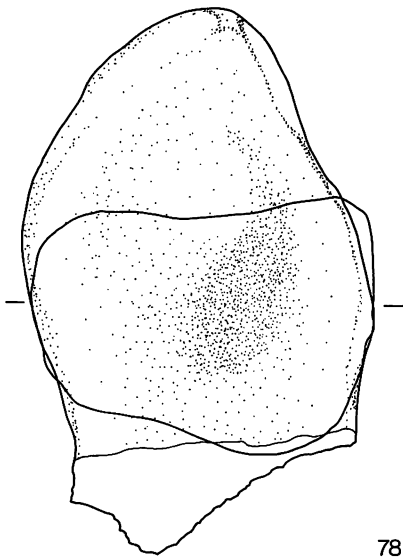
図38 包含層出土の石器



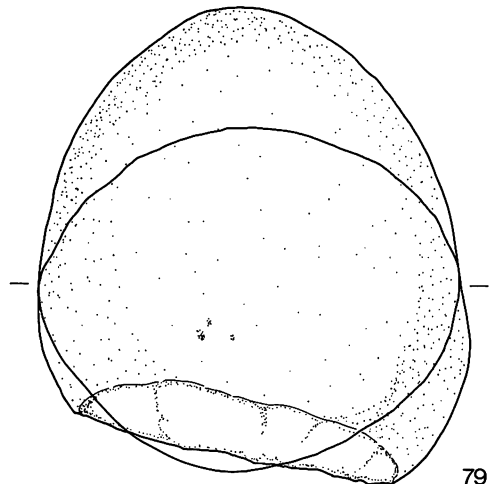
76



77

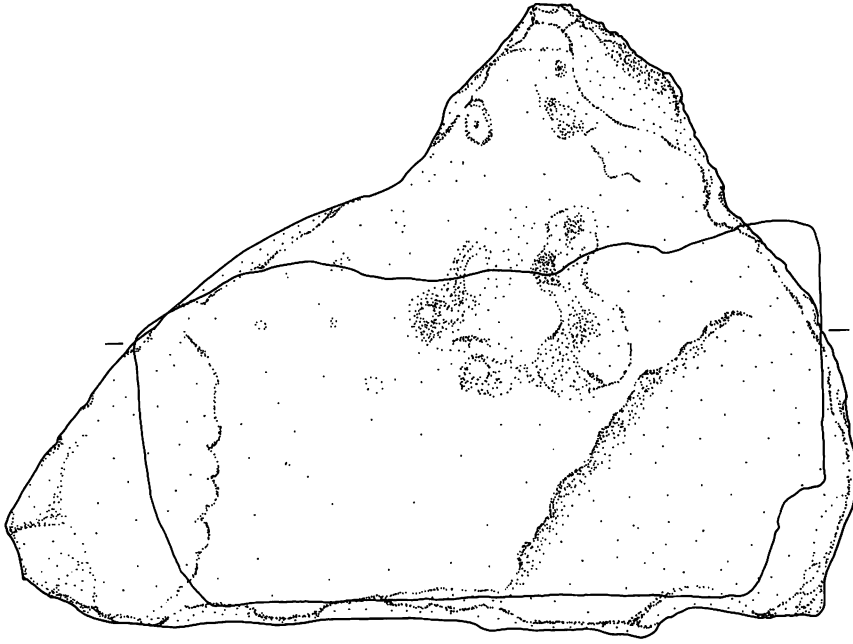


78

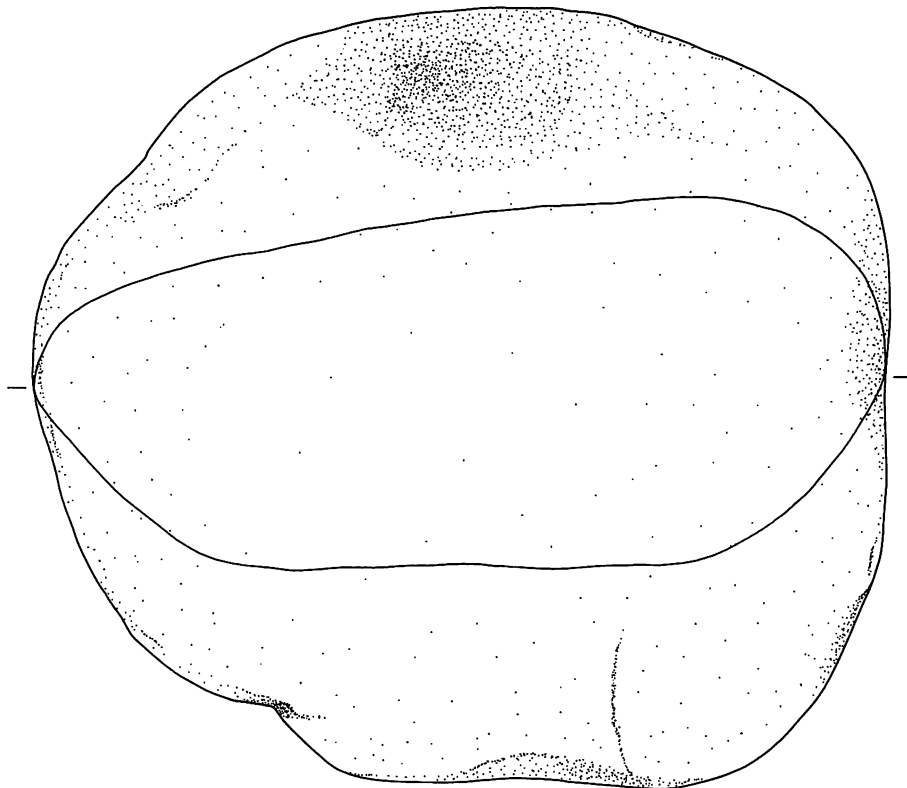


79

図39 包含層出土の石器

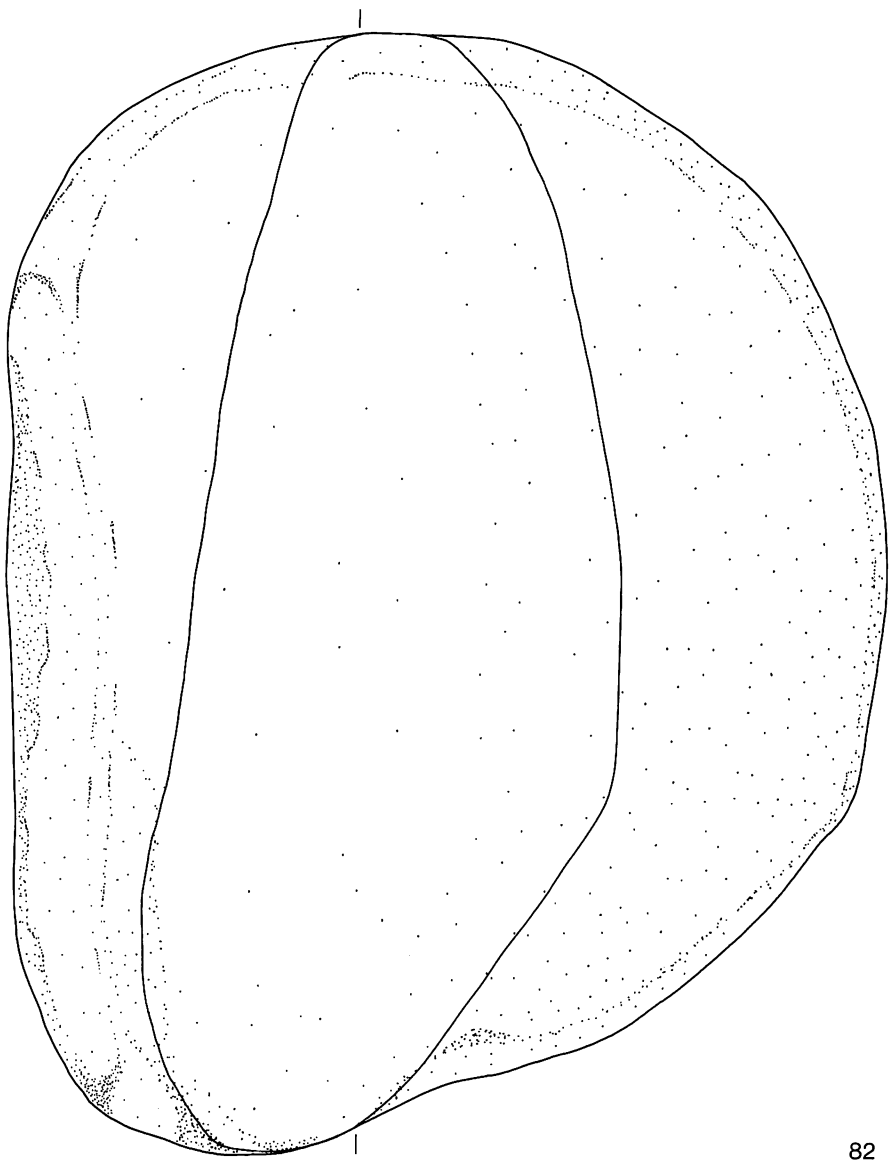


80



81

図40 包含層出土の石器



82

図41 包含層出土の石器

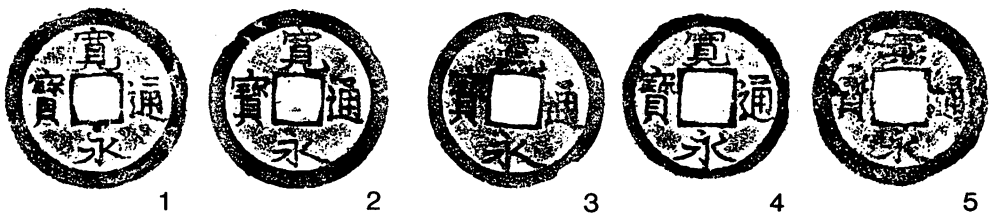


図42 寛永通宝，拓影

標号	番号	グリット	層位	器種名	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	3	31-56	II	石 鏃	4.44	1.98	0.41	2.7	珪 質 頁 岩	
2	64	30-25	"	"	3.17	1.13	0.32	1.3	"	
3	2	11-93	"	"	(1.86)	(0.86)	(0.22)	(1.0)	"	未製品
4	167	30-34	"	石 槍	(3.74)	(2.50)	(1.20)	(8.0)	凝 灰 岩	先端部欠損
5	24	30-23	"	石 匙	5.28	2.88	0.55	8.4	"	
6	14	40-70	"	"	(3.02)	(2.62)	(1.90)	(10.3)	珪 質 頁 岩	未製品
7	349	20-02	"	"	(3.30)	(1.96)	(0.64)	(5.2)	"	"
8	19	40-12	"	搔 器	4.90	3.62	1.36	31.4	"	
9	18	40-02	"	"	6.52	4.09	0.88	23.9	"	
10	156	20-03	地割れ	"	6.56	3.28	1.14	30.5	"	
11	81	20-18	II	"	6.29	3.46	1.05	24.1	"	
12	58	30-81	"	"	5.78	2.78	0.67	19.1	"	
13	8	31-33	"	"	3.40	4.50	0.98	17.6	"	
14	7	01-01	"	"	6.55	4.55	0.61	23.3	頁 岩	
15	164	40-42	"	"	(2.28)	(2.64)	(0.65)	(6.1)	珪 質 頁 岩	先端部欠損
16	34	20-42	"	"	5.90	3.30	1.71	20.6	"	
17	33	20-91	"	"	3.66	4.24	0.85	18.4	"	
18	101	60-02	"	"	(2.36)	(2.21)	(0.63)	(2.9)	"	欠損
19	84	50-50	"	"	(2.84)	(3.50)	(0.65)	(9.0)	"	先端部欠損
20	146	60-24	"	"	3.74	5.40	1.52	31.6	"	
21	161	11-80	"	"	(2.40)	(3.61)	(0.79)	(6.7)	"	欠損
22	345	11-52	"	"	3.92	2.49	0.88	12.3	"	
23	4	11-61	"	"	(2.34)	(2.66)	(0.80)	(6.2)	"	欠損
24	94	30-16	"	"	7.10	6.54	2.34	126.0	"	
25	5	11-81	"	"	(2.26)	(3.03)	(0.90)	(7.1)	"	欠損
26	6	11-82	"	"	(1.58)	(1.90)	(0.50)	(2.1)	"	"
27	82	50-33	"	ノッチ	4.52	6.59	0.69	35.9	"	
28	351	10-93	"	"	(2.61)	(2.10)	(0.89)	(4.9)	"	欠損
29	325	20-48	"	"	5.51	4.26	1.90	53.5	"	
30	13	00-78	"	"	4.26	5.46	0.91	27.5	"	
31	321	20-01	"	"	3.86	4.03	1.50	46.1	"	
32	160	11-92	"	"	2.10	2.52	0.90	4.9	"	
33	1	11-81	"	U・F	(3.38)	(1.81)	(0.36)	(2.5)	"	欠損
34	11	11-44	"	"	3.37	1.15	0.46	3.8	珪 岩	
35	338	20-19	"	"	2.57	1.72	0.57	4.0	"	
36	27	20-51	"	R・F	7.38	4.58	0.82	36.9	"	
37	343	11	I	"	4.92	6.15	0.73	76.2	"	
38	333	20-63	II	"	5.53	6.17	0.58	42.7	"	
39	10	01-54	"	石 核	4.62	4.81	2.53	59.0	"	
40	17	40-51	"	"	3.34	5.20	1.73	31.2	"	
41	21	30-71	"	"	4.53	5.67	2.03	44.6	"	
42	313	50-23	"	"	6.80	6.76	3.07	210	"	
43	13	20-54	"	石 斧	(7.14)	(3.71)	(2.20)	(96.6)	泥 岩	刃部欠損
44	24	50-69	"	"	(6.28)	(3.50)	(2.69)	(114.8)	"	"
45	36	41	I	"	(6.71)	(3.20)	(1.17)	(33.5)	"	欠損
46	22	20-76	II	"	(1.80)	(2.90)	(1.72)	(16.2)	泥岩か珪質頁岩	全損、赤褐色、暗赤褐色を呈す。
47	29	20-81	"	"	(4.10)	(3.52)	(1.58)	(38.0)	泥 岩	基部欠損
48	1	11-81	"	"	(3.58)	(4.64)	(1.75)	(27.6)	"	"
49	23	20-96	"	"	(8.39)	(4.35)	(1.39)	(87.3)	片 岩	"
50	3	01-40	"	石 錘	8.27	7.70	1.79	195	砂 岩	
51	26	10-18	"	"	5.19	6.97	1.36	62.9	安 山 岩	
52	80	10-67	"	"	6.18	8.15	2.58	222	凝 灰 岩	
53	40	10-44	"	敲 石	10.53	8.60	6.09	645	砂 岩	
54	68	10-44	II	"	15.0	3.5	2.3	119.7	凝 灰 岩	
55	30	11-16	"	"	15.80	9.20	5.20	1200	砂 岩	
56	15	20-66	"	"	10.18	5.89	1.58	160	"	
57	41	10-36	"	"	10.00	5.22	3.53	260	"	
58	54	00-98	"	"	7.9	9.7	1.7	180	"	
59	58	21-41	"	"	19.1	4.5	2.0	340	凝 灰 岩	焼けている
60	78	20-24	"	"	21.0	6.9	1.5	380	砂 岩	

表 6 - 1 実測石器一覧

種別 番号	遺物 番号	グリット	層位	器種名	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
61	38	20-84	II	擦石	5.68	7.52	0.97	49.8	凝灰岩	
62	34	50-51	"	"	8.0	6.3	2.15	130	安山岩	
63	37	20-36	"	"	7.69	7.84	2.16	200	"	
64	52	10-27	"	"	17.95	5.40	1.60	235	凝灰岩	
65	19	50-81	"	"	8.8	8.8	1.0	100	安山岩	
66	33	50-82	"	"	8.1	9.7	1.2	140	"	
67	28	30-60	"	"	5.6	6.0	0.5	31.2	流紋岩(?)	
68	51	60-19	"	"	5.55	8.28	2.00	97.4	砂岩	
69	44	30-13	"	"	5.09	6.20	0.96	41.1	"	
70	35	50-50	"	"	6.39	9.68	2.00	155	凝灰質泥岩	
71	5 31	01-42 01-50	"	"	7.51	16.14	2.31	410	安山岩	
72	55	20-05	"	"	6.7	5.2	3.4	118.9	砂岩	
73	39	20-83	"	"	9.5	6.9	1.7	125	凝灰岩	
74	60	40	I	"	6.2	15.0	1.7	225	砂岩	
75	62	30-37	II	"	16.8	6.15	5.6	880	"	
76	69	10-64	"	"	19.4	11.6	1.5	510	凝灰岩	
77	70 74	50-51 60-01	"	"	18.3	9.1	1.6	450	安山岩	
78	81	10-76	"	"	13.5	9.1	6.1	1100	砂岩	
79	50	00-87	"	台石	12.0	11.4	9.1	1850	"	
80	25	60-37	"	"	16.5	18.5	9.3	4300	安山炭	
81	75	60-12	"	"	20.7	22.6	9.7	7000	砂岩	
82	10	20-81	"	"	23.5	29.7	11.6	13000	"	

表6-2 実測石器一覽



図43 石器接合関係図

IV ま と め

今回の調査は、矢不來2遺跡のごく一部を掘ったに過ぎず、もとより遺跡の全貌を知り得るものではないが、以下に若干の知見を記す。

1. 竪 穴

本竪穴は径320cm前後のほぼ円形を呈している。床面積は約8㎡であるが、大小9つのピットが掘り込まれており、有効面積は更に少ない。ピット1と4の間は約150cm、柱穴1とピット3の間は100cmに過ぎない。しかも床面は中央部に向かって全体に傾斜しており、殊に柱穴2側が顕著である。また床面には炉跡や焼土はなく、土器片も1cmにも満たない細片が1点出土しただけである。以上の点を考え合わせると、本竪穴は通常の住居とは異なった性格を有していたと考えられる。

本竪穴の特異な点は、床面出土遺物の大半が剥片であることから窺える。これらの多くは中央部から出土し、一部は柱穴1北側にもみられる。柱穴1北側には、床面より若干浮いた位置に剥片の集中があり、中央部出土の剥片との間に幾つかの接合関係が確認されている。更に、中央部の床面から出土した石器(118)と、柱穴1付近出土の2つの剥片とが接合しており、本竪穴の中で剥片石器を製作していたことが想定される。

なお、遺物や床面の炭化物の分布をみると、中央部から西側部分にかけての範囲が中心で、東側部分はほとんど見られない。皿状ピットも西側部分にのみ作られている。従って、西側部分が主な作業空間であり、東側部分は出入口などに相当すると思われる。

竪穴内で確認した柱穴は2ヵ所であり、いずれも若干内傾して穿たれている。小ピット1は、2つの柱穴を結ぶ線の中心点、竪穴全体からみてもほぼ中央に位置しており、壙底面、壁面ともに固く締っている。深さは15cmと浅いが、中央柱穴の可能性もある。

小ピット2は、前述したように灰白色の砂が詰められている。こうしたピットの例は、函館空港第4地点遺跡(千代他 1977)、南茅部町ハマナス野遺跡(小笠原 1984他)で報告されている。第4地点遺跡では、ピット内だけに砂が入っているものと、床面や覆土にも砂が見られるものがある。また、ピット上面には厚さ2~3mmの固い粘土の層が何枚かあり、ピット内の砂は横縞状に堆積しているという^{註1}。ハマナス野遺跡では、砂または凝灰岩の粉が床面の一部に置かれ、ピット内にはやはり横縞状に堆積しており、用途については、石器製作に伴う水抜き^{註2}の穴が考えられている。

今回確認した小ピット2内の砂には、横縞状の堆積は見られなかった。また、壙口部よりやや下の位置に土器片が伏せられてあったが、こうした例は前記2遺跡では確認されていない。本竪穴床面から出土した土器片は、他には1片あるのみで、小ピット2内出土土器片は、意図的に伏せて入れられたものと考えられる。その意図は分明ではないが、剥片石器の製作に密接に関わるものと考えるのが妥当であろう。

以上、本竪穴の規模、床面の傾き、遺物の特異さと接合関係、さらに小ピット2の存在を考慮させると、本竪穴は、剥片石器製作を目的に構築されたものといえる。

2. 接合資料 (図43~45, 写真図版28・29)

11区・20区に、剥片が集中して出土した地点があった。(図44) これらの剥片を中心に接合関係を辿ってみると、ほぼ三つの母岩に集約した。(図45)

Aの石核・剥片は、大部分が11区の集中地点からの出土であるが、20・30区にも剥片が散在している。また、一部(表1 No.4)は竪穴内の柱穴1北側から出土しているが、これらの出土層位は、何れも床面もしくは覆土最下位であり、Aは竪穴と同時期のものといえる。

なお、11区集中地点出土の剥片のうち3点が、図32-17の石器と接合している(接合図は図43-2)ほか、図33-30の石器も同一母岩によるものである。

Bは、石核(図33-39・接合図43-3)が01区から出土しているが、剥片の殆どはAと同じ集中地点からの出土で、一部が20区に散在している。11区の集中地点における剥片の在り方は、AとBとが全く混在しており、Bもまた竪穴と同時期の所産と考えられる。

なお、Bに接合する石器及び同一母岩と思われる石器は、今回の調査では確認していない。

Cは20区にその中心がある例で、A及びBの剥片と同位置から出土しているものもあり、やはり同時期の資料と思われる。B同様に、同一母岩と思われる石器は出土していない。

以上の他にも多数の剥片があり、幾つかの接合関係が判明しているが、石核や石器と接合する例は確認できていない。

さて、これらの接合資料の意味をどう捉えたらよいであろうか。

まず接合資料Aについて考えてみたい。この資料は、図32-17の石器に剥片が接合したことで明らかなように、本遺跡内で石器製作が行われたことを示している。また、その分布からして、その作業場は11区の集中地点、20区、竪穴内の何れか、或いは複数の地点と想定される。そこで11区集中地点をみると、図44が示すとおり、ごく狭い範囲に多量の石核・剥片が集中している。石器製作の際には、剥片類が周辺に散るのが一般的であり、この集中地点が遺物分布域の外に位置することも考え合わせると、剥片類が一括廃棄された場所と考えるのが妥当であろう。

一方20区は、20-62区を中心に、20-72区など周辺にも比較的多く剥片が分布している。含まれる母岩数も多く、A~Cの接合資料以外にも幾つかの接合関係を確認している。剥片は礫皮を残すもの、大型のものが多い。また、台石・敲石などの礫石器も集まっており、石器製作に関わる作業、少なくとも目的剥片を得るまでの作業が行われていたことが想定される。

接合資料BもAと同様で、20区において剥離作業を行ない、不要な剥片類を11区に廃棄したものである。

接合資料Cは、打面の明確な剥片は殆どなく、分割のための粗割りが行われた段階の資料と考えられる。

3. 総 括

矢不來2遺跡の緑辺部にあたる今回の調査区は、少なくとも三つの時期に人々が何らかの活動をした場所であることが判明した。

縄文時代前期には、石器製作の場として利用されていたようで、20区の剥片集中地点及び竪穴がその中心となっている。両者の間には、20区で目的剥片を剥離し、竪穴内で二次加工を施すといった関係も考えられる。また、50区では擦石と台石のまとまりがみられ、これらを主として使用する作業、例えば植物の加工などが行なわれていたことが想定される。なお、この擦石・台石の分布とI群B類土器の分布とが一致しており、両者はセット関係にあると思われる。これに対し、竪穴内の小ピット2出土の土器片はI群A類であり、その分布の中心は30・40区にある。この分布域の差が、時間差を示すものか他の要因によるものかは明確ではない。

縄文時代後期の遺構は検出していない。出土土器片の数は8,860点と、前期の1,173点を大幅に上まわっており、分布の中心である20・30区では、土器片が重なり合った状態になっている。復元個体も底部のみのもも含めて42個体を数える。図46は、切断土器を除く40個体の接合関係を示したもので、各個体についてみると、一箇所にまとまって出土したものもあるが、多くはかなり広い範囲に散っている。これは、日常的に土器が使用されていた場ではなく、廃棄場として利用されていたことを示していると思われる。

続縄文時代の遺物は、恵山式土器片16点が出土したのみである。遺構も確認していない。恵山期の遺跡は、海岸砂丘や低位の段丘面に営まれている例が多く、本遺跡のように標高50m近い段丘上に所在することは稀であり、興味深いものがある。 (田才 雅彦)

註

1. 千代肇氏の御教示による。千代氏は、何回かに分けて砂を入れた結果、横縞状の堆積になったと考えられている。
2. 小笠原忠久氏の御教示による。

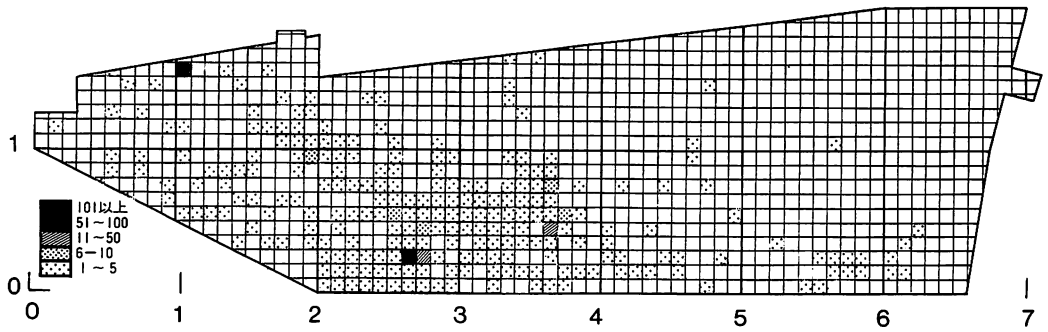


図44 剥片石器, 石核, 剥片出土分布図

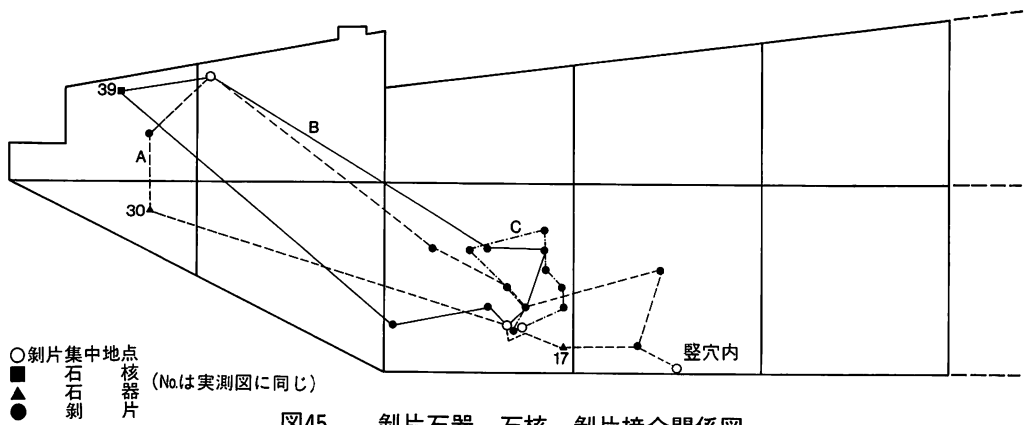


図45 剥片石器, 石核, 剥片接合関係図

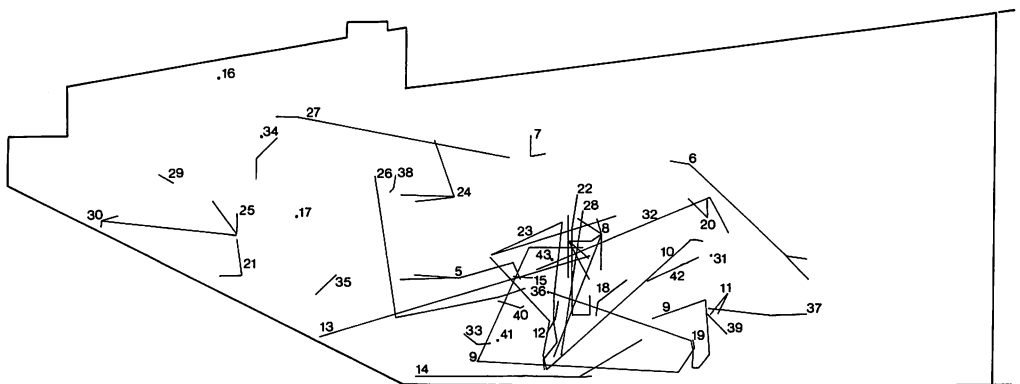


図46 復元土器接合関係(No.は実測図に同じ, 1~3は除く)

引用・参考文献

- 石岡憲雄 1986 「施文原体の変遷—円筒土器」『季刊考古学17号』
- 石本省三 1982 『森川A遺跡』 森町教育委員会
- 江坂輝彌 編 1970 『石神遺跡』
- 大沼忠春 1976 『元和』 乙部町教育委員会
- " 1977 『栄浜遺跡』 乙部町教育委員会
- " 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学第20輯』
- " 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(Ⅱ)」『北海道考古学第22輯』
- 上磯郷土史研究会 1963 『私達の郷土 その四 (社会資料編)』
- 久保泰 他 1983 『白坂』 松前町教育委員会
- 熊野喜藏・八木光則 1974 「茅部郡森町森川A遺跡出土の前期縄文式土器」『北海道考古学第10輯』
- 西連守健 1976 『松前町原口遺跡発掘調査報告書』 松前町教育委員会
- 佐々木竜男・片山雅弘・音羽道三・天野洋司 1970 「渡島半島の火山灰について」『北海道農業試験場土性調査報告書第20編』
- 瀬川秀良 1959 「北海道松前半島東岸の海岸段丘について」『東北地理第11巻第2号』
- 高橋正勝 1974 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化31』
- 高橋正勝・小笠原忠久 1980 「縄文文化前期・中期」『北海道考古学講座』
- 田原良信 他 1982 『上湯川遺跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会
- 千代肇 1972 『涌元遺跡』 知内町教育委員会
- 永田方正 1984 『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』
- 成田滋彦 1986 「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究3』
- 北海道火山灰命名委員会 1982 『北海道の火山灰』
- 北海道埋蔵文化財センター 1985 『湯の里遺跡群』
- " 1986 a 『木古内町札苺遺跡』
- " 1986 b 『知内町湯の里3遺跡』
- " 1986 c 『建川1・新道4遺跡』
- 町田洋・新井房夫・森脇広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学 Vol 51』
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ」『古文化財の自然科学的研究』
- 宮内崇裕・八木浩司 1984 「松前半島東岸の海成段丘と第四紀地殻変動」『地学雑誌93-5』
- 三宅徹也 1974 「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」『北奥古代文化6』
- " 1982 「円筒土器」『縄文文化の研究3』
- 峰山巖 他 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』 知内町教育委員会

付 編

発掘調査期間中に、茂辺地小学校6年生の子供達が度々手伝いに来てくれた。彼らの何本もの小さな手の協力は、慣れない現場仕事をしているお母さん方にとって何よりの励ましであり、その旺盛な知識欲に答えることは、我々調査員の大きい喜びであった。

彼らが書いて届けてくれた文章を最後に掲載しておきたい。

阿部匡博

ぼくは、発掘調査を見学して、いろいろなことがわかりました。お母さんたちが掘っていたところにいったときに、黒土が1cm積るのに何百年もかかると聞いてびっくりしました。それに土器や石器もいっぱいありました。ぼく達にも掘らせてくれた時、なかなか出てこなくてとなりになっていた、まさとし君ばかりでいました。ぼくの掘っているところが出ないので、場所をかえたけど出なかったです。ぼくは、土器や石器を出すのも大変なんだな—と思いました。

係りのおじさん達、いろいろなことを教えてくれてありがとうございます。

市川友美

わたしは、28日に発掘場所に行ってわかったことは、まず地そうのことや、縄文式土器のことやまだまだたくさん勉強になりました。いろいろなことを説明してくれたり、しおりを印刷してくれたりしてどうもありがとうございます。それから、実際に発掘をやらせてくれて、本当に勉強になりました。どうもありがとうございます。

内慎太郎

先生の顔を見てぼくは考古学者になりたくなった。一つ一つのことに、ねっしんに教えてくれる先生。じっさいに掘った時、ぜんぜん出てこない、少し頭にきた。みんな見つけているのを見て、くやしかった。調査している人に手さばきを教えてもらった。少しおこられたけど、それがなぜかうれしかった。お母さんたちもぼくたちに教えてくれる。顔を黒くして、やっと見つけた。「やった。」ただの石なのに、それがじゅうだいな物のように、とってもうれしくてたまらない。先生が「そろそろ終わるぞ。」と言ったけどまだやりたかった。また、あしたもきていいと言ったのがうれしくてたまらない。大人になったら先生みたいな人になりたいなあとつくづく思う。

先生、調査員の人たち、ありがとうございます。

飼取美雪

この前はどうもありがとうございます。いろいろ勉強になりました。それから、土をほった時、恵理香ちゃんとやって5つも見つけました。1つ目が見つかった時、「ヤッター。」と思って大声をあげてしまいました。

また今度行きますので、その時はよろしくお願いします。

小川こずえ

わたしは、28日の日に発掘に行っておわかったことは、地層のことや、縄文式土器の種類がいろいろあることです。それに実際に発掘させてくれたことです。残念なことに一つも見つけられなかったけど楽しくやらせていただきました。せつめいをしてくれたり、しおりを作ってくれましてどうもありがとうございます。

ほんとうにどうもありがとうございます。

太田真樹子

二年前の夏休み、上磯の教育委員会で主催した“昔の人の生活”に応募して昔の人と同じ様に、狩をする時に使う弓ややりを作ったり又それらを使って魚を採ったり、土器を実際に作り焼いたりしました。それで色々興味を持っていましたので、この見学が出来ると聞いてとてもうれしかったです。まず見て感じた事は、私が思っていたより住居あとがせまいな一と思えました。又、私達が生活しているすぐそばで大昔の人が生活していたのだと思うと、その当時はこの近辺はどのような状態だったのだろうと想像してしまいます。いそがしいのに色々、掘り方などを説明していただいて本当にありがとうございます。素晴らしい社会科の勉強が沢山出来、うれしかったです。

自分の目で見れた事を本当に感げきし、感謝しています。

北村彰敬

おじさんたち、5月28日の日は、どうもありがとうございます。とっても勉強になりました。ぼくたちのために、本も作ってくれましたね。とっても記念にのこりました。昔は鉄やプラスチックなどがなかったので、石などもつかっていたんですね。土器がなぜわれているかなどもよ〜くわかりました。6月6日の日はたて穴のあとも見せてくれましたね。ぼくは、いろんな面で勉強になりました。また機会がありましたらいかせてもらいます。

おじさんたち、本当にどうもありがとうございます。

西川基樹

ぼくは、5月28日にいったんだけど、すごく勉強になりました。それに見学なのに掘らせてもらってどうもありがとうございます。ときどきいきますのでおねがいします。

おじさんたち、大変ですけどがんばってください。

山田恵理香

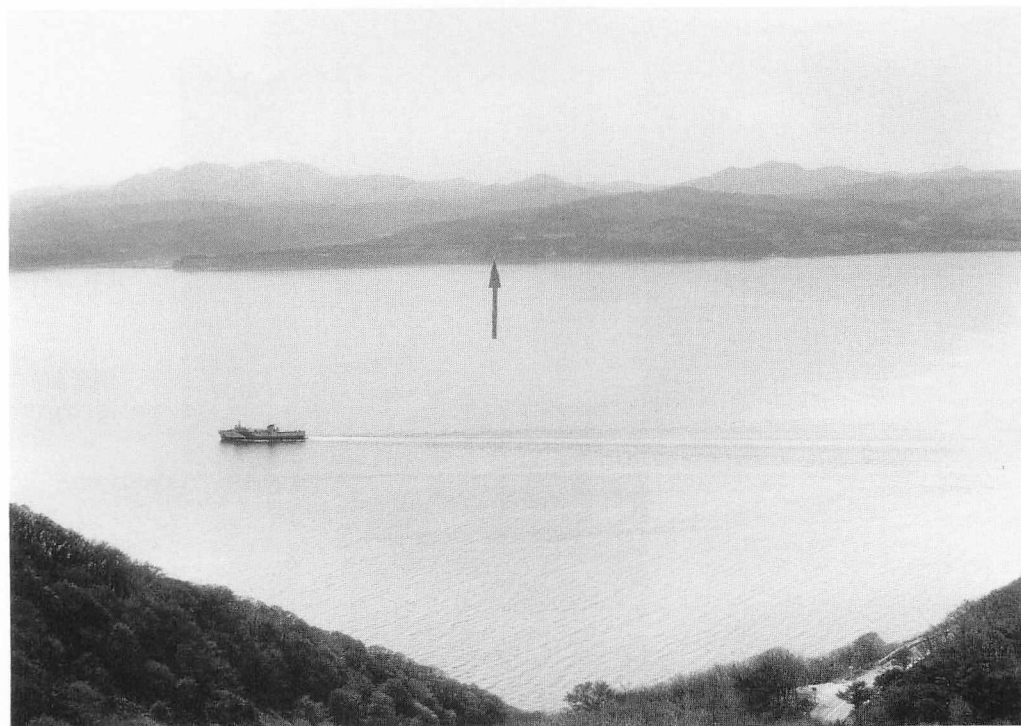
この前（5月28日）見学させてもらって、どうもありがとうございます。とても楽しかったです！そしていい勉強になりました。またきかいがありましたら行かせてもらいます。その時はどうぞよろしくお願ひします。



子供たちとの発掘調査①



子供たちとの発掘調査②



遺跡遠景（函館山頂から）E→W

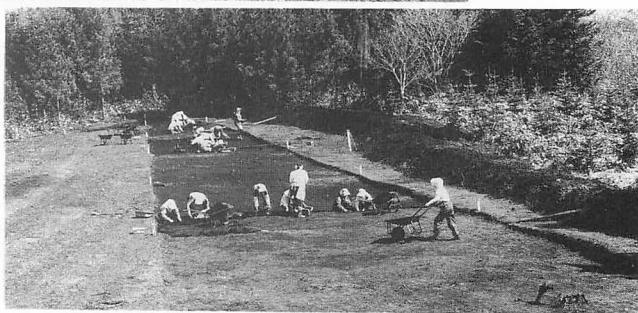


遺跡遠景（函館山頂から）E→W

図版 3



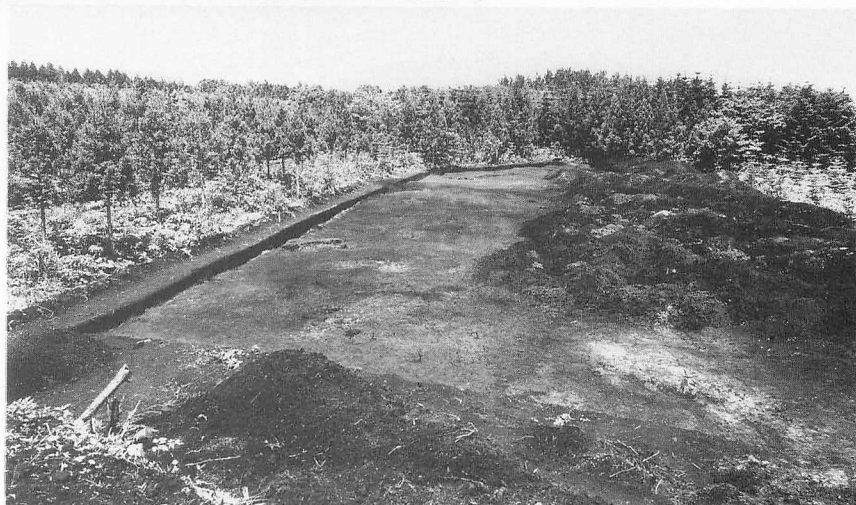
1. 調査前
S → N



2. 調査進行状況 (東側)



3. 調査進行状況 (西側)



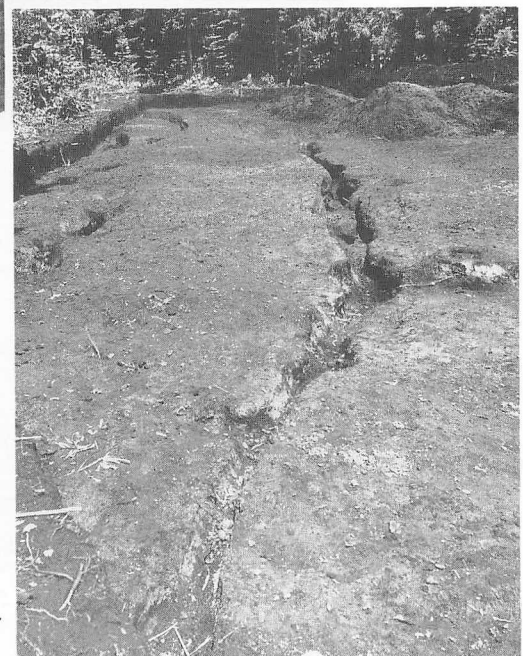
4. 調査後
S → N



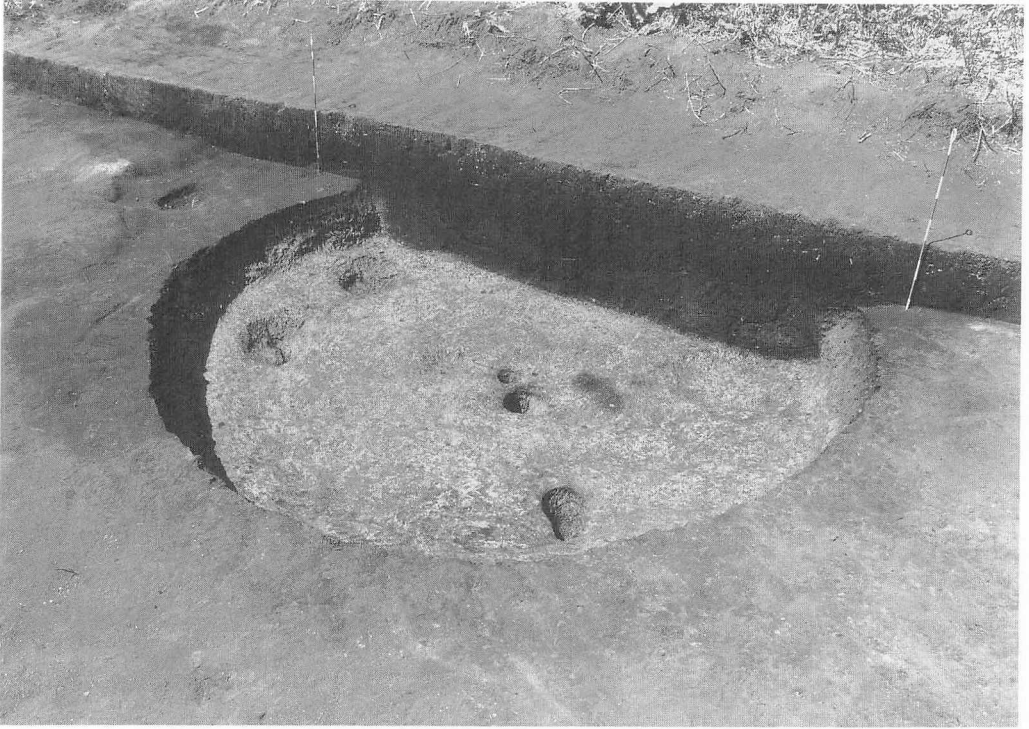
1. 調査風景



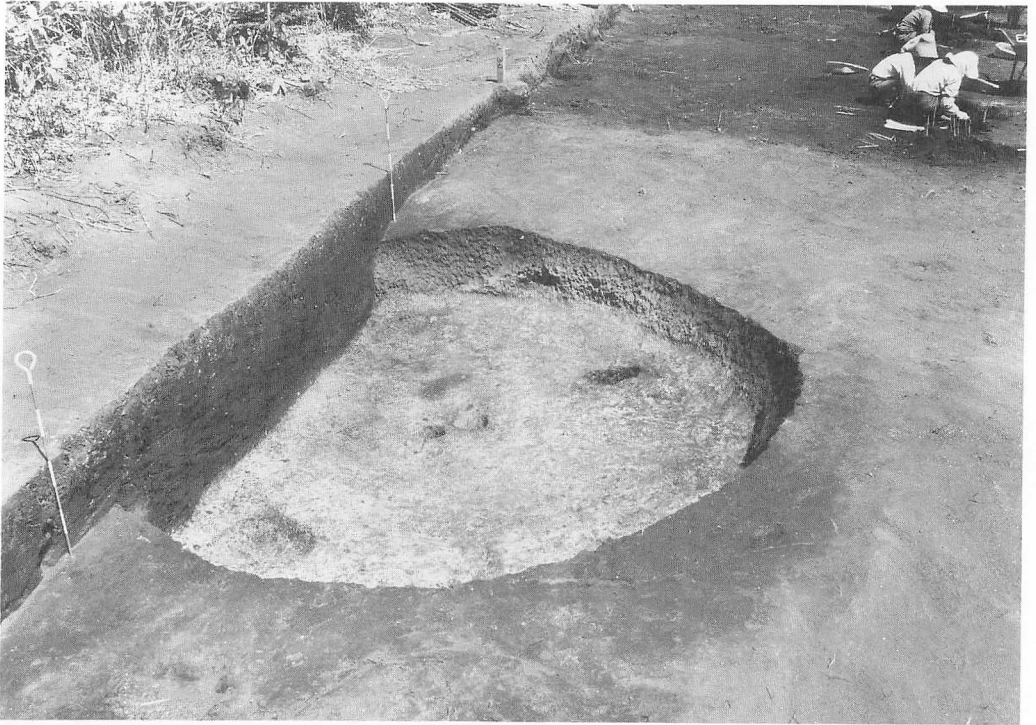
2. 調査風景



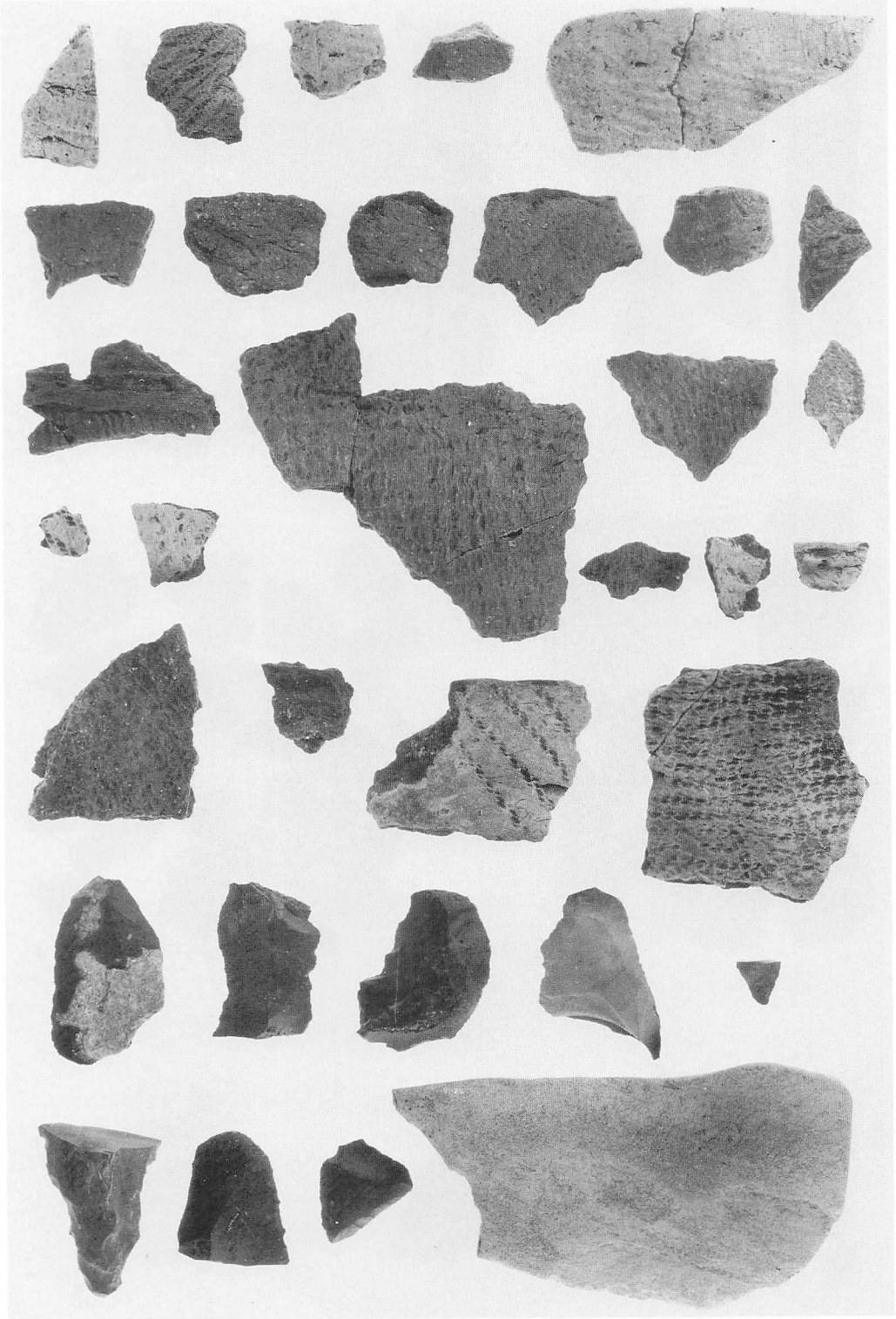
3. 検出された地割れ
(00, 10, 20区)



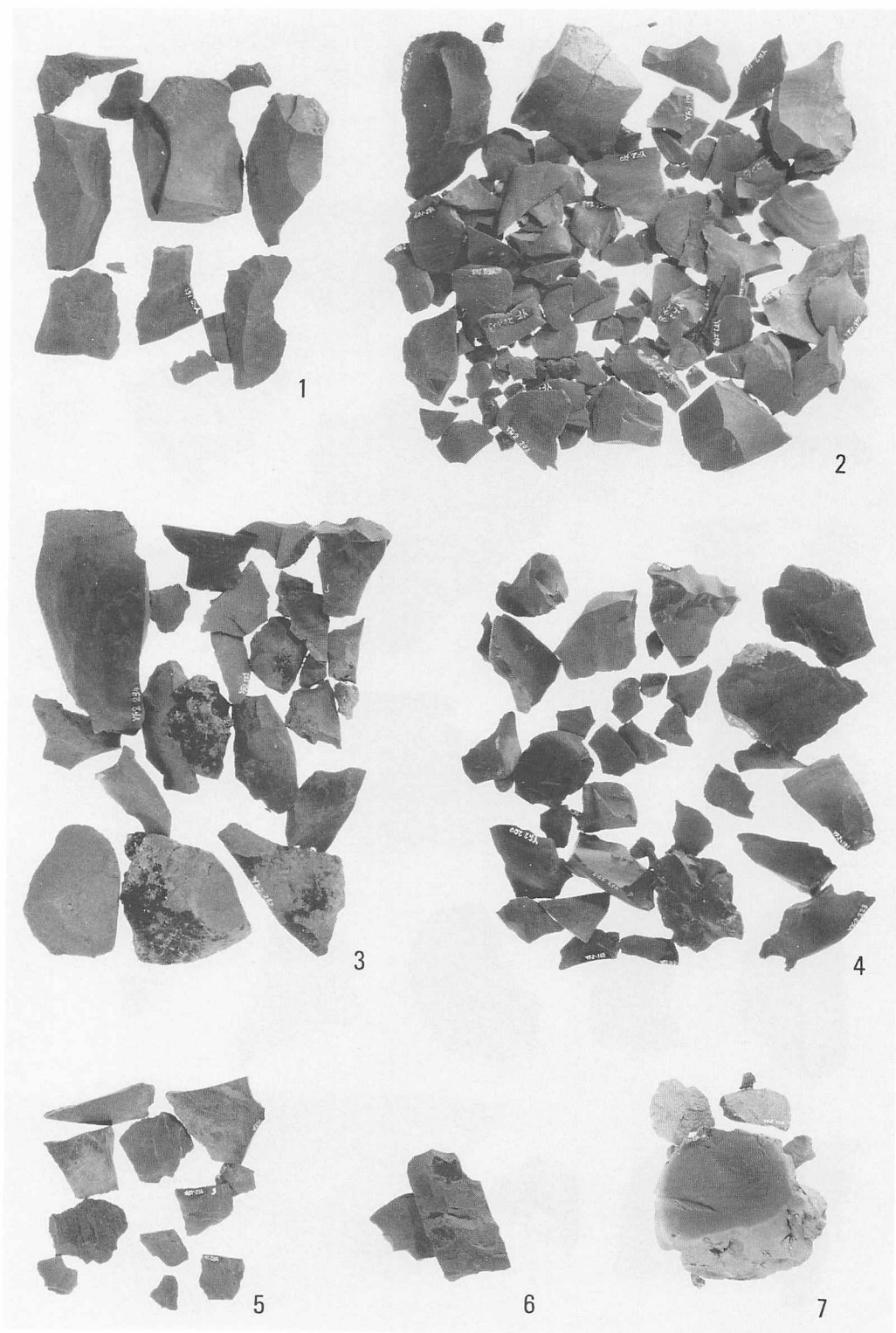
1. 豎穴 (NE→NW)



2. 豎穴 (SE→NW)



竪穴出土の土器・石器



竪穴出土の剝片



1



2



3



4



5



6

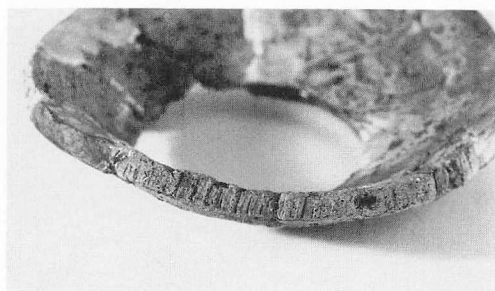
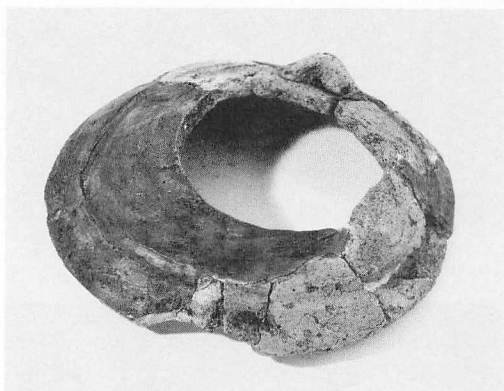
1 ~ 5 土器出土状况
6 剥片出土状况



1



2



3



4



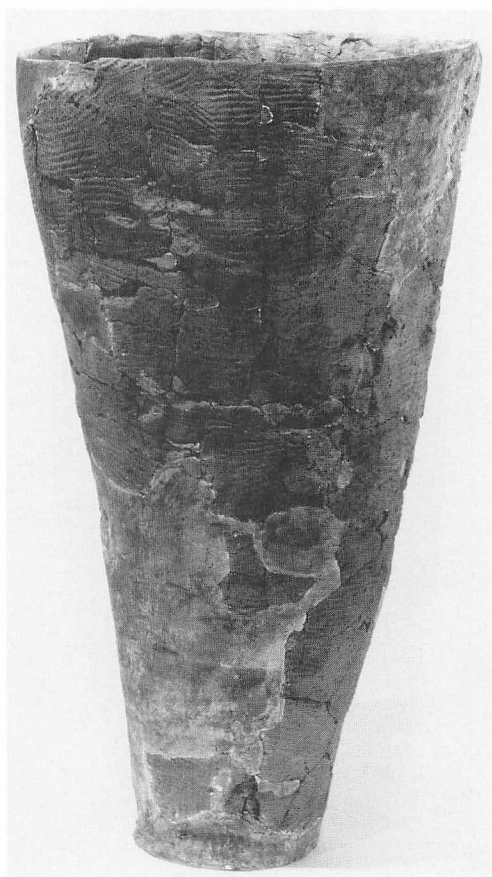
5



6



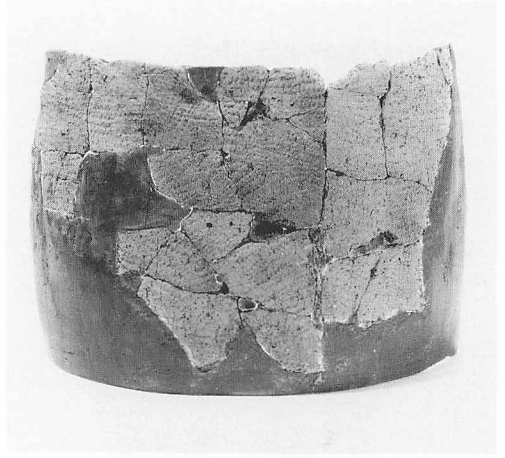
7



8



9



10



12



11



13



14



15



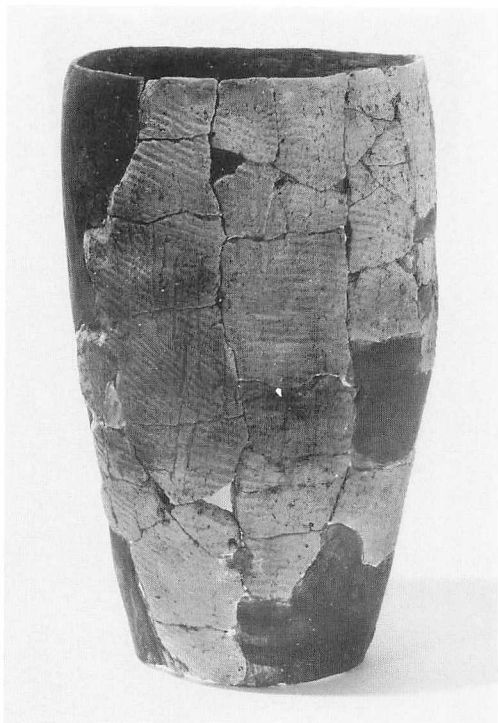
16



17



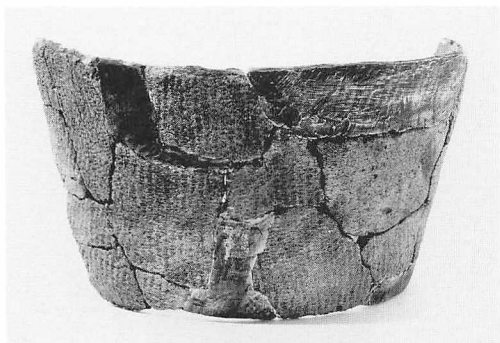
18



19



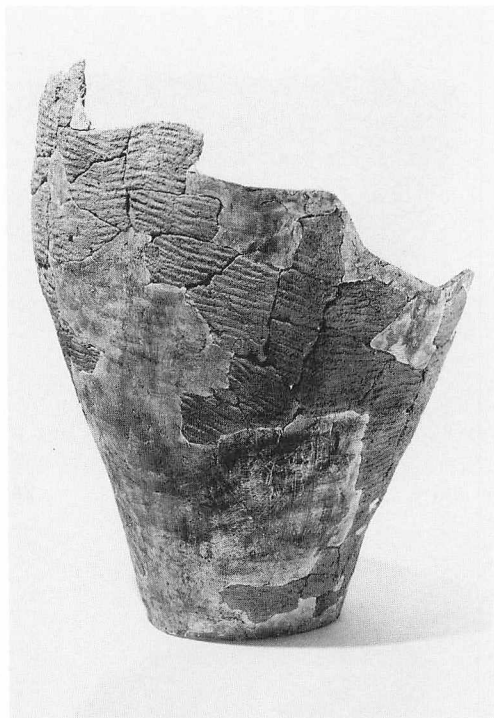
20



21



22



23



37



38



24



25



26



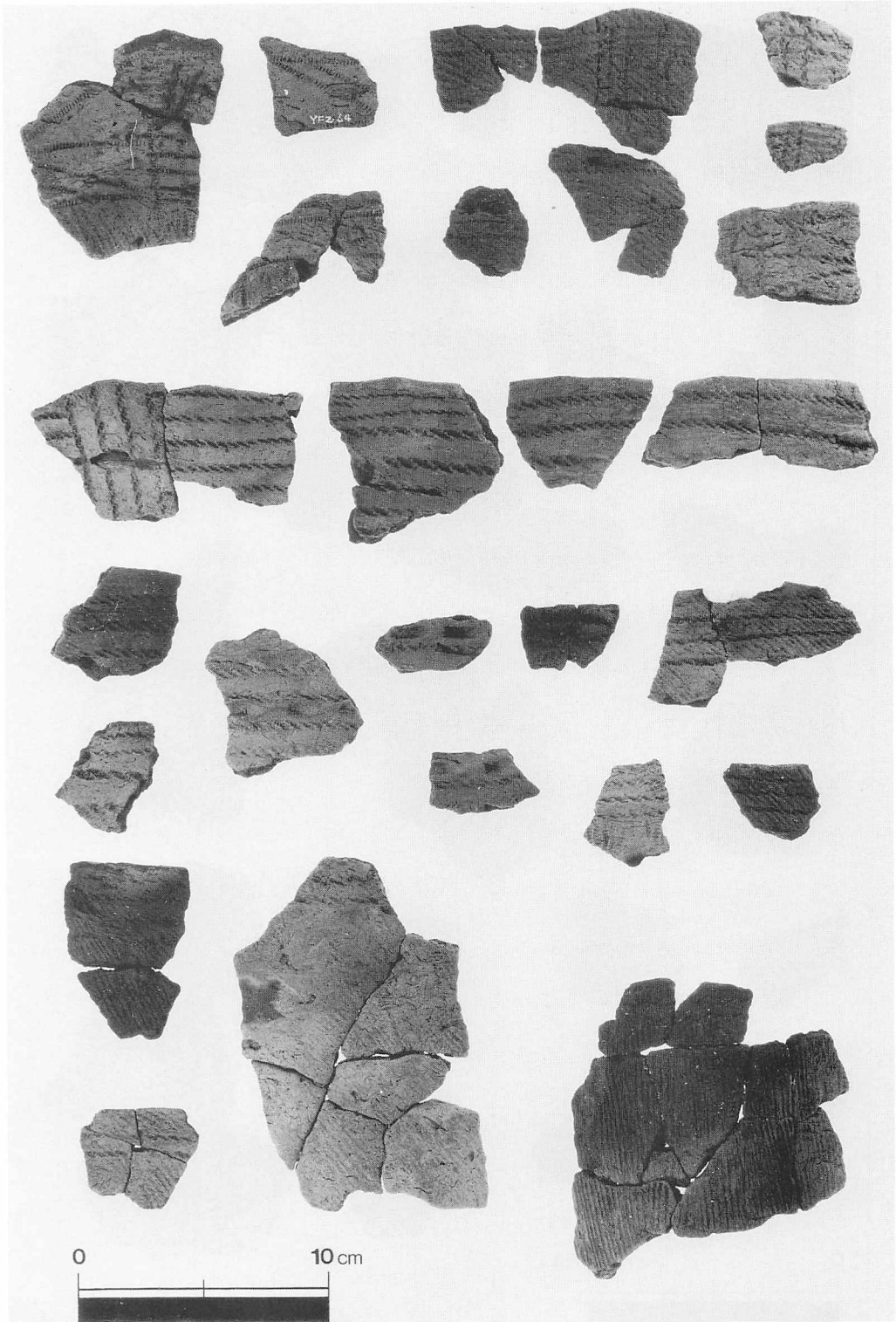
27



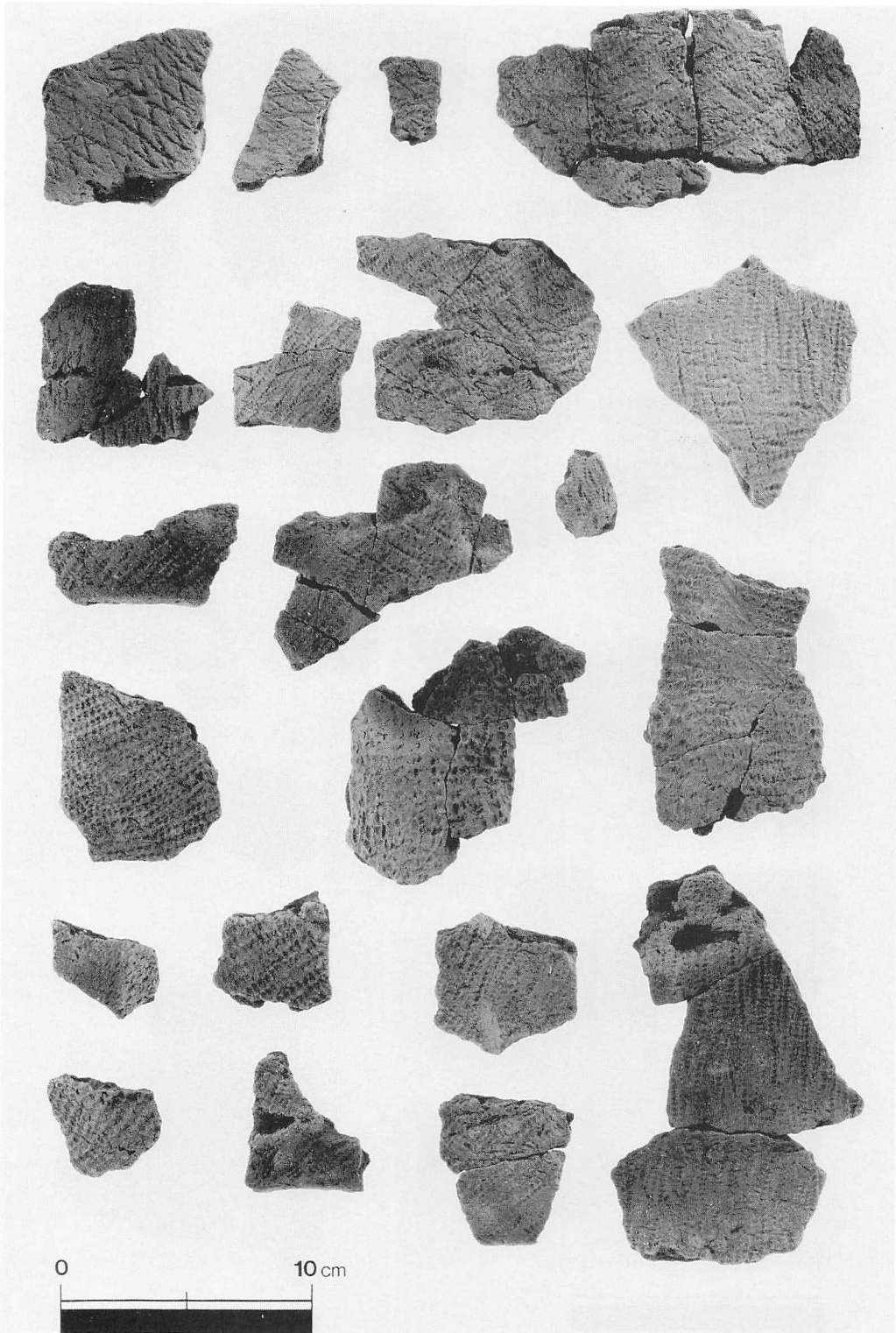
28



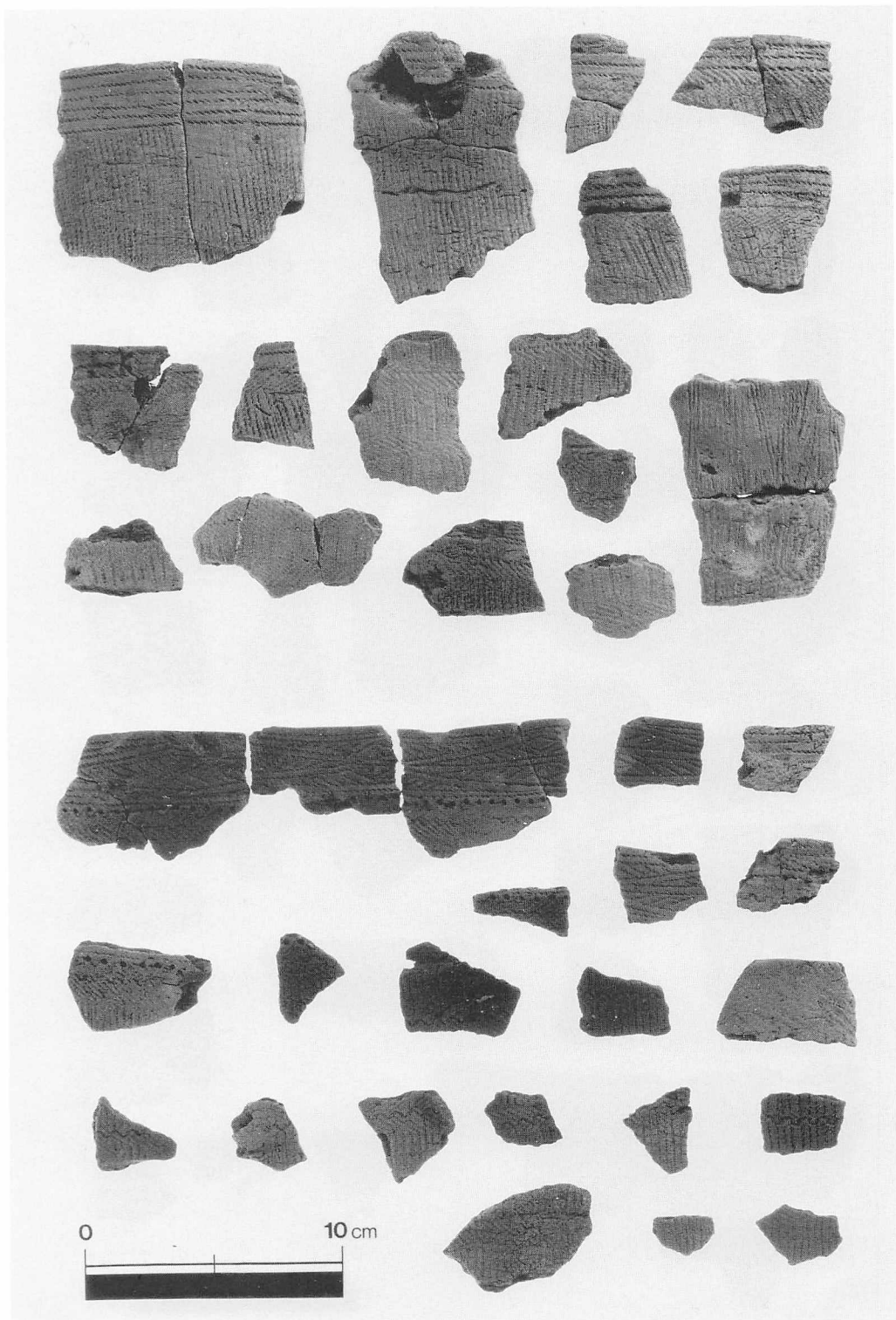
35



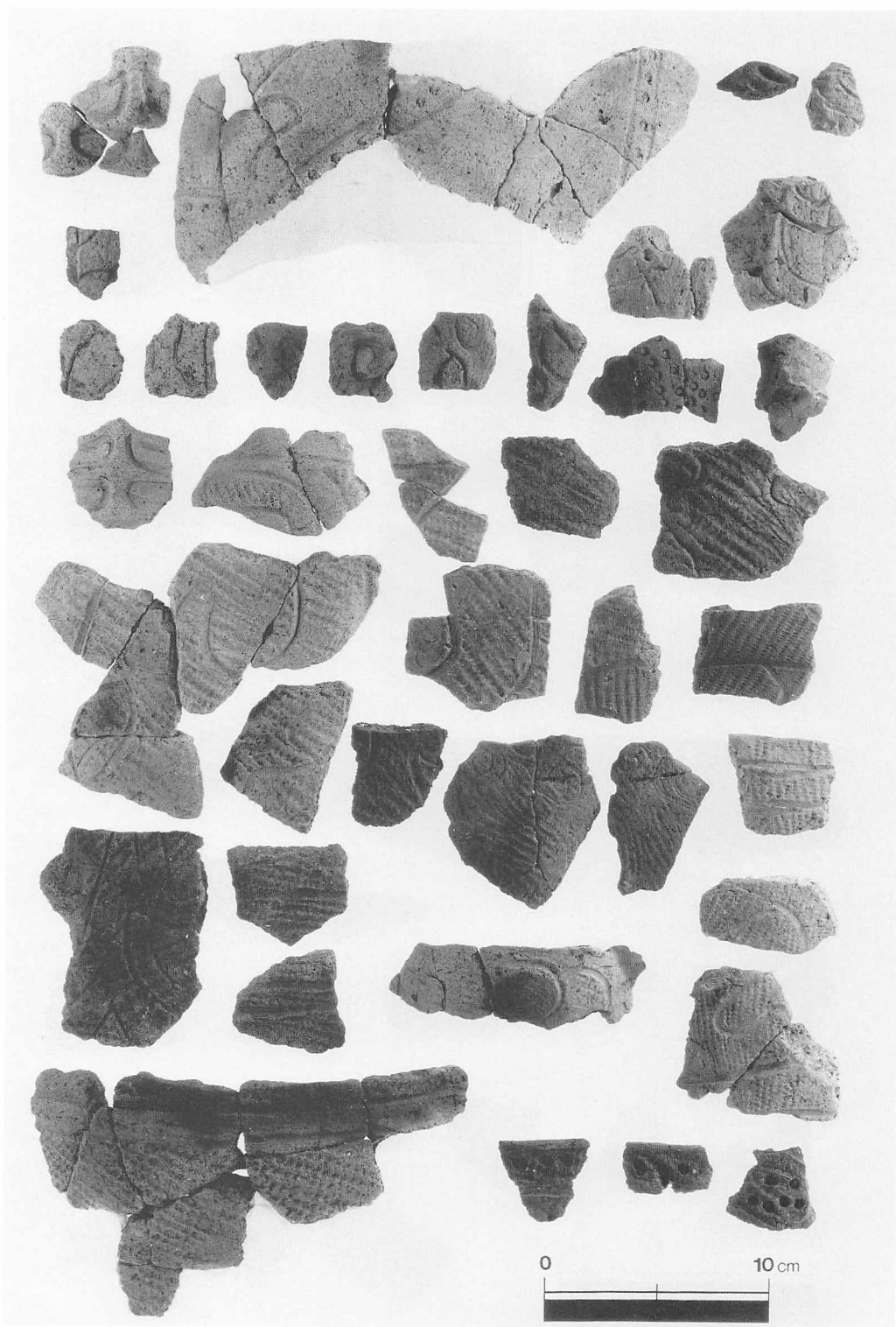
I 群 A 類土器



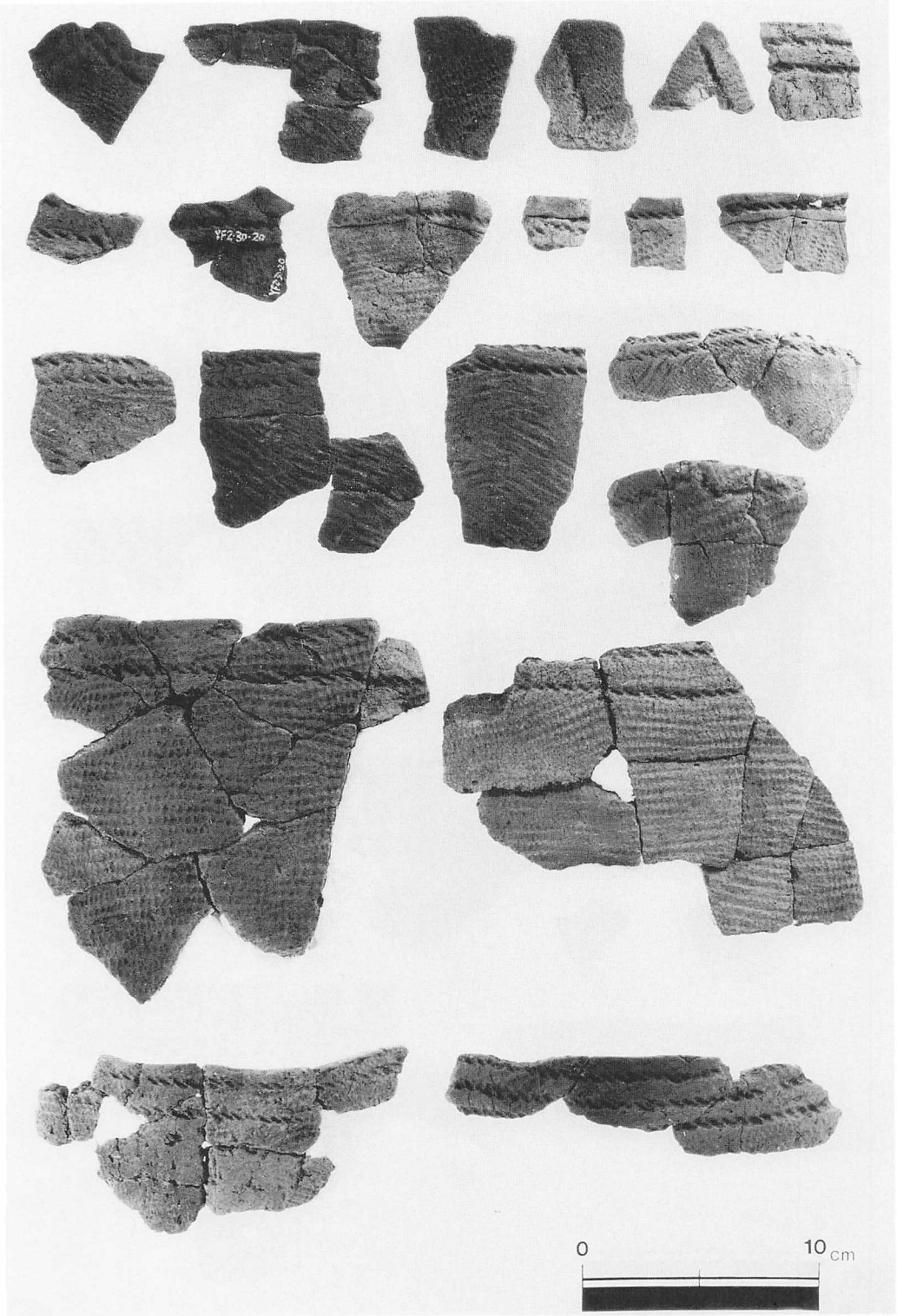
I 群 A 類土器



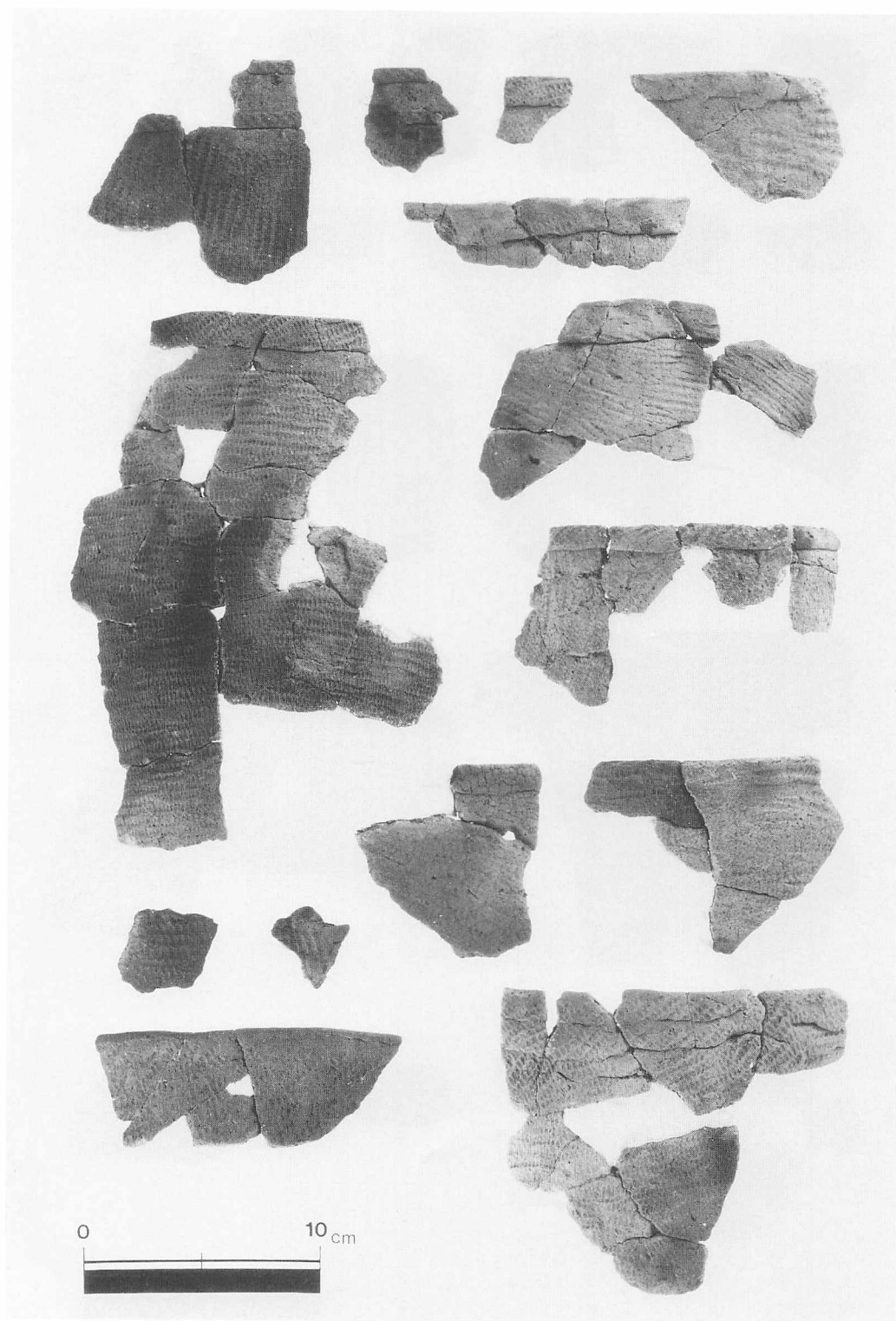
I 群 B・C 類土器



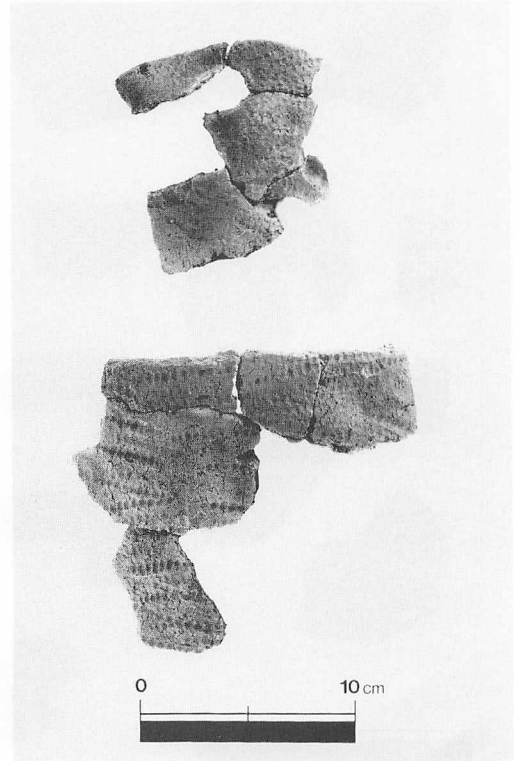
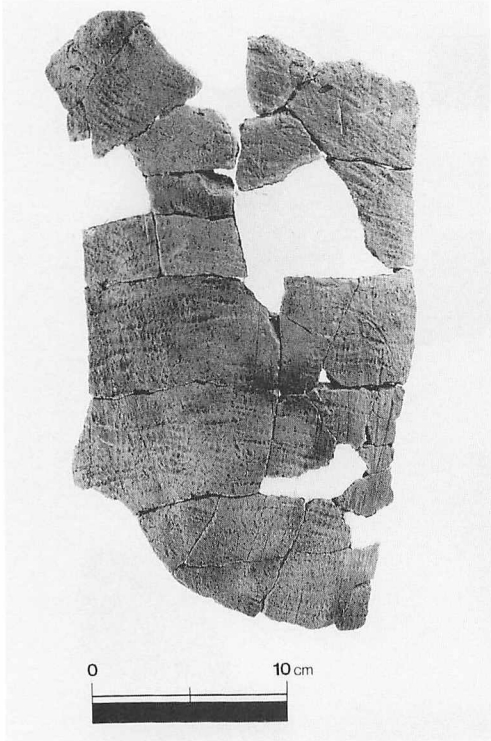
Ⅱ群A類土器



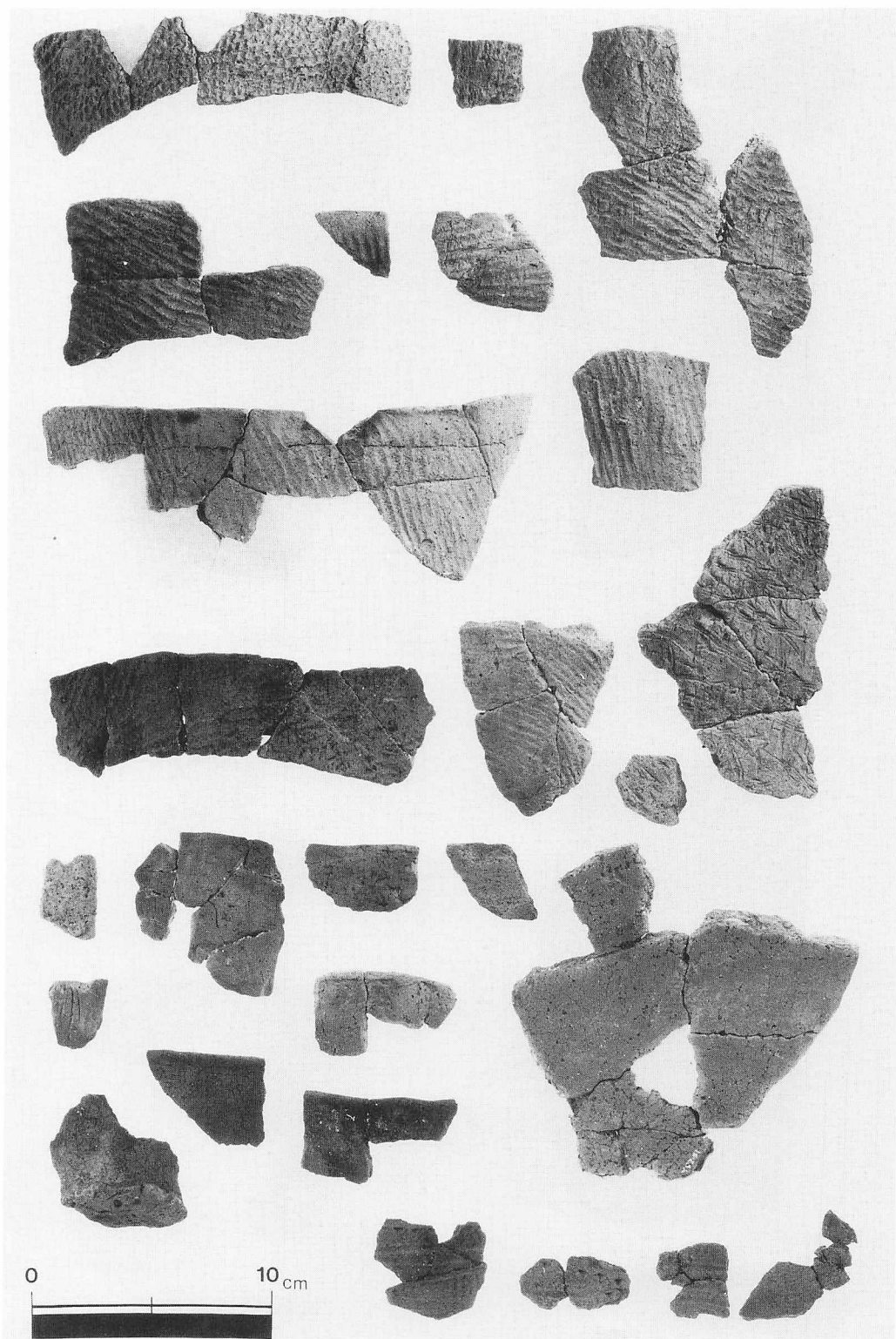
Ⅱ群B類土器



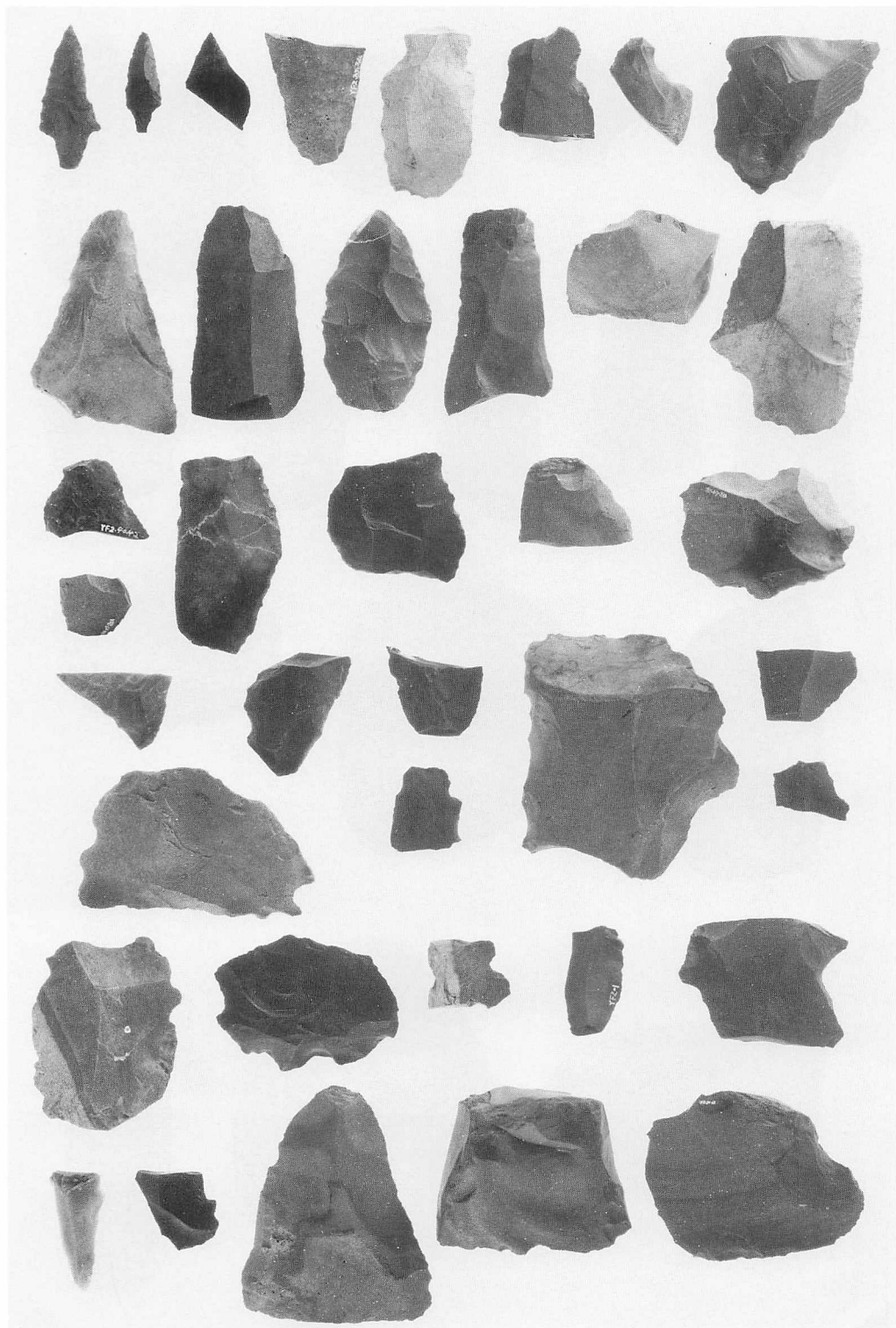
Ⅱ群C類土器



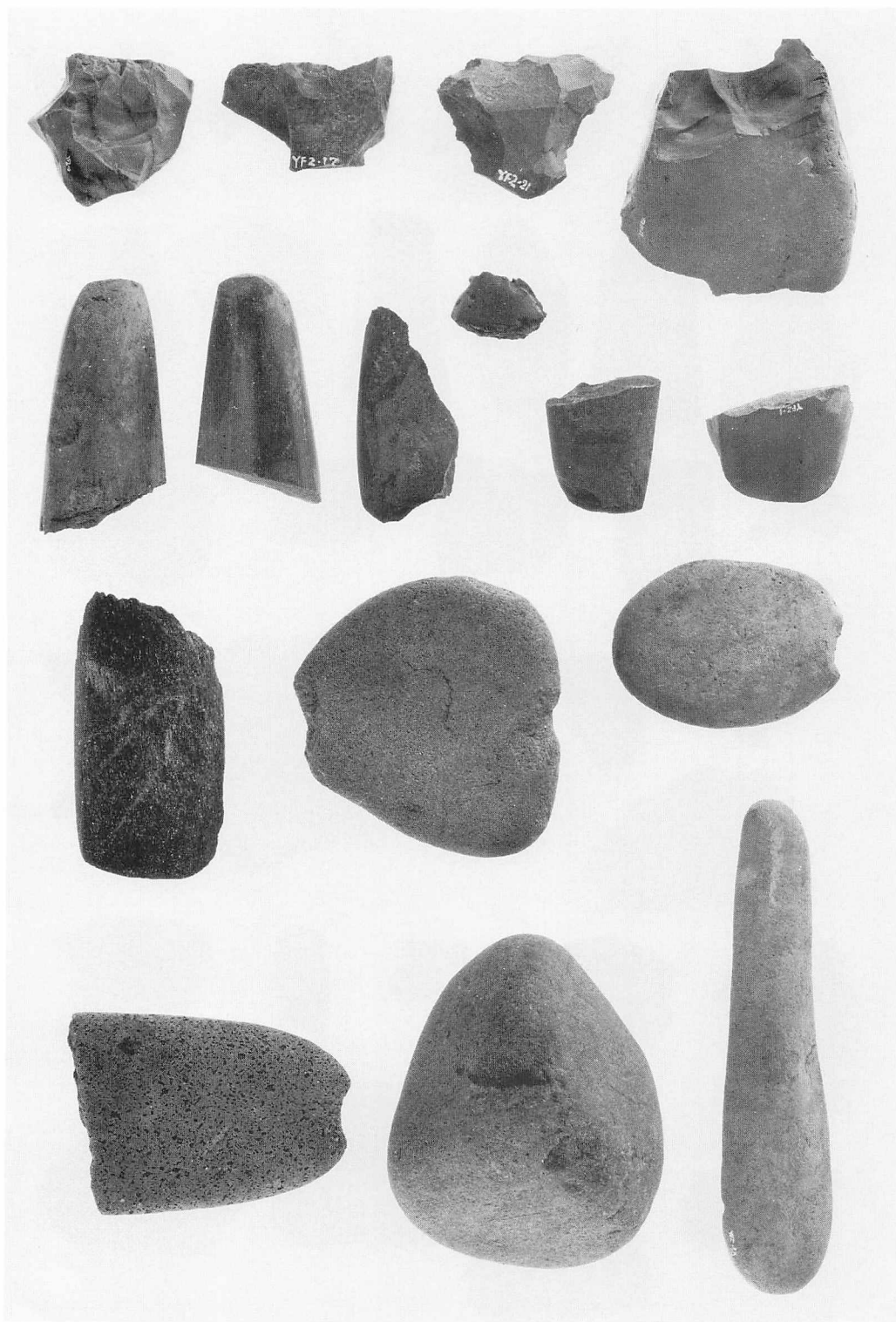
II 群 C 類土器



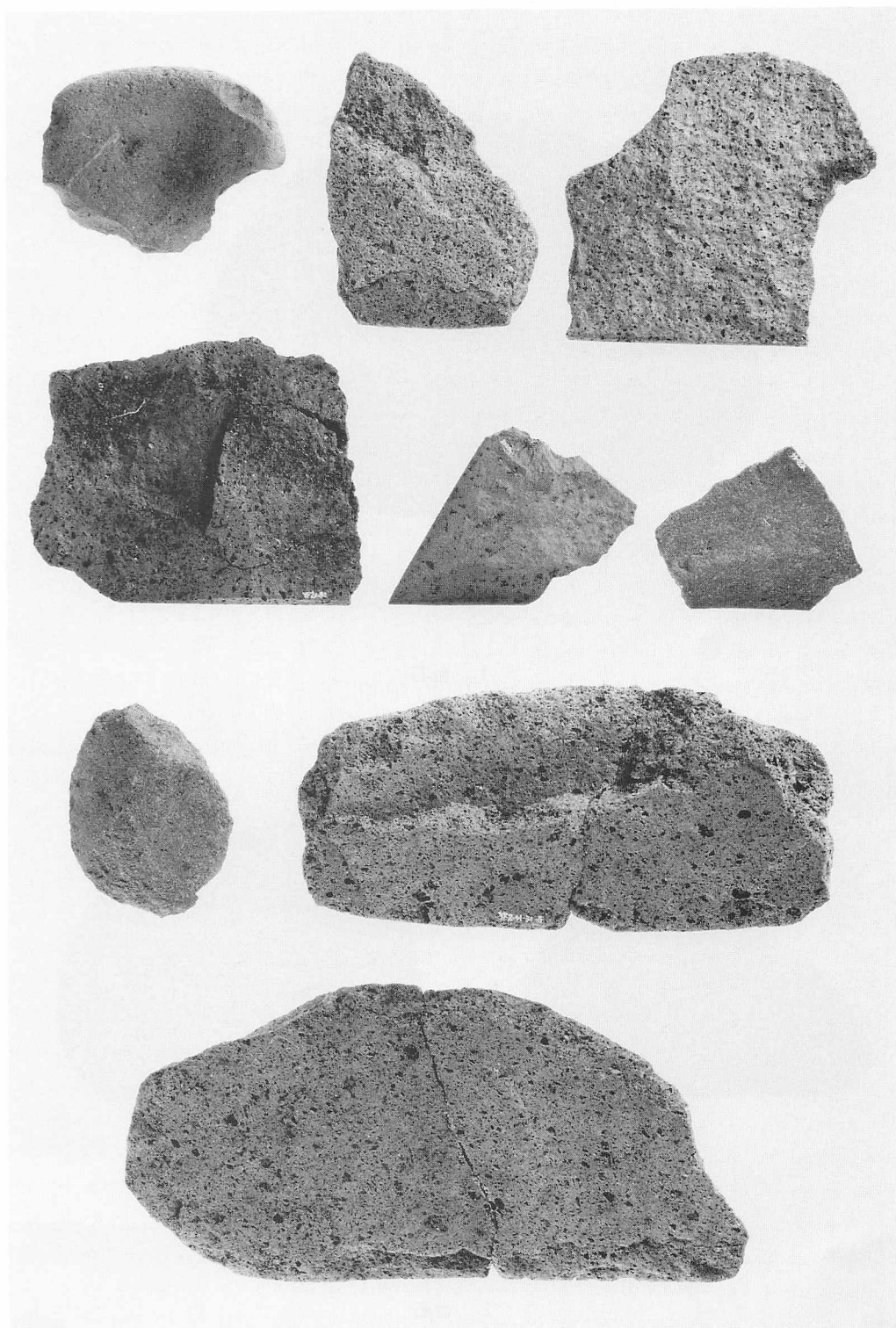
Ⅱ群C・D類, Ⅲ群土器



剥片石器



石核·礫石器



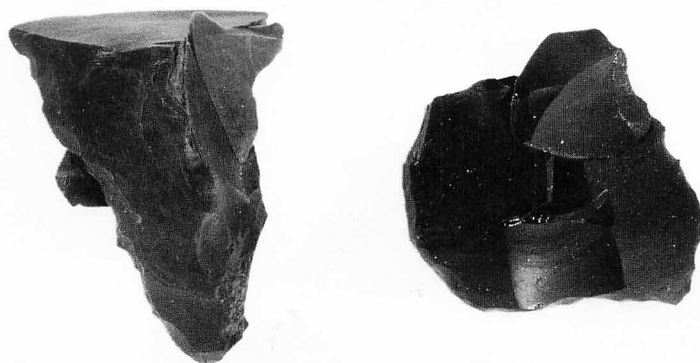
礫石器



1. 台石



2. 台石



1. 接合資料



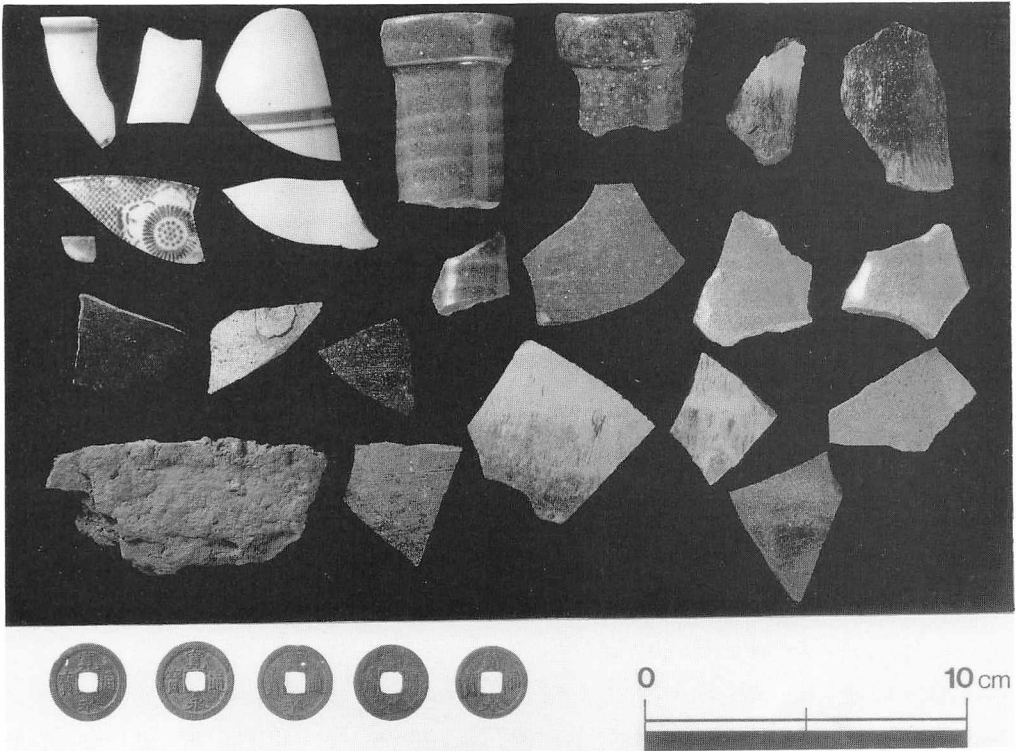
2. 接合資料A



3. 接合資料 B



4. 接合資料 C



1. 矢不來2遺跡・矢不來天満宮跡表採の陶磁器・鉄製品・寛永通宝



2. 遺跡から見た函館山



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第37集

上磯町 矢不來2遺跡

— 一般国道228号上磯町矢不來法面防災工事

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和62年3月31日 発行

編集・発行

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南26条西11丁目 TEL(011)561-3131

印刷

(株)総北海 札幌支店

001 札幌市北区北30条西5丁目 TEL(011)757-6995
